

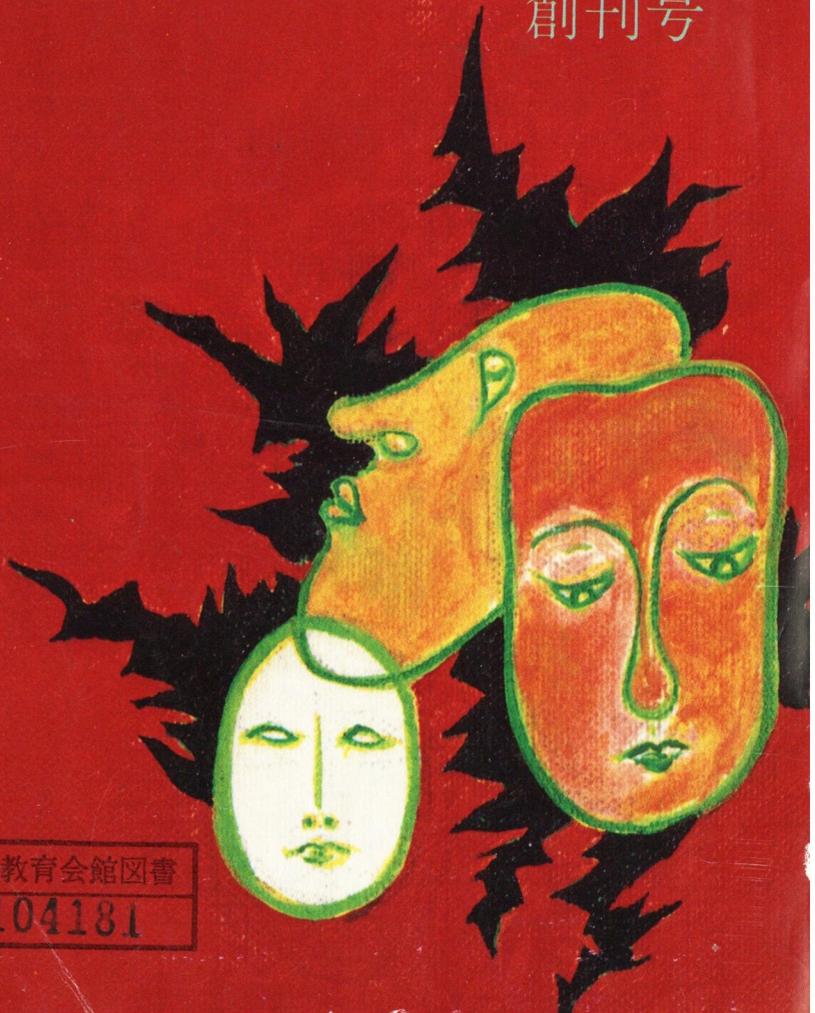
新しい家庭科

逐次刊行物
昭5 8.17 和
婦人教育会館
情報図書室

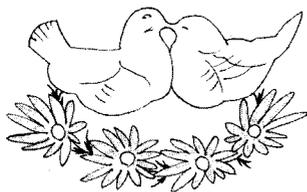
こ

ウ イ

創刊号



国立婦人教育会館図書
和 104181



創刊のことば

自立した男と女を、人間らしい生活を、差別のない社会を、育くみ創り出す力を培うのが、新しい家庭科であると確信する私たちは、同じ志を持つ方たちとともに力をふり絞ろうと、雑誌「新しい家庭科―We」を創刊します。

家庭科教師、家庭科教師養成の立場にある人、家庭科教師を志す人はもちろん、家庭科に関心を抱き、ほんとうの家庭科の創造を願う人々に、心をこめて呼びかけます。

「We」の仲間になって下さい。

「We」の仲間をふやして下さい。

くらしが歪み、教育の荒廃が進む中で、子供たちは苦しんでいます。あえいでいます。人間が生きていく上で、最も大切な教育が忘れられています。

子供たちに、人間らしい生活とは、どんな内実を持つものなのかを知らせ、その力を創り出す力を培いながら、生活をいとおしむ感受性を豊かに育くみたい。男も女も、生きる上で一番大切なことは何かを、学校教育の中ではつきりつかませたい。そう願う人が確実にふえてきました。

一方、女性差別が生まれてこの方の長い歴史には、いま光が射そうとしています。女も男も、自由な個人として生きるために、固定的な性別役割分担意識を、教育によってつき崩さなければならぬことが明らかに became したのです。

自分の生を、だれかによっておとしめられたくない私たち。

自分の生を、自分で引き受け、うたい上げたい私たち。

差別のない社会を築きたい私たち。

いま、点の存在を脱して、線となり、輪を結びました。

「新しい家庭科―We」は、私たちが蓄えてきた力量を示すものとして、ここに生まれるべくして生まれたのです。



創刊のことば

いま、いでたつ『We』に贈る 各氏より	2
いでたちぬ、いま	
どういてたつのか/いまの教育状況とかかわって.....	新島 淳良 4
家庭科教師たちよ!/初めて教壇に立つあなたに.....	和田 典子 8
いま、教師であることは.....	中嶋 里美 10
いでたたん、いざ/男たちよ!.....	宮 淑子 16
女たちよ!.....	ますのきよし 20
私のいでたち/学校を見てしまった私	齋藤美保子 24
24歳、社会へいでたって、1年	小田亜佐子 26
新しい家庭科を創るために	
小学校では/生き生きとおもしろい授業を.....	名取 弘文 28
中学校では/平等と平和なくらしを創る家庭科をめざして	熊本家庭科サークル 35
高等学校では/私の保育・家族領域 教材編成の視点	寺島 紘子 41
大学では/私の「初等家庭科教育法」	牧野カツコ 47
counselling 入門(現場から)/はじめに	児玉すみ子 53
視点/〈学ぶ〉とは.....	長谷川 孝 56
発 言	
学習の主人公たち/家庭科ってこんなことするんだよ.....	谷塚小学校5・6年生 58
明日の家庭科教師たち/私が受けた家庭科、私がしたい家庭科.....	小林 悦子 61
市民として/身分制度の砦、家庭科女子必修	橋本チエ子 64
親も言いたい/自主退学という名の切り捨て	竹見智恵子 66
教師のつぶやき/自縛の縄を解きたい	柴田 栄子 67
Weの読書室/大河の岸へ	横山 雅子 68
テレビ残像/『想い出づくり』結婚願望、の実像.....	野村 康子 69
銀輪のうた/他人のこわざ	栗原 実抄 70
K子さんちのね子たち/花になったシロ	さとうけいこ 71
丙十舞雅里バラード/(1).....	門野 晴子 74
波/いでたちぬ、いま.....	半田たつ子 72
こんにちは!	馬場 洋子 60
アンテナ 75 十字路 76 わたくしからあなたへ 78 『We』 EDITOR'S NOTE 80	
	表紙 馬場洋子





いま、いでたつ「We」に贈る

飯野 こう

「We」の灯がつかまりました。人生行路には、落ちこぼれ、立ちすくみうずくまっっている子供たちが溢れています。彼らを抱き起こし、勇気づけ、新しい家庭科を目ざして、みんなで力強くふみ出しましょう。

「We」の灯を高くかかげて……

小山内 美江子

子供たちを思うとき、未来を思うとき、それを思わぬ人たちによって、教育をいじられるほど、耐えられないことはありません。

家庭科とは、鎖の輪のようにつながった生命の遠くからの流れを生きる智慧とし、尊厳として存在するものと思います。新しい家庭科雑誌「We」の創刊を、心からお祝い致します。

落合 恵子

すべての社会的な歪みの根源に「差別」がある。そこに「軽く扱

われる」生命を見る。あくまでも独立した一人人として、平和に、自由に、なによりも「自分らしく」生きる社会を創りたい……。いまこそ、優しく熱い人間性の復権を！ 誰のためでもなく「We」のために。

鍛冶 千鶴子

名は体を表すというが、「We」とはまた何と「愛い」命名をされたことか。私たちは、私たちの「We」を通じて、私たちお互いを固く結びつけ合うことだろう。「新しい家庭科——We」が、私たちの連帯の核となり、その輪を広げていくことを期待し、心からの声援を贈りたい。

柳田 真澄

子供たちが次の時代を幸せに生きることができるよう、価値ある家庭科教育のビジョンを求めてゆきたい。そして、すべての子供たちが男女共学の家庭科を学んでほしい。これらの願いをこめて——。「We」 will be the light of every human being.

佐々木 保行

家庭科教師は幸福だ。たけり立つ暴風雨の

海に、航海の安全を折って照らしつづける灯台があるからだ。今度、灯台の光が届かぬところがないように、新しい強力な灯台が建立された。これで遭難はなくなると船乗りはいう。日本の海に平和が訪れた。この喜びをみんなで噛みしめたい。

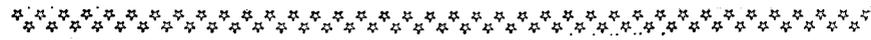
斉藤 千代

ウイ、有為、初、宇為、We、Oui！
「私たち」の初々しい思いをあつめた「We」。ひとつの雑誌につながる、たくさんの「私たち」を感じます。

八〇ページにこめられた重い思い。支える熱い心。その初心をたいせつに、ますます有為でありますよう、Weの中のIとして折り続けます。

塚越 敏雄

上からの、教育内容の統制と、下からの、画一化を望む教員の精神構造とが相呼応し、多様な実践や考え方、あるいは地域に根ざした教育を押しつぶそうとしています。教えるという営みは、学ぶ者とのかわりて生まれるし、教える者も





おもしろさを感じるものでなければならぬでしょう。現在の教育状況に楔を打ち込むものとして、「We」に期待しています。

*

永畑 道子
 舞り去ったはずの戦前の復活を私たちはけつして許さない。自分自身の「作られた性」とたたかい、明日を変えるために、子供たちに、当たり前の人間のかかわりを教えるために、学校で家族の間で、そのことを語り得る唯一の場、「We」を支持し、「We」に拠ることを、ほこりとします。

*

樋口 恵子
 「この世では何事でも善い事なら必ず最初にはだれかしらに笑われるものだ」とはディケンズ(クリスマスCarol)のことば。「笑われる」は「妨害される」と言いかえてもよい。「We」の仲間がひろがる時、善いことがあたりまえになる。男女とも自立した人間で

あることがあたりまえになる。

*

広田 寿子
 みんながなんでもよく知っていて、その上でこうなっているのではないところに、むしろ救いがあると思います。かんじんなことは、一人一人がしっかりと現実をつかむ努力を重ねることでしょう。「We」がそのための有力な手がかりになることを、何よりも期待しています。

*

本多 公栄
 たしかに、「もう一つの教科書問題」でした。「We」の門出、そして発展は、家庭科教育の発展にとどまらず、日本の教育の正しい発展を支える重要な一石だと思えます。歴史教育・社会科教育の発展にかかわる一人として、「We」の創刊に、強い連帯の拍手を贈ります。

*

丸岡 秀子
 半田さんは、わたしの古くからの友人です。こんどの新しい旗上げが、大切な事業だけに、ぜひとも成功いたしますよう。わたしもできるだけの応援を惜しまぬつもりです。

市川房枝さんの最後の情熱は、「家庭科」

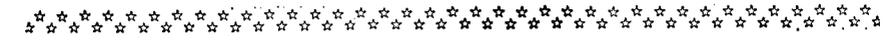
問題にかけられていたようにも思われるだけに。

*

森 幸枝
 創刊おめでとうございます。近來、急速に進む教育右傾化の中で、決断と勇氣と確信で今日を迎えられた編集者に対して、敬意を表し、一層のご健闘を祈ります。本誌が常に、迷い悩みながら、新しい家庭科を探っている現場の家庭科教師のよき友でありますように。

*

山本 松代
 いま、いでたつ「We」にお願、新しい家庭科が出現した当初は、小学五年から高校三年まで男女共修であったのです。それが崩れていった一大原因は男子生徒にも魅力ある家庭科クラスがもてなかつたことです。共修を再実現するために、理論だけでなく、共修のためのノーハウを大切に、新鮮に開発し続けて下さい。



どういでたつのが

—— ———
いまの教育状況とかかわって

新島 淳良

私はこう思う。いまの教育状況は、「科学技術」を、専門家である教師が生徒に教えている、それがいちばんいけないことだ。なぜか。第一に、それは教育ではないから。第二に、いまのやりかただと科学や技術が生かされないから。

「科学技術」にカギをつけたのは、いわゆる、科学技術、いわゆる、学問の意味である。あるいは死んだ科学技術、死んだ学問の意味である。なぜ死んだと言うか。それは、生ま身の・生きている人と人の関係から切り離された、コトの体系だからである。人と人の関係では、専門家とシロウトという関係もふくまれるがそれはごく一部である。それはつねに生きた人間が生きた人間とあい対している。それにたいして、コトの体系を伝える（教える）（授ける）といういとなみでは、コトの体系、つまり科学技術の専門家が一方に立ち、もう一方にその道のシロウトが立っているだけである。

この二つの極を検討してみると、シロウトの生徒のがわは、あきらかに生ま身の・生きている人間である。だが、もう一方の極に立

っている「教師」は生ま身の人間として生徒にあい対しているだろうか？ それはこまかく分けられた専門のコトの体系と、それを伝達する技術の機械として生徒にあい対している。だからこそ、それはよくできたティーチング・マシンでおきかえることができるのであり、最近バイオニアで発売されたビデオディスクのようにランダムアクセスが可能な学習機械ならば学習する側が選択して問題が発展的に解決されてゆくようプログラミングされているから、能力の低い教師よりまじだということにもなりかねない。

むかし、孔子の時代の学園で、「学」とよばれていた学問は、そのような、機械でおきかえられるものではなかった。学ぶとはまず師をえらぶことであり、師と弟子（生徒）とは生ま身の人間同士の生きた関係であり、師が教え、生徒が学んでゆくにしたがつて、両者のあいだの関係は深くこまやかに、やさしさ（仁）にみちたものに変わっていった。生徒が学んだことの結果は、生徒とその周囲の人、両親やきょうだいや近隣・親戚、友人とのあいだの関係がよく

なることである。「さすが学問をした人はちがう」とは、こういう人と人の関係を、磁石の針がつねに北を指すように正しくコントロールする能力の有無を言った言葉であった。

わが国でも江戸時代まで、師をえらぶことができたときには、学問をする、教育をうけるとは、こういうことを意味していたのである。明治以降、義務教育制が布かれてから、初・中等教育では、また大学においても徐々に、生徒児童は師をえらべなくなつた。生徒は、あたかも囚人が監獄を選べぬように学区の学校に收容され、囚人が看守を選べぬようにお上の任命した教師について学ぶことを強制されるようになった。これも、教育とは「科学技術」を専門家である教師が生徒に教え授けることだという思想が支配的になつたからである。

いまの教育のやりかたでは科学や技術が生かされない、とはどういうことか。生きる・生かされるのは、生長するということを前提としている。生長するといえれば今日ほど科学技術が急速に生長している時代はない。情報量は幾何級数的に増加している。今日の専門家は、いずれもその専門の分野だけでも日々増大する関連情報の洪水をさばききれなくなっている。そのうえにテレビやマス・メディアをつうじて、あらゆる分野の情報がおしよせてくる。

その情況は、原子炉の大型化を例にとるとわかりやすい。すでによく知られているように現在世界の原子炉は大型化しつつある。それにともなつて放射能強度の増加がみられる。だがそれだけの中性子に耐えられる材質は、まだ開発されていないのでしゅつちゅう故障がおこる。それで、大型の原子炉ほど稼働率が低くなつてきている（里深文彦氏による）。今日の情報量の増加ぶりを原子炉から出る放

射能強度の増加にたとえれば、情報の受け手たる個人は、「材質」が「それに耐えられぬ」防壁にたとえられよう。自分のアタマではとうていそんなに多くの情報をさばけないのだ。そこで、情報がたくさん入る人ほど、意志決定力が低くなつてきている。

ボードリヤールというフランスの社会学者によれば、フランスではすでに「計画経済」というようなことができなくなつてきている。そういう計画経済を推し進める人々がもはや計画を立てられなくなつてきているのである（『グラフィケーション』81年12月号）。すなわち、多すぎる情報は生かされず、死んでしまうのである。

この場合、多い・少ないとは、どこまでも生ま身の生活している人間（個人）にとつて多いか少ないかを言うのである。機械なら、いくら情報が増大しても、それを処理する機械をつくれればよい（むしろ、それにも限度があるが）。人間は、自分の身の丈に合った情報を量質ともに選択して使う。既成の、また現に発展しつつある科学技術は、その情報の一部として、生きた人間によつて生かされるのである。師をえらぶとは、生きた人間として、科学技術をふくんだ情報をみごとに生かしている人をえらぶということでもあるのである。先生を自分でえらぶことのできない今日の教育状況では、科学も技術も生かされないのである。

家庭、というテーマで教育が成り立つには教師と生徒のあいだの關係が、コトを教え授けるといふ一方通行の關係ではダメである。

他の教科、たとえば数学や物理や化学では教科の核はコトを（あるいはコトの体系を）伝える・教えるということである。外国語や「国語」の授業でも、コトを正確に教えるということが第一に尊重

される。そうして小・中・高の授業では、先生をえらばず、先生も生徒をえらばないために、人と人の関係を学ぶという教育・学問の正道を歩むことが困難であるが、それでもいい、といったら語弊があるだろうが、コトの性質上、それも止むをえない。

しかし家庭というテーマはちよつとちがう。どこがちがうかというと、家庭を成り立たせている核は人と人の関係であつて、食物や衣服や住居や個々人の生理・肉体ではないという点である。食品分析表を使って栄養計算をしたり、妊娠時の衛生や乳児の心身の発達について学んで育児の実習をしたり、スカートを縫い、あるいは家計簿をつける、といったことは、コトを学ぶことであり、ある程度ビデオディスクなどで代用できよう。しかしそうした技術を生かすか殺すかは、家庭を形づくる人、たとえば一人の男と一人の女、母と子、父と子、兄と弟、姉と妹等々の人間関係がどうであるかに、それだけに依存している。家庭科は、その本質において、既知のコトを教へ授ける教科ではないのである。

数学や物理などの教科で教えられるコトは、生徒にとっては未知のものであるが、家庭は、生徒にとってはもちろん、教師にとつても未知のものである。物理や数学のコトの体系でも、むしろ未知の分野があり、教師ひとりひとりにとつて未知の領域は広大無辺である。しかし留意しなくてはいけないのは、人間かならずしも物理や数学のコトを学ばなくてよいということである。また、物理や数学のような教科で、優秀な生徒が現れて、教科書に書いてある以上のコトを学びたいといつてきたら、教師は、より程度の高い参考書を与えればよい。そこには、問題解決のモデルがあるのである。ところが家庭はそうでない。人は、実際に家庭をつくるつくらないにか

かわらず家庭について考え・学ばなければならぬ。人は、その生涯のどの時点かで、それもくりかえし、家庭とは何かと、内心の奥深い淵から湧きおこる問いを発する生きものなのである。その問いが起つたとき、「学者」によつて書かれた「学術書」も、家庭科教科書の「家庭生活」単元にのせられている統計やグラフも、問題解決のモデルにはならない。

このように言うとは反問するかもしれない。人類は何百万年來家庭をつくつてきたし、その家庭のさまざまありようについてたくさん記述されているし、研究されてもいない。典型例は教科書にものつているからそれがモデルになるのではないかと。私は答える。そうだ、情報としては家庭についての情報はもつとも多い。ひとは生まれたときから母や父やきょうだいについて膚で感じ目で見耳で聞いて育ち、近所や友人や親戚の家庭の実物をのぞき、テレビや新聞や文学作品や映画で、いやというほど多様な家庭の姿を見聞きする。だからこそ、恋をしたとき、結婚したくるとき、意志決定ができなくて悩むのである。悩まないときは——きょう日では悩まない者が多いのが大問題——エライ人がモデルだといつてくれる通りの家庭をつくり、「コピー家庭」をつくる。家庭「の・ようなもの」が、かくして氾濫する。その「コピー家庭」では、衣生活・食生活・住生活・保育の全般で、それぞれモデル通りの生活をいとなむ。これがファシズムの世界でなくて何であらうか。

私は、人と人の関係を学び、学ぶことによつて現実の教師と生徒の関係、生徒同士の関係が変革されてゆくようないとなみ——教育——の出発点は、学ぶ対象が未知である（モデルがない）という自

覚だと思ふ。現代の情報の氾濫は、人々に、もはや未知のコトはなく、未知のようにみえるコトもいずれば「専門家によつて解明される」と錯覚させている。だがコトの「未知」と人間関係の未知とはちがう。人間関係の未知とは家庭とともにする相手（配偶者・子・親・きょうだい）が未知だということ、相互に理解しあつていない、誤解しあつているということなのである。今、ここ、相手について未知だということである。

ここで私のささやかな実践報告をしたい。

私は十年前に大学の教師を辞め、三年前からつれあいと一緒に私塾（哲学、リード・オルガン、魯迅）をはじめた。昨年（81年）は二泊三日の哲学合宿を六回開催したが、テーマは一貫して《家族》であつた。はじめに参加者（大学生、保母、教員、会社員、主婦など）一人一人が自分の家族（家庭）について思つてゐることや経験を時間をかけて語りあう。次に語りあつた内容をデータカードにして、各人がそれを図解にまとめる。ルールは一枚のデータも抜かさないこと。図解には各人の問題意識が鮮明に現れるだけでなく、自分以外の参加者の話をどう理解したかがくつきりと示される。どんなに誤解して聞いていたかが白日のもとにさらされるわけである。このことを相互に確認したうえで、ふたたび、よりつつこんだ話し合いをおこない、その語りあつたことを、またデータカードにして図解をつくつてゆく。

このやりかたは子どもにもできる。私たちの私塾でも小学四年以上を対象に七九年夏と八〇年夏、子ども哲学合宿を開いている。これらの経験から得た感想を記し、結びとする。

一、家庭科が女子用教科・技能教科でなく、男女共修・必修の教科となるためには、家庭科の授業が教育になつていなければならぬこと、すなわち出来あいの「技術」を教え授ける教科であつてはならないということ。私は、家庭科は、小学校でも高校でも、現にいま、ここにいる教師・児童生徒の「家庭とは何か」という問いを徹底して出しあい、そのいま、ここ、の問題意識を共有してゆくことからはじめるとよいと思う。このやりかたで生徒だけでなく教師も、新鮮な発見のよろこびを味あうはずである。

二、人間には他人を誤解する権利はなく、他人を理解し自分を理解してもらふよう努力する権利だけがあるということ。人間以外の動物は、同じ種に属する個体同士が相手の意図や感情や欲望を誤解することはありえない。人間だけが「誤解する権利」があると思ひこんでいる。そう思ひこんでいるから、恋人や配偶者や子や親をどんなに誤解していても、また、その誤解を本人からいくら指摘されても、「それがどうした」「見解の相違だ」と居直る。しかもその居直りを「個の確立」とか「アイデンティティ」とか「プライド」といった言葉でかざる。そうした居直りの姿勢のまま家庭をつくり、維持してゆけると思ひこんでいる。そうした居直りの態度のまま、「家庭内暴力をこうしたら防げる」式の「技術」を使えると思ひこんでいる。このような思ひこみがあるかぎり、家庭がつくれるはずがないし、教育がおこなわれるはずがない。

家庭科教師たちよ!

初めて教壇に立つあなたに

和田 典子

初めて教壇に立つあなた

あたらしい門出に当たって、さまざまな想いにゆれる日々をお過ごしのことでしょう。

わたくしにも、卒業間近い日々を、うたい馴れたメロディを口ずさんだり、藤村の詩を朗詠したりしながら、校舎の周辺を歩きまわった思い出がありますが、数十年を経た今でもその詩を口ずさむたびにあの頃の想いがたちまち胸にあふれてまいります。

新しい生活への不安というより、青春の日々を過ごした友人との別離がたとえようもなくつらかったことが、その詩とともに、鮮やかな印象としてよみがえってくるのです。そして、事実、深まってく戦時体制のなかでは、卒業が永遠の別れになった友人も少なくありませんでした。

そんな、自身の人生経験とも重ねあわせながら、家庭科教師三五年の回想をもとにこれからの家庭科をになう新人のあなたに、いくつかの申し伝えをしたいと思いますので。現場で壁にぶつかった時何かの手がかりにでもなればしあわせです。

初めて教壇に立つあなた

あなたは、就任とともに家庭科教師というもう一つの人格(社会的人格)として迎えられます。そのイメージは、社会通念としてのそれですから、けっしてカッコよいものではありません。あなたがどれほど個性的で有能な人間だとしても、家庭科教師として受けとめる現場の人びと(同僚、子ども、父母)は、そのような個人的な面をみてはくれないと思います。

女性べつ視と生活べつ視の複合汚染が、根強くはびこる現代社会の学校ですから、教師観も教育観も、社会通念を鋭く反映したものだと思えます。あなたがどんなに専門知識や見識を持ち、理想にもえて就任したとしても「日常茶飯事」である生活の教育を担う女性教師である、というその事実だけで、差別と偏見のペールが人々の眼を曇らせてしまうのです。

初めて教壇に立つあなた

あなたは、そんな嵐の海へおそらくたった一人で船出してゆかねばならないでしょう。家庭科教師の定員が一〜二名という事情もあ

って、どの学校でも、家庭科の教師は矛盾にみちた孤独な存在なのです。

さすがに親や同僚教師は、そのような言動をあらわにはしません
が、子どもたちは正直ですから「家庭科なんかどうでもよい」とい
った言葉や態度をかくさないかも知れません。

このような傾向は、差別・選別による汚染、すなわち人間不在の
教育体制に正比例して強いものですから、受験一辺倒やエリート志
向の教育状況のもとでは、いっそう鋭くあらわれることも知るべき
でしょう。

中学校「技術・家庭」の男女別学習領域指定や、高校「家庭一
般」の女子のみ必修という現行制度も、この教科の存立自体を「特
設的」なもの「別格」なものとの印象づくりに手を貸しています。

初めて教壇に立つあなた

あなた自身の経験からいっても、このことは否定できないでし
う。

しかし、あなたはその矛盾を知りながらも、あえてこの教科を専
攻なさいましたね。その根拠は何だったのか、聞きたいところです
わたしの場合、親の古い女性観に押し切られ、妥協した選択で
したが、この途をすすめようとも思わないまま今日に至りました。何
が魅力だったのかしら、と時々考えるのですが、これというものも
思い当たりません。強いていえば子どもにひかれてここまで来た、
というのが的を射たところでしょうか。

石垣りの詩に「私の前にある鍋とお釜と燃える火と」というの
があります、その一節にこんなことが詠まれています。

劫初から／うけつがれた火のほてりの前には／母や祖母やまたそ

の母たちがいつもいた（中略）／台所では／いつも正確に朝昼晩
の用意がなされ／用意のまえにはいつも幾たりかの／あたたかい膝
や手が並んでいた／ああその並ぶべきいくたりかの人がなくて／ど
うして女がいそいそと炊事など／練り返せたるう／それはたゆみな
いづくし／無意識なまでに日常化した奉仕の姿（中略）／そ
れはおごりや栄達のためではなく／全部が、人間のために供せられ
るように／全部が、愛情の対象あつて励むように／

初めて教壇に立つあなた

わたしが、家庭科から離れなかった理由の一つは子どもたちと身
近に、人間的にふれ合う機会が多かったからかも知れません。子
どもたちが家庭科を待ちわび、期待する内容はお料理をつくること
だったり、洋服を縫うことだったり、あるいはスライドをみること
だったりいろいろでしたが、それらはどれも人間が生きることと直
接かかわっていました。そのためか、子どもたちの多くが「先生、
今度の家庭科何するの」とたのしみにしてくれました。

調理実習の日など、早朝から登校して終日クラス中が浮き足立っ
たりするので、どうして教師がいそいそしないでいられます
よう。そんな子どもにひかれての日々でした。

他教科より軽視し、差別しながら学習内容にはひかれるというこ
の矛盾こそ、母や祖母たちが迎ってきた生活の本質であり歴史では
なかったでしょうか。家庭科は、日本の女性たちの長い矛盾にみち
た歴史を継承した教科であることに思い至ったとき、わたしはこの
教科との宿命的な関係に眼をひられ、さらに執着しないではいら
れなくなりました。そんな視点で女の生活をとらえるほど成長した
女子高校生たちが、家庭科教師に同志的な連帯と特別の共感をよせ

てくれたりすればなおのことでした。

この教科が「おごりや栄達のためではなく全部が人間のために供せられる」という本質であることを知ったとき、子どもたちも家庭科を再認識するようです。男女共学の家庭科で、当初は家庭科を拒否している男子でも、学習一年後になると、「ためになった」「学んでよかった」と大多数が評価を逆転させる、という事実もそのことを立証しています。

初めて教壇に立つあなた

しかし、家庭科をとらえる場合に見落とせない視点がもう一つあります。それは為政者側のこの教科によせるなみなみでない期待のことです。しかもその期待の本質が、わたしち教師や子どものそれと鋭く対立しているということ。つまり、為政者側はこの教科を「家庭責任は全面的に女性が負うもの」「家族の生活や扶養については自助自衛が原則」「老・幼・病人の介助を社会保障に求めることを否定する」立場に立ち、それに適応する女性づくり、教化の役割を果たさせようとするのです。文部省側が家庭科の男女共修要求を敵視して、あくまでも女子教科のまま据えおき、母性教育のための教育を、という一部（高校長協会など）の声に加担しているのも、さきに述べた為政者側の期待にもつくものなのです。

これに対して、現場の子ども・教師・父母国民の多くは、「個々の家庭内だけで生計の安定をはかることはますます困難」であり、「老・幼・病人の介護についても社会保障を充実する必要がある」「家庭生活の自助自衛を困難にしている要因は社会にある」との立場から、家庭責任を主婦や母親だけにおしつけることに反対しています。従って家庭科を女子教科にしてはならない、家庭生活に対す

る科学的認識は男女を問わず身につける国民的な基礎教養にしたいと考えています。また、従来の教育が「営利や栄達」を優先し「人間の幸わせ」を軽視したことが、今日の社会的なゆがみを生み出した、ととらえているのです。

初めて教壇に立つあなた

あなたも、こうした対立にやがて直面することでしょう。残念ながら二つの立場は、資本家階級と労働者階級という、現代社会のしくみが生み出した階級的なものですから単純なものではありません。教育は社会現象ですから、二つの立場は教育理論にも教育実践の場でも、ことごとくその像をあらわします。

たとえば「子どもの忘れものにどう対処するか」といった日常的な教育姿勢から、授業のすすめ方、家庭科観に至るまであらゆる場面でああなたの選択を迫るでしょう。あなたが教育に献身しようとするればするほど、良心的であろうとすればするほど、この選択に悩むかも分かりません。殊に実践の場では、中立の立場ということがあり得ないわけですから……。

初めて教壇に立つあなた

あなたも既に「文部省と日教組の対立」についてはご存じと思いますが、この対立の根本もゆきつくところは右の問題です。わたくしもその判断ができなくて深刻に悩みましたが『空想から科学へ』など、社会科学の本を何冊か同僚と学習するなかで、労働者階級の立場に立つことに確信がもてるようになったものです。

「知は力なり」という格言がありますが、教師にとって科学的な社会認識ほど力になるものはありません、その力をよりどころにして、あなたが一日も早くその立場を確立されることを希っております。

初めて教壇に立つあなた

家庭科教師であるあなたが教壇に立って、最も力と時間をそそぐ授業について一言だけ述べさせて下さい。

誰でもそうですが、授業といえは「教えること」とらえて、「子どもに学ばせる」視点を見落としがちなものです。しかし最近まで学生だったあなたがたにとって「自分が力をつけた」のはどのような機会だったか、からも分かるように、子ども自身が学ぶ気になることが原点なのです。

そんなことは百も承知のはずでも、「この教材はこの時間に」などと焦ったりすれば、ついおしつける結果になってしまいがちです。どうか授業の主人公は子ども自身で、教師はそれを援助する存在であり、子どもの学ぶ意欲をどうひき出すかが、最も肝要だということをお忘れしないで下さい。

初めて教壇に立つあなた

今春の元旦、昔の教え子から受けとった年賀状にこんなそえがきがありました。

「手をとりて、ともに泣かなく泣く人の、いたむ心に心あわせて、と先生が作文の評に書いて下さったこの言葉は四十年を経たいまも忘れないで心に残り、私の指針になっています」「先生は二十五人の異性と交際してから結婚しなさいって言われましたが憶えていらっしゃいますか？ あれから二十年です」「明けない夜はない」と何かにつけて励ましていたただいた先生のことを思い出しては頑張っています」など、など。当人のわたくしは忘却しても、子どもたちは、いっばしの社会人になった今でも忘れないで書きよこしてくれるのです。

人間の心に何十年も生きつづけるような感銘を残す教師という存在に、わたくしは改めて深い感動をおぼえないではいられません。

初めて教壇に立つあなた

教師は子どもたちにとって、人生の先達なのです。どの教科を受けもとると、年齢や能力がどうあるうと、教師はいつでも「どう生きるか」という子どもたちの問いかけに、応じなければなりません。

あなたは、家庭科の教師であると同時に、人生の教師なのです。だから、家庭科についての専門的な知識や技能を身につけ、見識をもつことは当然ですが、それにまさる現代人としての識見、人生観・世界観が問われることもさげられません。

わたくしも、私自身の「生き方」を求めつづけて教師生活を送ってきましたが、そんなとき日教組がつくった「教師の倫理綱領」は、力強い示唆を与えてくれたものでした。

教師の倫理綱領（一九六一年版）

一、教師は日本社会の課題にこたえて青少年とともに生きる。二、教師は教育の機会均等のためにたたかう。三、教師は平和を守る。四、教師は科学的真理に立つて行動する。五、教師は教育の自由の侵害を許さない。六、教師は正しい政治を守る。七、教師は親たちとともに社会の類廃とたたかい、新しい文化をつくる。八、教師は労働者である。九、教師は生活権を守る。一〇、教師は団結する。

初めて教壇に立つあなた

教えることは学ぶことである、と申します。子どもたちとともに未来に生きる途を、家庭科教育を通して、追求し、切りひらいてくださることを心から期待しております。（家庭科教育研究者連盟）

いま、教師であることは

中嶋 里美

生徒とのすれちがい

今日の六時間目で、そのクラスの授業はすべて終わることになっていた。高校三年生の三学期は実に短く、大体三週間くらいしかないので、一、二学期はほとんど教科書に沿って授業をすすめてきたので、三学期は何か別の教材をと思い、ジョンレノン、小野洋子の語る「結婚、子育て、共働き等」を使うことにした。これはジョンレノンが殺される六時間前に小野洋子と一緒にRKOラジオのインタビューに答えた内容である。口語のせいか普段生徒が教科書などで見なれている英語とは、少し違っていった。

なぜこの教材を使うのかの説明には、新年から朝日新聞に連載され始めた「家族の風景」のコピーも使った。そして卒業後、結婚したり、家族を持ったり、さまざまな人間関係にぶつかるところであろうと思われるので、この二人の考え方も参考にしてほしいとつけ加えた。

英文をクラス全員の生徒で分けて各自の分担箇所を決め、ワラ半紙三枚半ばかりの註を作った。あたっては当日欠席したり、

自分のところを訳し終えたと、何か参考書を読み始める生徒もいたが、なんとかあと一時間で読み終えるところまでこぎつけた。今日の文章の中には「愛こそこの世をかえる唯一のものではないだろうか。その意味では愛は非常に政治的な武器である」(洋子)とか、「この世の中には男と女しかいないじゃあないか、だから女はこうだ、男はあだだなんていうのは馬鹿げているよ。我々はみな人間なんだ」(レノン)の言葉もあり、しめくくりとしては明快で、彼らが全く普通の人間であるということを示しており、いくらかの共感を呼ぶのではないかとひそかに期待していた。

やや興奮気味でチャイムと同時に滑りこんだ教室は全く私のささやかな期待を裏切るものだった。すでに半数近くの生徒が帰ってしまっていた。以前から、このクラス火曜日の五、六時限はよくさぼる傾向があり、その都度注意してきたが、こんなにいないのは初めてであった。最後の部分の訳のあたっている生徒もほとんどいなかった。最後ので私が主に訳し、終わってから感想を聞く気力もなく、二言三言お別れの言葉を言って終わりにしてしまっただけだった。

「終わりよければすべてよし」という諺のなんたる残酷さよ。でも「ゆっくりと着実なのが競争に勝つ」という諺もあるではないか。

以前三学期にはどんな教材を希望するかと聞いた時、「実戦〇〇法」の希望もあったが、どうしてもそういうものは使う気になれなかったのだ。それにしても生徒はいつもたくさん課題を与えてくれることよ。

現実を見ることは勇氣のいること

以前だと多くの生徒が授業をさぼったり、又授業がうまくいかなかったりすると、一人喫茶店に坐って考え込んだり、家に帰っても何も手につかないということがあった。しかし近ごろは人に話したり、次にはこうしてやるなどの対策をたてることがいくらかできるようになった。それでも自分の失敗談を話すと、「女の先生だからそう言うのではないですか。僕には言いませんよ」などと言いつつ男教師がいたが、たしかに現状では生徒の中には、こわい男教師には言わないが、女教師には平気で失礼なことを言う場合もある。しかしこのことを男教師も痛みとして感じてくれる力を持って欲しいと思うのである。

大阪の西成高校の女教師たちから次のような報告をきいたことがある。女教師が通るたびに卑猥な言葉を吐いていた男の子たちがいた。女教師たちはどうしたらよいかを全員で話し合った上で、その生徒たちをよび、態度を改めさせたという。女教師に対する偏見も個人レベルの問題として解消してしまうのではなく、意識的に取り上げ、解決していくことが大切である。

それにしても生徒の現実を直視したり、自分の抱えている現実を

さらけ出すのはなんと勇氣のいることかと思う。

昨年の四月、校務分掌の中に男女平等教育係設置準備委員会を作り、男女各四名ずつで仕事に取りこんできた。その中で全校生徒に対し「男女平等意識調査」のアンケートを行い、集計をし、分析をするということも行った。生徒の意識については、国語の感想文を読ませてもらったり、英作文をみたり、面談をしたりしてなんとなくわかっていっているつもりでいたが、真正面から問いかけたのはこれが初めてであった。

アンケートを行った日が木曜日のLHRで、その後の職員会議の席で自分のクラスのを一通りみて、なんと私は幻想を持っていったのだろうと思ひ知らされた。女子の多くは自分をリードしてくれる人と結婚したが、男女共に、夫が働き、妻は家事・育児に支障がない程度の仕事をするが圧倒的で、企業などにおける女子の賃金や仕事差別は「当然である」「仕方がない」の方が「おかしい」を上回っており、婦人差別撤廃条約や、婦人の地位向上に関する埼玉県計画は九九パーセント知らなかった。さらにこのアンケートについての感想を述べるころには、「男女にはそれぞれ特性があり、差別とさわぎたてるのはおかしい」「差別をなくそうなどと言っているのは、一部のキャリアウーマンだけだ」「こんな委員会があること自体おかしい」「こんなアンケートに時間を費すのは無駄だ」等々、読めば読むほど、顔がゆがんでくるものがあった。八名の係が三クラスずつ集計することになり、私は冬休みを利用してやってみたが、その仕事に取りかかる時、大変気分が重かった。しっかりと現実をみつめ、そこから新しい方向への道をさぐる勇氣と行動力が不可欠のようだが。

冒頭に述べた私の英語の授業のさばりも、もし私が「入試直前問題集」でもやっていたら、起こらなかつたかもしれない。しかしどんなに内容の良い文章でも、アンダーラインがひかれたり、カッコがつけられたりしてくると、その問題はとたんに現代のテスト体制の中に埋められて、つまらなくなってしまう、丸ごとそのものに食らいつくのではなく、早く解答を書いて、「さよなら」したい問題になってしまふ。しかし現代ではそういう問題をできるだけ能率よく解く力が要求されているから、じっくり生活者の視点で考えたり、男女平等意識を確立することなどは軽んじられている。そこでこういう視点を押しだしていくと、生徒や現状肯定をしている教師から受ける反発も強くなっていく。

事実、男女平等のアンケート集計結果と分析について話をした時も、「どうして男女平等なんていうの。私は早く結婚したいの」というつぶやきを聞いた。しかし、このつぶやきを皆の問題として討論していかない限り、次の一步はなかなか踏み出せないのである。今までは教壇から私自身の考えを述べることはあつても、生徒一人一人の声とまともにぶつかり合つて話を進めていくという点は弱かつたように思う。彼女たちの意識の背景にあるものともじっくり向き合わなくてはならないだろう。

教育の中に生活者の視点の確立を

現在の受験体制を越え、文化の領域にまで、多分根をはるることができるのではないかと思うのは、生活者の視点を教育の中に貫くことではないだろうか。

先週の土曜日に私の所属する埼玉高教婦人部主催のシンポジウムで、

夫と妻の家事分担の問題が話されたが、次のような発言がはつきりと女性側から出されたことに意義を感じた。

「土曜も日曜も、夏休みも冬休みもなく、一年中運動部の活動に出ている男教師たちの家庭は一体どうなっているんだろう。もし共働きのしたら、相手の人にどんなにか多くの負担がかかつて大変だろうなと思う。もし女教師が運動部の顧問をやらぬということ、文句を言ってきたら、こうした男教師たちが生活を担ってない点を指摘してやるつもりだ」

たしかに運動部が存在し、女子は教師もふくめて、もともと「運動をする」ことにかかわつた方がよいのであるが、しかし現在のよ様な運動部のあり方は間違つていゝと思う。女性の側からかういふ視点がはつきりと出されたことに、新しい時代に向かう足音を聞く思いがしたが、同様な視点を最も生活に密着したところから教育をすすめていゝ家庭科の教師に、もつともつとすすめてもらいたいと思う。

かつて和田典子先生の家庭科の授業実践としてすばらしいなと思つて聞いたものに、女子の生徒が作つた、例えば性についてのレポートを必ず一人の男子にみせ、その感想をきいてくること、というものがあつた。家庭科の教師一人一人が食品添加物のことを女子の生徒に教えたなら、教室に帰つたら男子にも伝えなさい、家庭に帰つたら家族全員に伝えなさいと言つてくれたら、どんなに学校教育は実生活の点検にも役立つだろうか。またそうした知識は教師にも大いに必要であり、教研や学習会を通じてどんどん伝えて欲しい。私自身も授業で公害を扱うが、教科書のものたりなさは総花的ではあるが深まりがなく、生徒一人一人の生活レベルまで降りてこないこ

とである。そこでどうしても、それを埋める資料を集めなくてはならない。もちろん、家庭科の教師たちに一方的に何かを伝えて欲しいと言うだけでなく、他教科の教師も自分の教科の中で生活者の視点をどのように確立するかを押さえた上で家庭科教師との連帯を考える必要がある。しかしこうした視点を教育の中に貫くには、家庭科教師にもっともっと前面にでてきて活躍して欲しいと思う。一人準備室に引込んで教室との往復では、今の教育はますますゆがんでしまう。

私は英語を担当しているが、教材を通じて男女平等や、生活の諸問題、健康、平和などの問題を扱っていきたいと思っている。とりわけ男女差別の問題は私が高卒後企業に入った時体験したことであり、私の教え子たちが再びそのような差別を受けたり、差別をする側に回らないようにすることが今の私の義務であると思つてやっている。

一月二十一日のLHRで男女平等意識のアンケート調査の集計結果と分析を生徒に伝えたが、生徒のそれを聞く態度は決してすばらしいものではなかった。私も時には社会教育などによれば話をすることもあるが、そうした時と比べれば、その聞く態度には雲泥の差があった。とりわけ男子の聞く態度にはふざけ半分のものもみられたり、「掃除は女子がやるのがあたり前だ、将来やるのだから今練習しておいた方がよい」などという声も出た。私はアンケートの集計結果や分析を伝えるのに精一杯で、そうした声を女子がどう受けとめているのかを聞く余裕がなかった。この次はこうした生徒の声をテーマとして、討論をふくらませていけばよいと考えた。わずかに五〇分のLHRであったが、声をからし、疲れ切つて終わるとい

結果になってしまったものの、それでも男女平等の問題をLHRを使って真正面から取り上げたという充実感があった。三、四日後の学級日誌に、冗談を半分まじえながら、男の生徒が「僕もやっぱし男女平等は必要だと思えます」と書いてきた。このLHRのあと私は教室に私の読み終えた雑誌「クロワッサン」とか、「十人の夫」、「とらばあゆ」などを置き、生徒にもさまざまな情報にふれさせ、感覚を磨かせようと考えた。あのLHRは私にとっても男女平等を片隅の問題ではなく一つの重要な問題として取り上げるきっかけを作ってくれた。

三年生の英作文を担当しているクラスの最後の授業では、川越女子高の佐藤典子先生からいただいた資料「女だからみえたもの」(朝日新聞記者、大熊由紀子さんの書いたもの)を紹介しつつ、「これまで共学の中で作ってきた男女協力の精神を必ず職場で生かして欲しい。とりわけ男子に頼みたいことは、学校で一緒に学んだ女子が職場で差別を受けていたら、『おかしい』という声を発してほしい」と結んだ。

職場の中で家庭科教師や他の女教師が小さくなっているようでは、現在の教育を変えることはできない。生活の問題を教え、現状では男性よりも生活を多く担い、女であるために偏見や差別を受けてきた人たちが、生活破壊をくいとめることの大切さ、差別の不当性を叫ばなくって誰がやるというのだろうか。

生活実感をさまざまな角度から検証し、教育活動の中に入れ、一人一人の生命や生活を大切にするために教育はあるのだということを中心としていこうではありませんか。

(埼玉県立所沢高等学校)

いでたん、いざ

男たちよ!

宮 淑子

凍てついた夜の闇に、吐く息が縮まって吸いこまれていく。店じまいをする間際の商店街で買いあさった食料品が、右手のビニール袋の中でギンギンと押しくらまんじゅうをする。

この一週間はまるで「戦争」だった。原稿の締め切りが三つも重なって、考えることといえはどうかやってマス目を埋めようかということばかり。料理する時間も惜しい。洗濯をする時間も惜しい。散乱する資料を片づける間も惜しい。で、ついに今朝は、冷蔵庫の中は閉散と冷気の凝りとなり、一ダースあったパンティーも残り一枚と心細くなって、汚れものの山から替え用に一枚、大急ぎで手洗いしてペランダに吊るしてきた。

わが身ひとつの気ままな暮らしとはいえ、筆一本で食おうとしている女の日常は、修羅場のかいくぐり。「余裕」という二字からは、ほど遠くなるばかりだ。それもこれも好きで選んだ仕事。ひと仕事終えてたどる家路は、足まかせ、心まかせ。充足感が腹の底から湧きあがる。

時計は九時。黒い家並の続くはるか向こうに、満々と明かりを宿した四角い鉄骨ビルが顔を出す。一四階建て公団住宅の八階のその窓は、ただいま住居人不在。夜気をふくんだパンティー一枚があるじを待つ……と思つて見上げると、アレレ、パンティーは影も形もない。代わつて、おびたらしい洗濯ものの行列。部屋の中からは薄明かりがもれる。オヤッ、もしかすると、もしかすると……。

エレベーターの開閉もどかしく、走つて戸口を開ける。「お帰りイ」というK男の声。部屋中に鍋ものの芳しいニオイが立ちこもっている。

「ハハハ。ビックリした? 今日割と早く仕事が終わつてネ、五時ごろから来てるんだけど、冷蔵庫をノゾいたらカラッポだろう。ハハ」ときてね。じゃあ、オイシイモノつくつてあげようと思つて、スーパへ買物に行つて材料を仕込んできたんだ。こっちはオデン。もう三時間も煮込んであるから、最高にうまいよ。こちらは五目ちらし。アッ、ご飯つくる間に洗濯もしたよ。洗濯機のフタあけ

たら、汚れものの山なんだもの。アナタみたいな生活の人は、パンティーは三ダースぐらい買っといた方がイイよ。

ああ、お風呂も沸いてるよ。先に入っておいでよ。からだがあたたまるから」

K男のことはに誘われて湯船につかる。身ひとつを養うために、ささくられてヒンむけてカサカサになった心が、潤ってゆく。独り身の気ままな暮らしもいい。けれど、ひとの膚のぬくもりのある暮らしもいい。ならば、その時々を自由に選べる関係がいい、とたゆたう湯気の中で考えていると、「どれ、背中を洗ってあげよう」とK男がまっ裸で入ってきた。

今宵はなんだか、デンマーク映画「女ならやってみな！」(性別役割分業の藻にからまれた女が、男と女の立場の逆転を夢想する)の女主人公になった気分だ。

私とK男は、ともにシングル。過去に制度としての結婚をそれぞれ別な相手としたことがある。どちらにも子どもはなかった。たえ、子のない夫婦であっても、制度としての結婚の大変さは、離婚時に身にしみてわかる。

本籍はどうする、苗字はどうする、財産分与は、賃貸住宅の名義変更は……と離婚届に始まるもろもろの付帯事項の煩雑さ。ムキ出しになる人間のエゴ。そういう地獄を一度かいくぐった男と女は、もっと風通しのいい関係をつくろうとする。

それぞれ独立した生活空間をもち、会いたいときに会う。そんな暮らしをK男と私をはじめ、五年になる。K男は映像メディアで食い、私は活字メディアで食う。その生活のサイクルがあまりにか

け離れているから、無理に共有空間をつくると、形としての「家」に縛られ、役割分担の奴隷になってしまう。それだけは避けよう、ということにすぎない。翔んでるわけでもない。ツッパっているわけでもない。男と女が無理のない、自然な寄りそい方を選んだらこうなった、というわけである。

いわば、シングル感覚の男と女。ひとり歩きのできる男と女。その上のパートナーシップといえようか。

このシングル感覚を育て合う風土は、残念ながら日本にはない。なぜなら、確実に男も女も、ひとり歩きできないように育てられてきているからである。「生活的に」ひとり歩きできない男と、「経済的に」ひとり歩きできない女と。片ワレ同士のふたりを、愛という妙薬で鎖のようにつなぎ、対幻想、結婚幻想、家族幻想をバラまく風土――。

幻想は幻想にすぎない。なによりも女の生と性が男に従属するようになり仕組まれたものだから……と、幻想をみずから手で断ち切ってひとり歩きする女たちがふえてきたが、最近では、男たちの中にもひとり歩きの志向がある。

そのひとつ。関西に一昨年誕生した「ひとり歩きの会」は、ひとり暮らしの問題を考えようと八人(うち男三人)で発足したものの。発起人の一人で、二度の離婚体験を経た吉田清彦さん(三七)の発言は、ひとり歩きを志向する男の最低条件をいい当てている。

「お互いの自由と自立を尊重しながら一緒の時間を長く待ちたいのなら、別居結婚が適当でしょう。その際、男が食事や洗濯などの身の回りを処理する能力を身につけるのが、自立への最低かつ基本的な条件です」。(朝日新聞・一九八二年一月八日)

「別居結婚」ということばを、K男と私のように、「シングル感覚で暮らす」と置き換えてもらえば、このセンチンスは私たちの日常感覚そのままである。

だから冒頭のシーンにもどると、これは、ある日あるときのK男と私の関係であり、この関係をまったく逆にしたのが、また、別の日別のときのK男と私の関係でもある。

性役割に縛られない男と女の、ごくあたりまえの支え合いである。

……それにしても、と私はときどき驚愕の思いで眼の前にいるK男をながめてしまう。私たちが風通しのいい男と女の関係でいられるのも、K男のひとり歩きがあつてこそだ。

あれは、出会って始めて車で遠出をした日。「松茸を友人からいただいてネ。炊き込みご飯にしたから、ハイ、アナタへのおすそ分け」とオニギリに持ってきて、私を仰天させた。

ヨレヨレのジーンズをゴミ箱に捨てようとしたら、「ボクに貸してごらん。裾を切つてショートにしてあげるから。夏、室内ではくんだつたら、まだ利用価値はあるよ」と、まつりぐけをして届けてくれた。

スイカの赤い身をゾンザイに食べて捨てようとしたら、残りの赤い身をキレイにスライスして、漬けものとして食卓へ出す。

書き出したら際限ないほど、「男」のイメージから突き抜けた彼がいる。生活者である彼がいる。

俗に「いい男」と呼ばれる男たちは、女たちが自分の生の証しを賭け、崖っぷちに立つて男たちに変わることを突きつけた結果、生まれ変わった男たちだ。目覚めた女たちとの出会いによって、甦っ

た男たちだといっている。

「アナタをここまで変えさせた女がいたなんて、スゴいなあ。やっぱりいくつかの出会いが変えたのね」

出会ってまもなく、私は天然記念物を見るような眼で彼を見ながら、聞いてみた。

「イヤ。ボクは出会いによって変わったことはないよ。小さいときからいまのようだったよ。父が三歳のとき病死。母がつとめに出て留守の間は、きょうだい（兄・妹）で交代で家事をやったから、ひととおりのことはできますよ。アナタよりずうっと」

母子家庭だった。貧しかった。こんな逆境が、性役割を突き抜けたK男を育てたのだろう。「それもあるかもしれない。けれど要はここですよ」とハートを指さした。「相手の人とステキな関係をつくり合いたい。その願望ですよ。ボクを支えているのは」

ひとり歩きした男と女。侵すことも侵されることもなく、依存することも依存されることもない男と女。その関係の中でこそ、はじめてエロスは伸びやかにばたくようだ。なによりも自由な「私の選択」があるからだろう。

過日、女のセクシュアリティを考えるシンポジウムがあり、その席上で女四人のバネラー（うち一人は私）は口々に、夫に依存して生きる存在の主婦は、夫に対し性の拒否権をもてない。自分が望まない性を強制される関係は、レイプと地続きの構図ではないか、という意味のことを話した。妻をまるで、家政婦と慰安婦としか思っていない（だろう）男が、会場からこう叫んだ。「女は、男に可愛がられ、抱かれることが一番幸せなんだ！」

「抱く」「抱かれる」というボキャブラリーは、ひとり歩きした男と女の間にはない。そのことを、男たちよ、知ってほしい。

ところで、レイプというのは、犯罪としてのレイプだけを指すのではない。自分が望まない行為を、力でムリヤリ強制されること。つまり、個人の意志を無視した強者の論理は、すべてレイプである、といっている。

ひとり歩きできない男と女の家庭に、いま、さまざまなヒド割れが起きている。子殺し、親殺し、妻の出家、蒸発、母子相姦……。病んだ家庭をみかねた男たちが、最近「雷オヤジの会」というのをつくった。家庭の中の「父権」、オヤジ権を強大にしようというもの。子どもに体罰も辞せず、ビシビシ鍛える。母親は父親を立て、父親のエラサを子に教える。……古きよき家庭像への、男たちの郷愁がみなぎる。

強者の論理を志向する男たちに、妻（女）の、子の、人権を抑圧するこの構造こそ、まさにレイプの構造なのだとということ、どうやったら知ってもらえるだろうか。

こんな家庭に、エロスが甦えるはずもない。

一本のモノサシ。一本のレールで男も女も生き方が決められてきた。そして、そのモノサシやレールからはずれると、異端の眼で見られてきた。

そんなみずからを縛りつける鎖をほどこいてみると、どんなに風通しがよくなるか。そのためには、男も女も、一番「私らしい」生き方をしてみる、といふ。

男女の組み合わせが百あれば、百通りの種類があつていいのではな

いか。

男と女の間には「深くて暗い川」がある、といわれてきた。相手の生と性を踏みつけていることに、無神経で鈍感な男たちへの、女たちの心象風景をいっただけである。

百万語を並べても、無神経で鈍感な男たちには、女たちの心象風景は伝わらない。

「女が風通しのいい生き方を望めば、結局、男が抑圧されることになりませんか」

フェミニズム（女性解放運動）を、男と敵対する運動だと解釈する男が、あとをたたない。

男の生と性を踏みつけにして、女が解放されることを、だれも願ってはいない。男も女も「共に」解放されることを願う「共生」の論理が、フェミニズムなのである。

男たちよ。社会のしがらみから自由になって、のびやかな心で、女たちと向き合おうよ。そんな風通しのいい、やさしい関係を、ともにつくりあつていこうよ。

いまはまだ、男と女の間には「深くて暗い川」が横たわるけれど、兩岸から舟を漕ぎ出せば、きっと出会えるよ。

さあ、いでたたん、男たちよ！

（フリー・ジャーナリスト）

いでたん、いざ

— 女たちよ! —

ますの きよし

(1) 「落ちこぼれ」派の立場から

昨年の十月、本誌創刊のためのアッピールを全国に発送する作業をみんなでワイワイおしゃべりしながらやっていた時の話。

高校教師のNさんがこんなことを言った。

「だいたい服装とか規律のことをやかましく言う教師に限って、反戦とか性差別など肝腎のこと言わないのよね。私なんて校則がどうのこうのとやかましく言う気ないから、今の教育体制の中じゃ落ちこぼれだわ」

これを聞いてにわかにはぼくは、Nさんに親しみを覚えた。Nさんは、キリッとした風格のあるベテラン教師で、「落ちこぼれ」というイメージからは縁遠い人だし、特に男に対しては手きびしい人だから、こちらもうっかりしたことは言えないぞと、正直言っただけから、緊張感をもって接していたのだけれど、「なあんだ、この人も落ちこぼれ意識をもっていたのか、そんならぼくとおなじだ」と安心し

たのである。

「落ちこぼれ」という言葉にはマイナスイメージの方が強いかもしれないが、ぼくはむしろその中身を次のように積極的に理解していきたいと思っている。

①今の教育体制、又は社会総体を支配している価値観は、優等生やエリートに何らかの報賞を与えることで人々を互いに競争させ、序列化する仕組から成り立っている。その中で人はいつも背のびし、自分を大きく見せようとしのぎをけずっている。それでも何割かの人は必然的に落ちこぼれる。

②落ちこぼれ派は、そこで開きなあってしまえば、肩ヒジ張って自分を大きく見せる必要がなくなるから、精神的にリラックスできる。すると、エリートに与えられる報賞なんかなくても、自分が生き活きできる道のあることが見えてくる。

③落ちこぼれ同士の間には競争がないから、いい友達になれる。人間にとっていちばん大切なのはいい人間関係だから、開きなあって

た落ちこぼれは、そこでハッピーになれる。

ただし、そこで開きなおれないと、コンプレックスでみじめになるけれど……。

⑤開きなおった落ちこぼれが生き活きしているのを見て、エリートたちは動揺する。

「おかしいな。おれたちはこんなに勉強し、こんなに働いているのに、いつも不安だ。それなのに、昇進のレールからはずれた奴らがあんなにリラククスしているなんて！ もしかしたら、おれたちはだまされたのかな？」

⑥エリートたちが動揺すると、彼らに与えられていた報賞も色あせてくる。学歴？ 課長の椅子？ マイカー？ かつてはあれほど魅力的に見えたそれらの勲章が、人間生活の本質に何ほどの価値を持つのかが問われるようになる。ましてエリートが自分の子に金属バットで殺される現実を目のあたりにしては！

こういう意味で「積極的落ちこぼれ派」の強みを確信するようになったのは、この十年来、右の論理が単に自分の観念の中だけでなく、世の中で実際に進行していることを膚で感じてきたからである。ぼくは自分でミニコミを発行している関係で、あちこちから送られてくる各種の自主出版物に目を通す機会がある。大体が反体制的だけれども、それにも二種類あつて、「権力に力で対抗するんだ」とリキんでいる感じの政治・労働運動関係のものは、率直に言つてタタマエが多くて面白味に欠ける。やっぱり「力の論理」に乗つてしまつて、自分を大きく見せようとするところがあるからだ。

これとは逆に、体制からドロップアウトして楽しくやろうや、と

いう感じのグループは、肩に力を入れず、リラククスしているから、一見弱々しいようで案外バイタリテイがある。これは概して、女の人が出しているミニコミ類にみられるふんいきである。

これはおそらく、キャリアウーマン型を志向する人は別として、支配的な「男社会」から女が「落ちこぼれ」ているところを出発点にしているせいなのかもしれない。

いづれにせよ、落ちこぼれ派がマイノリティであることにひげめを感じることもなく、開きなおつて連帯し、目を輝かせていくとき、さしも強固にみえた現代文明の価値大系も、もろくも崩壊のきざしをみせはじめのちがいない。

(2) 産業ロボットVs家族？

商業新聞・マスコミが今年の初めに企画した連載、特集の傾向は二つに大別されるという。一つは、セラミック、超LSI、産業ロボットなどに代表される産業技術の最先端、もう一つが家族・子育てをめぐる諸問題だ。

お気付きだろうか？ この二つの分野は、中学・高校の教育課程で、一般に男子と女子が分けられてしまう教科、つまり技術科と家庭科にそれぞれ関係しているのだ。

これは偶然的な符合ではない。マスコミが特有の嗅覚でかぎつけた現代社会の二大テーマは、そのまま、教育と社会のひずみともいふべき問題と深くからみあっているのだとぼくは思う。

教育の荒廃、家庭の崩壊が言われている今、産業社会は科学技術が切りひらく未来をバラ色で描き、技術がもたらす豊かさや便利さこそ人間に幸せをよぶかのように吹聴する。

それを信奉する男たちは、残業につぐ残業、日曜出勤、休暇返上もいとわれない。なるほど、日本製の車は世界に溢れ、日本製トランジスターラジオはアフリカのサバンナにまで進出した。でもそれは人々をハッピーにしたのだろうか？

たとえば、母乳よりミルクの方が体にいいというPRにまどわされた現地人が、豊かな乳房から湧き出る母乳を捨て、粉ミルクを川の水でといて子どもに飲ませた結果、病気になるって多くの子どもたちが死んだという。

私たちは、彼らを無知だと笑えない。形はちがっても私たちの身近に、似たような文明信仰の悲劇がいっぱいあるからだ。

働きすぎの男たちの足元に、公害はもちろん、育児ノイローゼの母親、テレビッ子、荒れる学校の日常がある。

私たちは技術教科を教えられても、人間生活の基本、生命へのやさしさを教えられなかった。女たちはそれを教えられたかといえは、やっぱり教えられなかった。彼女たちが教わったのは、裁縫と料理の技術、それに良妻賢母の道だった。結局、男も女もいちはん肝腎なことは学校で教えられなかった。学校で教わった三角函数や古文や鎌倉時代のあれこれは、試験が終わると大部分忘れられた。

卒業した後、彼らの中に残された「学校の痕跡」は何だろうか？

それは、朝八時半に正規の服装で登校し、教師に口答えせず、校則を守り、集団の秩序を優先する習性！

それだけはそっくり、企業の中の職務規律として生かされた。企業にとっては、その規律と、受験競争の中でたきこまれた競争の習性さえあればよい。かくて学校は、たえまなく企業に、優秀で従順な労働力を送りつづける。

かつて日本とアメリカが戦争した時、アメリカが真先に研究したのは日本の教育だった。日本兵の忠誠心はどこで叩きこまれるのか？ それは集団管理の徹底した学校においてだと分かった。戦後、GHQが日本の教育制度にPTAや生徒会、教育委員会などを導入し、民主化をはかったのはそのためだ。

しかし、三十数年にしてそれらの民主化のとりではおおむね風化し、日本軍隊の精神は企業の中に復活した。電気仕掛けの産業ロボットよりはるか以前に、赤い血の流れている「産業ロボット」が大量に生産されている。

「男は仕事、女は家事・育児」という性別分業でも、家事・育児の好きな女がやるぶんには構わないじゃないか、という人もいるが、「生活者」としての側面を切り捨ててしまった男は一種の産業ロボットと化すのである。

「忙しい男の人に家事・育児をやらせるのはかわいそう」という女性性は、やさしそうで、実は思いやりがないのだとぼくは思う。

まあ、他人のことはともかく、ぼくは男と女と子どもが分けへだてなく、平等ないい関係をつくるのが好ましいと思っているし、そのためには、汚れた食器を片づけたり、相手の下着も洗濯したりという日常レベルでの平等な生活感覚が不可欠ではないかという気がするのだ。

(3) 共に生きる明日へ

最後に、本誌の掲げる「男と女の自立」というテーマに関連して、日ごろの思いを書いておきたい。

今までにも多くの人たちが語ってきたように、男の身辺自立、女

の経済的自立、そしてそれぞれの精神的自立、これらはいずれも大切なことだと思ふ。特に、自分は男だから、身辺自立のいまだ未熟な部分をカバーするべく、これからも努力していくつもりだ。

ただ、自立という言葉は時に強者の論理になりかねないことも見とおかねばなるまい。

たとえば、独身の男がコインランドリーで洗濯をすませ、インスタントラーメンやマクドナルドハンバーガーで胃袋を満たし、残業を終えた後はパチンコやトルコでひまをつぶして、自分は誰にも依存していない、自分は身辺自立していると言いつつとき、実にさむざむとした印象をぼくは感じてしまう。無論、この場合その人が女であつても問題の本質は変わらない。

誰にも依存していない、というのは、食料の調達にしても、衣類の入手にしても、カネで支払われているからそのように見えるだけであつて、カネが透明に見える魔法のメガネでのぞいてみれば、人々は互いに依存し、依存されている関係が浮かびあがつてくるはず、現代社会の連鎖の中で、厳密な意味での自立は幻想にすぎない。

実はぼく自身、子どもを育てるまでは右の男に近い考え方に陥っていたのだ。「われわれの間では男女平等を実践している。男女平等なんてそんなに難しいものじゃない」と。

子どもと生活するようになって初めて、この世には誰かに介助されなければ生活できない命がある、それを介助するには、自分の生活ペースを大幅に変えなければならぬ、ということを実感レベルで教えられた。

それが第一段階の衝撃だつた。

第二段階のそれは、つれあいが職業病に倒れたときに来た。はじ

めのうち、彼女の頸腕障害の性質をよく知らなかったぼくは、「自分のことぐらゐ自分でやれば」と、今にして思えば冷酷な言い方をした。重症の時の彼女は自分の髪を洗うのもままならなかったのである。彼女は少し回復しては又倒れた。それを何度もくり返した。職場の状況などいろいろ必要な要因が重なっていたから、ぼくには見えにくかったのだが、「自分のことを自分で」やれない場合もあることを、長い時間かけてぼくは理解できるようになった。

又、彼女は多分、ホンネの部分で「仕事を辞めたい」と考えたことも何度かあるにちがいない。しかし、ぼくの月収十二万円という現実が、彼女の「経済的自立」を強制していた。その点は一長一短ともいえるが、彼女の状態がもっと悪化していたらどういうことになつていたか、それを考えると「経済的自立」を絶対的原則とすることにもためらいを感じる。

右のような経験を通じて、ぼくは「自立」というテーマが、「共に生きる」というもう一つの大切なテーマと補い合うのでなければ、強者の論理に陥ることを痛感してきた。いや「補い合う」といえばきれいに聞こえるけれども、実際にはこの二つのテーマは、時にギンギンと不協和音をたてて対立する。

この世の仕組みとその中で作られてきた私たちの習性、自我が二つのテーマのきれいな調和を妨げる。道は遠いけれど、明かりがチラチラ見えなくてもいい。いい女やいい男との出会いが勇気を与えてくれる。性別分業の壁を崩し、女と男の間の深く暗い河をわたるために、女と男と子どもが共に生き合う明日にむかつて、女たちよ、共に舟を漕ぎだそう、いざ！

(「交流」編集者)

私のいでたち

学校を見てしまった私

斎藤 美保子

講師として教壇に立つまで、私は、学校というのは、教師と子どもたちがともに学び、子どもの可能性を伸ばしてくれる場とばかり思っていた。また教師は、それを生きがいとする人であるとはかり思っていた。

「大規模校特派」としてK中に赴任をした最初の仕事は、用務員さんと一緒に、全クラス（三八クラス）と教職員の給食準備とお茶くみでした。免許外「英語」の担当で、授業時数が少ないという理由から「すべていろいろやってもらう」ということでした。そして、それがあたりまえであるという雰囲気でした。

当時、全国的にインベーダーゲームが流行し、非行、登校拒否、校内暴力などで教育の荒廃が叫ばれておりましたが、K中でも例外ではありませんでした。そうした背景には、学校や教師への不満・不信を生徒にいだかせる「弱点」がある、と思います。

K中は、県下一の大規模校で教職員六一名、生徒数約千七百名でした。クラブ活動が非常に盛んであり、そのためか、体育科教師や運動クラブの教師は幅をきかせていました。また、日本愛国党を賛美し、「日の丸」を教室に飾る教師もいました。体育祭では「日の

丸」「一球入魂」と書いた鉢巻をしめ、学校行事には「日の丸」「君が代」が当然のようについてまわりました。

このような「右翼化」した学校に、様々な教師がいました。多くの教師は生徒に対しては、「能力がない。ダメな子だ。しょうがない」とよく言いました。同僚に対しては、「あの先生のクラスはうるさい。何を指導しているのかしら」と、職員室は日常的に陰口を言うための場となっていました。この中で子どもは、敏感に教師間の仲の悪さを感じとり、傷つき、教師への不満・不信を募らせていました。大部分の中学生は、「わからない授業」による選別、管理、体罰で、教師からたつぷり愛情を注がれることなく、三年間を終えてしまうのでしょうか。

忘れもしません。K君のこと。先生方のK君に対する指導と、臨時採用の私への態度のこと。K君は、学内でもツツパリとして、その言動は注目的でした。一見してツツパリとわかるように、髪はリーゼントで、そりあげ、いつも教師をうかがうような鋭い目で、落ち着きがありません。しかし、私には親しく本心を出して接していました。あまり指名されたことのないK君にリーダーを読ませ、「よく読めるではないの」と言うと、「まあナ」とうれしそうにVサ

インをするのでした。

生徒たちの話によると、腕力の強い先生の授業では、姿勢が悪いと、「精神棒」がとんでくるから、授業中は静かにしているとのこと。また、「できる子」だけ指名する教師。声が小さくてわからない授業。徳川氏歴代の名を覚えさせ、テストする教師。その日の気分で注意したり、しなかったりするムラの多い教師……。そういう中で、K君は、自分の「ムカツク」胸の内を、弱い女教師である私に向けたのだと思います。

しかし、夏休み明けのK君は、今までとはどこか違っていました。顔は黒くなり、よくツバを吐きます。妙に落ち着きなく、「授業妨害」を始めました。奇声をあげ、歩きまわり、授業が成立しなくなりました。すぐ担任にその様子を話し、シンナーを吸っているのではないかと言いました。しかし、担任は、「僕の授業は静かにやっています」。また、学年主任のベテラン教師は、「うるさいのなら、一発二はつガンとやれ!」。別の女教師は、「あなたはやさしいから、完全になめられているのよ」と、私の指導力、力量のなさを指摘するのです。私は自分の力量をよく知っているから、学校の問題として取り扱ってほしかったのです。先輩の先生方に助けてほしいと思っただけ、先生方の指導を学びたかったです。聞き入れてもらえないくやしさがいっぱいになり、K君の悲痛な叫びがそれと重なって、毎日、毎日、私もK君も苦しみました。

その後一か月たって、私の不安は、残念ながら的中してしまいました。やはりK君はシンナーを吸っていたのです。ところが、先ほどの先生方は、自分たちのうかつさを反省するどころか、K君をがんにがらめに「管理」していきました。希望を見出す指導ではなく、

「事が起きたら考えます」式の指導であり、「こうしたらよいのでは」と言うのと、「あなたは担任ではないのだから黙って下さい」とうるさがるしまつでした。そして担任はK君のいない新設校（分校）へ異動してしまいました。残された教師たちは、「K君がいるから三年生を受けもちたくない」と言って、その醜態ぶりは、生徒が知らないほうがよいと思われるほどでした。

それにしてもいいかげんにしてほしいと思います。担任教師は、厳しい採用試験に合格した貴重な社会科教師です。私から見れば何と恵まれて、有利な条件の中にいることか。しかし、「頭がよい」だけでは、人間の痛みは感じることはできません。「どうにもならない」といつて異動すればそれで済む教師。なんとも子どもたちがふびんではありませんでした。それと同時に、いやそれ以上に、自分の力のなさを、臨時採用の「期限」つき教師であることをのろわしく思いました。

しかし、このように、色々なことがわかったのも私が臨時採用であつたからです。この未熟な「期限」つきの教師が、悩みながらもやってこられたのは、元気で明るい子どもたちの支えでした。合唱コンクールのこと、決して忘れません。「贈る言葉」の斉唱で涙を流し、別れた時のこと、決して忘れません。K君、別れの時、私に顔を見せに来てくれましたね。うれしかったですよ。

「踏まれても、踏まれても、空を見上げるタンポポのような人に、私もなりたいです」とK中の教え子であるH子さんからの手紙が来て、ハッとしました。最後の授業でこの話をしたので。

もう春ですね。私も、そして教え子たちも、どこかで、しっかりと根をはり、芽を出すでしょう。あすの空に向かって。

二十四歳、社会へいでたつて、一年—— 小田 亜佐子

いま、わたしの手元に、大学卒業前に就職先を求めて必死の思いで書きつけた一文があります（半田先生のご厚意で『家庭科教育』81年5月号に掲載していただきました）。一年間をふり返るに当たって、力不足を反省するだけでごまかしてしまつてよいのかというしるめたさを感じています。せめてこの場をお借りして自らをさらけ出し、借りものでない自分のことばで語ることで、とくにWeにかかわるなかでわたしを力づけてくださった方がたに少しでもお応えできればと思います。

わたしのいでたつた社会は、紛れもない「企業社会」でした。大企業の管理の厳しさを恐れて、零細出版社へ逃げこんだつもりでしたが、結局、両者に本質的な違いはないと言ふべきでしょうか。

個人の意思、希望を出し合い、討論し、その上で合意をつくるという手続きの全く無縁な社会。決まりに対しては、拒否はもろんおかしいと口にすることすら、おかしい（異常だ）とする社会。そして驚くべき「常識」が闊歩する社会。曰く、能力とは本来男固有のものであつて、妻子を養うだけの収入を得る「商品購買能力」、および定職上の地位に就き、不信と偽購とストレンスのなかを生き残る術としての「協調・適応能力」で測られること。曰く、男の自立

とはこれらの「能力」を身につけること、女の自立とは夫や子どもに甘えたり足を引っ張ることなく、愛情深く両者の世話をすること。そして男女別の「自立」によつて、成熟した「おとな」||「人間」になれること——。

この「社会」「常識」、どこかで見覚えがあるんです——そうだ、学校だ。そうか、読めたぞ。わたしがかみついた教師たちは、企業社会からの規範と価値観をまことに素直に受け入れて、それを教えこもうとしただけなんです。企業と学校はともに「おとな社会」を形成し、それぞれ人間の個性をつぶしにかかるわけですね。

わたしはそんな企業社会にどうしてもなじみませんでした。こんな時代だからこそ、自己の問題意識や目的に照らして、無意味なことをしてよいのかと不安とあせりかられます。希望は無視され、追いつめられ、辞めたいと口にしつつ、それでもなお現在の仕事のなかで自己を表現し確立してゆく可能性はないものかと手探りしている人たちを、わたしは知っています。考えぬいた末、大学にとどまり、あるいはもどつてゆく人たちもいます。そこまで自己を問いつけていった彼らの純粹さに対して、「おとな」はまたも、モラトリアム人間、不適応、甘えだと、罵声と嘲笑をあびせるのです

か。しかし、いったい「おとな」は、彼らを非難できるだけの真摯な生き方をしてきたと言えるのですか！

ここまで考えて、しかしわたしは、いままでに自己の生きざまについて突きつめて考えてみたことがあったかという問いを發さないわけにはいきません。学校時代、なぜ学生なのかと正面から疑ったことがあったでしょうか。受験競争に自らすすんで参加するうちに、大学の存在を当然の前提として受け入れてしまった自己をごまかすことはできません。だからこそ、女の生をときはなつ運動の担い手となりたいと願ったときでさえ、研究の場としては大学しか、目に入らなかったのです。将来の経済的自立、自己を伸ばす場の獲得に氣をとられているうちに、結局同じ落とし穴へ転げこんだのです。卒論の不出来やその後のテーマの揺れも、研究者でもないのになただ専門研究の表面を漂っていることに帰因するのでしょうか。そしていままた、同じアカデミズムの枠の延長上で専門書編集の仕事に携わる自己の将来も問われてくるのを感じます。曖昧な、不透明な自己の姿が現れるばかりです。

結局わたし自身、上の学校へ進むにつれて、知識偏重傾向を強めていったのに違いありません。理論は社会的現実のなかでこそ鍛えられるべきなのに、問題の中へ自ら入ってゆくことなく、傍観的に知識だけを集めて再構成すれば、それで学習、研究として通用したのです。沖繩、広島、水俣、そして国際障害者年、これらすべては結局、わたしからは遠いできごとでしかありませんでした。他者、とりわけ弱者の「痛み」を自己のものとして引き受け共有しようとする態度をもたず、同時に自己に向けられた他者の誠意にも鈍感でした。あえて学歴などの既成の価値を拒否して生きる人びとに比べ、

あまりにも発想が安易でした。

学校教育のなかで、わたしは「できる」生徒としてつねに優遇され、その点では強者の側にいました。なぜ受験体制に疑いをもたなかったのかと追及はされても、自分も犠牲者だと開き直ることは許されません。そのわたしが、いま、企業のみならず具体的にどう発言し、行動するかによつては子どもたちを抑圧する側に回ることもなるでしょう。学校が企業社会の反映である以上、教育は決して教師だけの責任ではないでしょう。ただ、流されるだけであれば、教育に荒廃を招くのはほかならぬわたしたちであるということになります。

企業社会||おとな社会に異議申し立てをすることは、翻って自己の生きざまを厳しく問い返されることだと、いまごろになって気づいたわたしです。恥ずかしい限りです。

これからの一年間、僅かながらも蓄積してきたことを一つ一つ徹底的に疑い、壊し、捨て、そして拾う作業をしなければなりません。何よりもまず、自分に素直に、他者に誠実であらねばならないのだと思います。仕事には逃げずに向かってゆき、どうしても納得できないときには、おかしいと言う勇氣をもちたいのです。

しかし、自己の歩みたるや、あまりにのろすぎます。毎日が迷いの連続で、これからもっとも厳しく自己とのたたかいを迫られたときに、どこまで堪えられるのか全く自信がありません。けれどもこの一年、いくばかりかものを感じ考える活力を与えてくれたのは、直接、間接に出会った人びとの、心にふれることばの数々でした。それを導きの灯と頼んで一歩ずつ、わたしは歩きだすしかありません。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
新しい家庭科を創るために☆☆☆☆☆☆

— 小学校では — 名取 弘文 —

生き生きと

おもしろい授業を

八二年一月二十九日から広島で開かれた日教組教育研究全国集會に、ぼくは神奈川県代表の一人として参加し、家庭科分科会にレポートを提出した。大会のスローガンは「ヒロシマの心を世界に」である。世界で初めての原子爆弾の被爆地で教研集會が開かれたことの意味を考えよう、教育の原点である平和について今こそ声を大にして説こうというあいさつを聞きながら、ぼくが思い出していたのは、映画『二十四時間の情事』の一シーンだった。マルグリット・デュラスの原作は『ヒロシマ、私の恋人』という題なのはどうして『二十四時間の情事』となってしまうのかと、映画会社の興業的計算を不快に思いながら見た作品であった。フランスのヌヴェール市で、二〇歳の時にドイツ兵に恋をしたために、フランス解放の日になんげな罰として髪を刈られて地下室に閉じこもってしまった女性が、平和映画に出演するためヒロシマに来ている。そして、日本人の男と恋をする。ベッドの中で抱き合いながら彼女は「私はすべてを見たの。すべてを」と語り、彼は「きみはヒロシマで何も

見なかった。何も」と答える。短い恋の終わりに彼女は「ヒロシマ。それがあなたの名前よ」と呼び、彼は「きみの名前は、ヌヴェールだね。フランスのヌヴェール」と返し、映画は終わる。この二人に出会いを持たらした映画についてデュラスはこう書いている。「平和について感化を与えようとする一つの映画の撮影が終わったところである。笑うべき映画ではまったくなく、またもふえた映画というだけのことである」。

ぼくにとってヒロシマとは何か。平和を教えるとはどうすることなのか。平和公園を歩き、資料館に寄り、原爆ドームで記念撮影をする。それも一つのヒロシマ体験であろう。ヒロシマの写真集を買い求めていって、子どもたちに示して、『原爆の子』の作文を教材にすることも一つの教え方であろう。それはそれで大切なことだと思ふ。何のために学ぶのか、何のために生きているのかを一向に教えない今の学校教育に対し、自分一人の生活も大切だけれども、他の人たちの生活も大切なものであること、自分たちの国の中にあっても、他の国に対しても差別や抑圧があつてはいけないし、侵略や戦争があつてはいけないという大義を教えることは絶対に必要である。その大義を教えずに勉強勉強と子どもを追い立てるのは明らかに誤っている。

しかし、どうも「またもふえた」程度のもののように思えてならないのである。交通事故を目撃して話す時、火事を見て興奮してしゃべる時と、教研での広島体験と同質だとは思わないけれども、「ヒロシマの心」を知ったのだろうか。

こんな風に考えながら、第一日目の午後の家庭科全体会に出席したのだけれども、どうもそこでもある種の異和感を感じてしまった。

その異和感は結局、四日間、感じ続けたのだが、それは、今の子どもたちをどう見るのかということ、どうして教科書教材にこだわるのかということ（これは、同時に、民間サークルに参加している人たちが過去に出された実践をそのまま用いていることにも当てはまる）であり、また、先ほどあれほど感じた「ヒロシマ」がもうどこかへ消えてしまったことにもよっていた。「今の子どもは総非行化しうる」というような発言が出たのだけれども、ぼくはそんな発言を平気でする人がいることに嫌気がさしてしまふ。だいたい、非行というのは集団からはみ出した時にいうのであって、集団全体がはみ出したなら、非行ではなくて行そのものである。「今の子どもは総非行化しうる」と教師が思っていることを子どもが知ったら一体どうなるのか。信頼関係が成り立つはずがない。ぼくは、子どもたちのことをそんな風には見たくないし、実際ぼくが家庭科の授業の中で見ている子どもは、それぞれに素晴らしさを持つ者ばかりである。言ってみれば、子どもの素晴らしさが浮かび上がってこないような授業や、子どもの個性を引き出せないような教師であってはならないのが原理であるはずなのだ。

しかし、各地域、各県から持ち寄られた実践報告を読み聞かしていると、子どもたちの個性を引き出すどころか、画一化してしまっているものもまだまだあるようだ。革新府政を奪い返さなくてはと始まったレポートが、ジャガイモの調理で終わっていたり、地域文化の豊かな県の報告がゆでたまごだったりと、明らかに教科書教材にこだわる実践が多いのである。また、「最近の子どもは冬でもラニンング・シャツを着ている。暑さ寒さに応じた衣類の着方が身についていない」などと教科書の記述をズレと思わないで、正しいこ

ととする発言があったりするのにも驚いた。おまけに、そういう論議に会場が湧くのである。教科書へのこだわりは、民間サークルにもあるようだ。どこかでハッピーの製作の報告があると、次の年も次の年も、同じ内容の実践報告が幾つもの県から出てくる。地域の特有のもの、それぞれの子どもたちの個性といったものと離れて、全国誰にでも最高の教材というものはあるはずはないのに、ショートパンツの報告があると、全国的にショートパンツとなるのもつまらないものである。

一つの実践を、そのまま踏襲するのではなく、教師の個性、子どもの様子、地域性というものの中で解体し、再編成することが、ぼくたち教師に課せられていると思うのである。教科書教材、サークル教材をそのまま教えているのでは、ぼくの「ヒロシマ」は視えてこないだろうし、子どもの「ヒロシマ」も出てこないだろう。

もちろん、地域性を取り入れた実践報告もあった。鹿児島島の奄美大島での、伝統食づくり（サツマイモのツタを具にしたみそ汁など）や、大分の石臼で小麦を碾いてのうどん作り、長野の伝統的せんべいと今風せんべい作り、岡山の裏山の枯葉を集めての焼きいも大会などの報告は、授業をしている子どもたちの表情が目につかぶようであった。そういう授業の時の子どもは、「総非行化」とは全く無縁の子どもであると思えてしまふ。そして、このようなおもしろい授業が、今の学校の中でもやろうと思えば出来ること、それによつて子どもも生き生きと出来るし、教師も楽しくなることをぼくは確信を持って言いたい。

男の家庭科専科三年間のまとめとして、各地のすぐれた実践に学びながら、『W』の「小学校では」に記録を連載したいと思ひます。

「男の家庭科」がめずらしいものでなくなり、ぼくの実践が「男ならでは」のユニークなもの」でなくなることを目ざしながら。

〈六年生〉

「ハーイ、元気だった？」

「今年もナトリの家庭科か。面白いことやろの」

「ナトリの家庭科は面白いってお父さんは言ってたけど、お母さんは高校入試の役に立たないって言ってたよ」

「そうです。村岡小学校の教師は、タコ上げ大会をやったり、星を見る会をやったり、生徒とお風呂屋さんに行ったりばかりしていて、テストをしないって評判だよ」

と、例によってベチャクチャとおしゃべりが続く。教師がおしゃべりだから子どももおしゃべりになったのか、家庭科室に来ると解放感を味わって賑やかになるのか。

五年生の時にも一緒に家庭科をやったのだから、もうお互いによそいきの顔をすることはない。

「なあんだ。六年になってもちっとも変わらないなあ。もう少し名門校の生徒、最上級生の落ち着きという顔をしたら」

などとやり返しながら、「一年間の予定」をノートに書かせる。

一年間の予定

一、衣

①エプロンを作る。

②洗たくのしかた。品質表示。

③アイロンのかけ方。プラグをつなぐ。蛍光管の付け替え。

電氣器具の手入れ。

二、食

①好きな食べ物、嫌いな食べ物。食品の栄養。食品の品質表示。添加物。

②ソバづくり ③タコアンづくり

三、住

①世界の家、日本の家 ②明るさと室温

四、家族

①男のくせに、女のくせに ②生活時間調べ
五、卒業製作（お好みメニュー）

①小屋を作る ②椅子を作る

③ツツレ織りでベストを作る ④ししゅう

⑤染色

「今年もノートか」「食べ物が少ないよ」などの声がたくさん出てくるので「ノートは知的生産技術なのだ」「食べ物は五年でいろいろやったでしょうに」と答えて、「そんなに食べたいなら、トルコのパンを食べさせてあげようか」と、母親がトルコみやげにと持って来てくれた平べったいパンと、写真の机の中から出す。発酵させないで焼くからだろうか、パイのようなパンである。「イスラム文化圏のパンはちよつと違うだろう」と見せるのだけど、誰も手を出さない。飛行機で運ばれて、人の手を渡って来た間にカビがいつばいはえていたのである。

そして、エプロンづくりである。これは教科書にも載っているの
で、作り方は教科書を見させることにする。ただし、デザインは好

きにさせる。布も自分たちで買うなり、家にあるものを使うように言う。というのは、例によって教材屋さんが「エブロン・セット」の見本を置いて行ってくれたからである。セットの中には、布地、型紙用紙、紐、ししゅう糸、ししゅう針が入っている。値段もそんなに高くはない。これを子どもに買わせてしまえば、簡単である。布地が小さい、薄すぎたなどということもないだろうし、デザインもいろいろ考えなくてすむだろう。指導も楽だろうし、時間もオーバーしないだろう。しかし、そういうところから、画一化というのが始まるのである。新学期になると、職員室の机の上には、市販テスト、ドリル、絵の具セット、理科教材の見本が山のように積まれている。組合の大会で「市販テスト不使用」が叫ばれ続けているのに、平気で市販テストを購入する教師は多い。そういう教師へのデモンストレーションの意味もこめて、「エブロン・セット」は不買である。もちろん、五年生の裁縫箱も買わない（去年からは、裁縫具は消耗品として予算を取り、お菓子の空箱をグループ分そろえて使っている）。

布を買ったことのない子どももいれば、手芸が好きで特定の店が好きなの子どももいる。放課後に仲間と連れ立って布を買いに行くのも楽しいらしく、いつ行こう、いつにしようかと教室の中がまた騒がしくなる。

そして、一週間。子どもたちが持ち寄った布地は、スヌービーなどのアйдルをデザインしたものや、カーテンの古い布だったりといろいろである。中には、古い敷布を持って来た子どももいて、ほくも苦笑いしてしまったし、本人も笑ってしまったということもある。

型紙も、包装紙だったり、新聞紙であったりと、いろいろである。紙をゴソゴソやりながら、自分の身体に当ててみたり、巻尺で身体の寸法を計ってみたりして、とにかくも型紙が出来上がったところまでで二時間が終わる。みんな、型紙のエブロンを身体につけてみると、どういうわけか、ミニ・スカートほどのものがあつたり、ロング・スカートのようなものがあつたりして、大爆笑である。

三時間目から、大半の子どもは、型紙に合わせて布にチャコペンシルで印を付けて、布を断つ用意をする。が、よく見ると、ぬいしろなど計算外である。あわてて「三つ折りにするから、最低三センチはぬいしろをとれ」と大声で言う。言ってから気付いたことだけれど、学校の備品の鋏は、全部右手用である。左利きの子どもも、当然クラスの中に何人かいるはずである。どうして、左手用の鋏を買っておかなかったのかと悔やまれる。それで左利きの子どもは器用に、右手用の鋏で布を断っている。「国際障害児・者年」などと言いながら、ぼくたちは実に鈍感のだなと思ってしまう。もつとも、子どもは子どもで、鋏の上下を逆にして、親指と四本の指の入るところを逆にしたまま使って「せんせ、この鋏ほろくて全然切れない」などと悲鳴をあげている。

布を断って、端を三つ折りにして、仮縫いをするところまで来ると、明らかに早い子ども、遅い子どもの差が出てくる。これはデザインにも言えることで、ま四角な布に紐を付けるだけという子ども、上と下を別々にして下にはギャザを入れるという子ども、お母さん用を作るからとぼくのサイズでやっている子どもといろいろである。見ていると、やはり女子の方がさっさと作業を進めていて、男

の子の中には「男なんだから遅くて当然、下手で当たり前」という顔をしている者もいる。もちろん、男の子、女の子という区別は危険であり、男の子でもバイアス・テープを持って来てうまく作ろうとしている子どももいるし、女の子でもうまく布が断てないでデコボコにしている子どももいる。それなのに、女の子の方が上手で、男子はそれなのにと思ってしまうのは、教師の方が持っている先入観なのだろうか。あまりにも手間取っている子どもには「三つ折りして、仮縫いのところはセロファン・テープで留めろよ」と言っていると、同僚のS先生は半ば呆れ顔で「なるほどね、テープで留めるのね、本当に男の発想ね」と笑っている。でも、テープでも何とかなるものである。

ミシンは、五年の三学期にやっている。とはいっても、寄せ集めのミシンである。メーカーも違うし、機種もバラバラ。前の方のグループがベルトを切ったかと思うと、後ろのグループは針棒が動かないと大声でぼくを呼ぶ。ドライバーとペンチを持ってぼくは右往

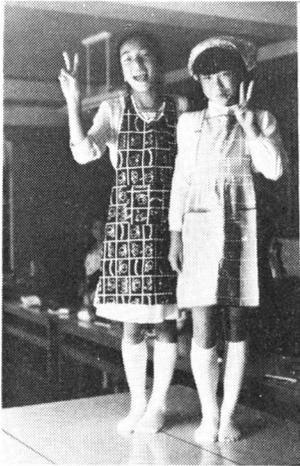
*



左往である。端切れで糸調子を確かめるように言ってはあっても、上糸下糸が合わないままエプロンを縫って、出来あがりグチャグチャになってしまった子どももいる。ミシンの調子が悪くて、つい手で縫い上げてしまった子どももいる。

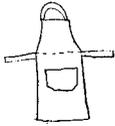
悪戦苦闘の八時間。それでも、どうにかエプロンは出来上がり、最後にエプロン・ファッション・ショーをやる。家庭科室の机を中央に集めて舞台と花道を作り、演劇クラブからスポット・ライトを借りてくる。カセット・テープで音楽を流し、司会者がにこやかに「お待たせしました。ただいまから、六年七組の皆さんによるエプロン・ファッション・ショーを始めます」と呼びかけてショーが始まる。舞台の上でポーズをとって、自分なりに工夫したところを言いい、友達の評を聞く。中には、「工夫はなし、だってお母さんに作ってもらった」と笑っている子どももいる。それはそれでいいではないか、親子のコミュニケーションが出来たのだからと思う。

*



エプロン・ショール

1. デザイン



一番わたしなやり方でうしろを縫うようにした。

2. 布

- ・うすめの木綿
- ・ピンクの地に、くまの模様を かいらがっついている。

3. 工夫したところ

- ・ へたのところに、スナップをつけた。
- ・ へたの裏側に、ひもを縫いこみ、うらからもつけた。

4. 友達の見え

- ・ しゃがんで、見る。
- ・ ピンク色がかわいい。
- ・ へたの裏側に、ひもがついている。

わたしの感想

- ・ 大きめに出来て、おもしろい。
- ・ へたの裏側に、ひもを縫いこみ、うらからもつけた。
- ・ エプロン・ショールを、お料理をつくるのが、おもしろい。



◇このエプロンは、五年の三学期から作ったから、作ったときの印象はあまりないけど、今日のエプロン・ショールに着てみて、きたないなあ（ぬい目が）と思った。

みんな「ステキ」「ギヤザがいい」「上品」「こってるなあ」といろいろなるらしいこと言ってくれて、感じきしちやったけど、これがパオンのぞうさんのきれだったら、どうなっちゃうだろう。この大人っぽいきれだったから、そう見えたんだわあ。

反省してみて、ひものところがよっちゃったり、むねあての部分が小さくなってしまったけど、自分にしちやあ、まあまあよくできてると思ってる（自分だけで思ってるんだから、わらないでー）。

とにかく、はずかしい。エプロン・ショールが

子どものノートから

◇エプロン・ショール

①デザイン

もう少しポケットなどを作って、工夫したかった。

②布

布はおかあかあさんが買ってきてくれたので、あまりわるくはなかったけど、島々もようや、もう少しがらのあるものがよかった。

③工夫したところ

ポケットのところを布をぎやくにしてつけたので、ポケットがよく目立つ。

早く終わってよかった。ホッ。

(皆の作ったエプロンが意外と良かったので、「藤沢駅前で売ろうよ」ということになったのだけど、駅前は露店商の縄張りがあるさくて、勝手に売っているとトラブルを起こすと、そのスジの人に言われて、これは断念。でも、そうすれば「労働」ということ、金を得るということを体験させられたのに、残念である。)

〈五年生〉

五年生の方は初めての家庭科でこれまた大喜びである。一年間のメニューをノートに書かせて、「家族の紹介」「家事分担」から授業を始める。家事の分担が少ないことは今さら言うまでもないことなので、「一週間、目標を決めて家事をする」と宿題を出しておいた。少しはやるようになるだろうか。

一年間の予定

一、食べること

- ① 雑草料理
- ② 村岡印のマーメイド
- ③ うどんづくり
- ④ 野外でカレーライスづくり
- ⑤ 奄美大島風ちまき
- ⑥ 白菜のつけもの

二、家について

- ① 家族の紹介
- ② 家事分担
- ③ 家系図と親せきの呼び方
- ④ 近所つきあい図

三、着るもの

- ① 袋をぬう
- ② 洗たく(石けんと合成洗剤)

③ ミシン 四、住むこと

- ① ゴミ問題の研究と発表

- ② 大きな店と小さな店(発表をきく)

五、特別メニュー

- ① テレビ局の見学
- ② 日本民家園の見学
- ③ その他のいいこと

自分の家族

五年 橋本 薫

おとうさんはキツネといわれます。おとうさんは以外（ゴ）ときょうです。

おかあさんともときょうで、あみ物なんかすきみたいです。おかあさんはときどきバーマをします。のばすとクルクルもどつてしまひそう。

一番上のお兄ちゃんは、テニスとかバドミントンがじょうずです。二番目のお兄ちゃんはサッカーがすきで、以外（ゴ）とうまく、たつきゅうもやれるそうです。でも、そのわりにはやせています。

一番下のわたしは、きょうというより、ぶきょうで、あまりとくいなものは、それほどありません。

この程度の「家族」認識が一年後にはどこまで深まるか、興味のあるところある。

(藤沢市立村岡小学校)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆ 新しき家庭科を創るために ☆☆☆☆☆☆☆☆

—— 中学校では —— 熊本県家庭科サークル

平等と平和なくらしを創る 桑畑 美沙子 ——

家庭科をめざして

一、サークルについて

「一九六〇年代の半ばごろに熊本の家庭科サークルは発足したそうです。教科書中心の家庭科を、いくら教授法に工夫をこらして授業に臨んでも、関心を示さない子どもたち、生き生きとしない子どもたちの姿に悩み続けていた教師が集まってきました。はじめは、二、三人で、中学校・高校の合同の少人数でしたが、今では一〇〇人に近い会員にふえました。そして、中学校・高校のそれぞれの分科会で月例会をもつほどに成長してきました。この間、会員たちは「子どもや地域の生活に根ざした家庭科」の教育内容の創造を追い求めてきました。その結果、全国レベルで評価されるような実践が生み出されると同時に、中学校・高校ともに、男女共学が実現していききました。……(略)……

私たちは、ここで、今までの実践の成果をまとめて、みなさまのご批判を仰ぎ、より一層の前進をはかりたいと考えました。あわせて、サークルがここへたどりつくまでに、多大なお力ぞえをいただきました。

きました諸先輩、とりわけ松藤マツエ先生(一九七七年、熊本市立京陵中学校で退職)、緒方和子先生(一九七七年、県立第一高校で退職)、中山ツミ先生(一九八一年、県立第二高校で退職)、松岡綾子先生(一九八一年、熊本市立京陵中学校で退職)の四名の先生方に対して、感謝の気持ちをこめて、この実践集作成にとりかかりました。……(略)……」

これは、一九八一年十一月、私たちのサークルで創刊した実践集の「はしがき」からの引用である。

文中にもあるように、一五年位前、二・三人で出発したサークルが、現在では、高校部会、義務教育部会ともに五〇人近い会員を有し、それぞれ定期的な例会活動を行うまでに成長している。

月一回、土曜日に開かれている義務教育部会の例会では、『家庭科で子どもにつける力』『家庭科で何をどう教えるか』を、各自の実践を通して検討している。参考文献の輪読など、その必要性・重要性を十分に認識しあいながらも、継続的に実現できていない現状である。このような例会活動の他に、一月に中・高交流会、八月に実験・実習教材研究会も定例的に開いている。

一九八二年の中・高交流会の様子を、サークルだよりで紹介したい。

なお、サークルだよりは例会の様子、各種の情報、次会の案内などをのせて、毎月、会員の手に郵送されている。教師として、家事・育児の担当者として、二重の役割を背負っている家庭科教師なので、子育て中の人や、遠隔地に住む人の中には、「例会への参加は困難だけど、サークルだよりを読んで勉強したいから」と会員になり、できる範囲での仲間としての活動を続けている人もいます。

中高交流会を行いました

一月六日、県共済会館で、中・高交流会実施、参加者約三十名という盛況。組織率のふるわない中、管理体制のしめつけ強化という状況の中で、中学校の先生方が「男女共学を、女生徒だけの授業でも、共学にたえる教育内容を保障したい」と日々研鑽をつんだ中での実践を出しました。高校側からは、進路指導の壁、男女の特性支持意識の強い教師集団の中で、組織的に遂行されつつある家庭一般の共学の内容に関する研究、選択、食物工の共学へのあゆみ等が出されました。

県指導主事の現場教師への対応の仕方等、中、高で差があること、お互いに「時折、情報交換しあわなないかんね」と話すことでした。

○中学校サークルとして、加工食品の選び方(松岡)、被服整理(鹿本サークル)、でんがくについて(後藤)、米を使って(中山先生の全国教研レポートを吉田先生の実践も加えて

説明)、保育(八代)、食事診断(中務)の六本の実践を出しました。資料として十二月十四日の市民祭の展示資料を用いました。

高等学校では、県全体としての男女共学の実情を渡辺(小国高)氏より、甲佐高における食物工の男子履修の始まりと現状を坂本氏より、松橋高の食物工の男女共学の生みの苦しみを森川(現在松橋養護)氏より紹介されました。——以上、午前中——

○午後、提案と紹介として、①中・高の交流会を定例化しよう……例年一月六日、この時にと決定。来年もやります、あけて下さい。

②「家庭科の男女共学(修)をすすめる会」熊本連絡会の発足。世話役・立山ちづ子氏、会に未加入の方、よろしかったら御参集ください。

——十一月サークルだよりに会についての紹介あり——。③県教研で男女共学についての大きな呼びかけをしましょう。④一般市民への呼びかけを努力しましょう。⑤熊本県家庭科男女共学の歩み——運動と授業実践のあゆみ(仮称)をつくりましょう。……すでに大分、北海道で実践集が発行されています。私達の男女共学運動も早や一〇年目をむかえました。今回の交流会でも気づいたのですが、サークルで検討し、実践の中で財宝化した例

……サークルの財産です……もたくさんになりました。ここいらで整理してみましよう。

又、サークルを、男女共学を今日の姿にまで高める為に御尽力いただいた松藤先生、緒方和子先生はじめ多くの諸先輩へ感謝の気持を実践集であらわしましょう。それに、きつても書くこと自体が、自らの、ひいてはサークルの力量をかめることです、などの提案説明で、多少の重たい空気も、そのうち「やりましよう」というムードにかわりました。

高等学校としては五月発刊を希望していますが、それは努力目標とし、最大限十一月教研を目的にとりくむことになりました。サークルの方々に調査(男女共学の我々の歴史を把握するため)や執筆をおねがいます。その折はよろしく御協力を。

○協議に入り、中・高・大とたての連帯と、職場サークル、県全体のよこの連帯の必要性、教科書内容の検討を視点として、「地域に学ぶことの大切さ」が確認されました。

最後に中山(第二高)、松岡(京陵中)氏より、サークル活動の生み、継続、そして、今日の盛大さへの思いが語られました。この思いを聞く度に後に「続かわれわれもやらなくでは」と覚悟が促されるようです。(以下略)

八月の実験・実習教材研究会は、自主編成を行う立場での実験・実習教材を、確実に会員のものにするためには、資料や体験談だけにとどめず、相互に体験的に学びあおうという意図で始められた。いわば、サークルの実技研修会である。もちろん、やり方だけでなく、その教材で子どもたちに何を伝え、何を考えさせるかについて討議を行うことはいうまでもない。今までの実技研の成果は、今回の実践集に、「教材研究、子どもがいきづく実験・実習」と題しまとめたので、詳細な点については、そちらを参照していただきたい。

二、熊本の実践について

サークルの会員が自主編成的視点で実践を始めたのは、一九六〇年代末である。自主編成の取り組みを、県教研や県技・家部会研究発表会でのサークル会員たちのレポートから拾ってみよう。

『加工食品』の教材で、食品添加物の問題点を子どもたちに気づかせる実践が、一九六〇年代末に行われている。これが、サークルの初期の実践である。このあと、一九七〇年代に入り、『行事食』の教材で、子どもたちに、地域の行事やそれにまつわる食べ物を掘りおこさせることによって、地域の食文化に目を向けるとともに、現代の食生活の問題点に気づく子どもの姿が報告されている。同じころ、合成洗剤の問題を扱った被服の実践、水俣病や森永ヒ素ミルク事件など、母親や幼い子どもたちの生命や生活が軽んぜられる社会現象をくみこんだ保育の実践がなされている。一九七〇年代後半に入り、地域に残された重要文化財の民家を教材にして、『住居と労働』『住居と生活』のかかわりについて、子どもたちの目を開かせていった実践もある。これより、少し遅れて、阿蘇農民の貧の象徴である『だご汁』を教材化したら、子どもたちの食べ物に対する認

識が変化していったことに気づき、それによって自主編成にめざめた教師の姿なども報告されている。

このように、熊本の実践は、一九六〇年代末から自主編成が志向されたこと、その自主編成は、大別して、公害と、文化のほりおこしの二つの視点でなされてきたことが特長といえよう。

これからの私たちの課題は、労働の視点をすえた自主編成と、衣食、住、保育すべての領域における、熊本の地域に残された文化のほりおこしを起点とした自主編成に基づく実践であるといえよう。

熊本県の、旧学習指導要領期間の男女共学実践について、次のような文がある。

「指導要領、教科書を遵守し、女子用家庭科に疑問すら抱かなかつたNさんが、全国教研で中学・高校の男女共学実践を聞いたのは、一九七〇年でした。彼女は、もう翌年には、共学の実践に踏みきりました。

家庭科を『生命・健康・生活を考える教科』と考えていたMさんは、Nさんの実践に出会い、すでに醸成されていた共学への意欲を実践に移します。

同和教育の視点で自分の実践を問い直しつつあったTさんは、実は『日常の家事処理のやり方を、自分の主婦としての経験や常識に参考書で調べた科学的知識を加えて教えれば家庭科の授業が成立する』と考えていたのです。TさんもまたNさんのレポートによって共学を始めます。そのプロセスで、共学や自主編成に対する信念を確立させるのです。

Oさん、Yさん……。いずれも社会の矛盾や子どもたちの現実を直視したとき、指導要領や教科書の現状肯定的記述に疑問を抱き、

導かれるように、男女共学の実践を始めます。女も男も人間らしく生きうる社会をつくり出すための家庭科教育に、火の国の女の情熱を傾ける仲間が続きます。……(略)……」

これは、実践集の「序文」として寄稿いただいた半田さんの文である。文中のN、M、T、O、Yさん、いずれも、サークルの会員であることはいうまでもない。

文中にもあるように、彼女たちは教育課程の自主編成、同和教育、女子教育とさまざまな教育活動を契機として、男女共学の実践に着手している。

新学習指導要領移行期間になると、相互乗り入れが認められたことにより、男女共学の実践があちこちで行われている。県教研レポート、県技・家部会研究会誌、サークル会員へのアンケート調査によると、男女共学の実践(男子のみの家庭科履修も含む)は、一九七八年度に一九中学校で二一実践例、一九七九年に二六中学校で三三実践例、一九八〇年度に三一中学校で四三実践例が見出されている。移行期までの共学実践について、実践集で詳細に紹介したので、ここでは概説することにする。相互乗り入れの形態としては、一年生で食物の一領域、二〇時間程度、共学または男子だけの家庭科の授業というパターンが多かった。しかし、前記の実践校と実践例数が年ごとに増加していることからわかるように、複数学年での実践が増えていることも明らかである。すなわち、全面共学を志向している教師の存在がうかがわれる。

完全実施の八一年度の状況は、実態把握できていず、詳細な報告ができない。サークル活動、県教研、県技・家部会研究会での情報により、簡単に紹介したい。

全面共学は一校(白水中)、一・二年全面共学一校(甲佐中)、三年共学五、六校、二学年共学二〇校前後である。圧倒的に多いのは、食物領域の共学である。二学年の場合は一年食物、二年食物か、一年食物、三年保育というパターンが大部分である。被服の共学例もあるが、食物や保育に比べ少ない。住居の実践例は、皆無に近いという状況である。

サークルとしては、現在の部分共学は発展的に解消させ、全面共学へと移行させることを目標としつつ、教育内容の創造、共学の推進に、実践と運動の両面から取り組んでいる。

三、子どもたちの状況
一九八〇年度全国教研の折、「以前なら、他教科では授業にのらない子どもでも、調理実習なら喜んで授業に加わっていた。しかし、近ごろ、調理実習でさえも、しらげきって、授業に参加しない子どもがいる」という報告があったと聞いている。一九八一年度の家教連夏季集会の折にも類似した発言があった。熊本では、現在のところ考えられない状況といえる。かといって、積極的に授業に参加するかといえは、そうもいえない。子どもや親たちの最大の関心であり、目標でもあるのは、高校、しかもよい高校に入学すること、そのために一点でも、主要教科の点数をあげることであるのはいうまでもない。自らの生活、身のまわりのくらしの状況をみつめながら、日常を過ごしている子どもや親はきわめて少数である。

四、私たちのめざす家庭科
「平等と平和なくらしを創る」これは、今回の実践集のサブタイトルである。抽象的ではあるが、私たちのめざす家庭科像を表現するのに当を得ているといえる。私たちは、一人一人の子どもが、くら

しを創っていけるように、くらしにまつわる文化、科学、技術を、子どもの発達にそいながら、伝えてゆきたいと考えている。固定的な生き方を押しつけるような家庭科は決してやるまいと、いましめあっている。

生活を創る家庭科を目的とする以上、現在の社会の中のさまざまな問題——生活や生命を脅かす諸事象の存在とその根源——を子どもたちが、自分の今の生活と結び結んだところでとらえることが肝要と私たちは考えている。評論家的、傍観者的立場でなく、さまざまな現象を、自分自身の問題としてとらえたとき、解決を志向する、くらしを変革しようとするエネルギーが湧出してくるであらう。そのためにも、子どもたちの生活土台に立つて、実践することが大切であらう。

子どもたちの生活土台で、生活課題を把握することは、子どもたちの教育要求をつかむことも相通じる。子どもたちの教育要求の充足とは、子どもの表面的欲望にそえばいいといった短絡的なものではないと、私たちは考えている。

子どもたちの生活土台に立つということは、換言すれば、最低辺の子どもの生活土台から出発するということでもある。今日、私たち教師は、どちらかといえば、恵まれた状況で生を営んでいる。その『我』のおかれた状況で、授業展開を行えば、それは、一部の子どもにしる、『きつさ』を押しつけることにならう。

私たちと、子どもたちのおかれている状況のさまざまな落差を埋めるもの、それは、より恵まれない人々のいたみ、を共有しつつ、よりよき社会の実現をめざして、教師自身が生きることであらう。すなわち、常に被差別の状況で、生きることを、私たちは自分自身の

課題としている。

五、執筆内容と執筆者について

実践集と重複しないように、今回の執筆を分担することにした。

私たちの力量として、全国の仲間、しかも『We』の創刊第一年に目を実践を書くのは、荷がかすぎると考えている。しかし、書くことで、自らの力量を高めたい。書くことが、新しい家庭科を創る運動にも連なるという思いで、今年度のサークルの主なる活動として、執筆を位置づけている。

ご指導、ご助言、よろしくお願いしたい。

1、米を使つて

合志中 吉田泰江

なぜ食べるのか、何を食べるのか、どのようにして食べるのかを、玄米からの搗製、炊飯、米の粉の調理によって、我々の祖先が、米を栽培し、加熱調理の手法を獲得していった歴史も含めながら学ばせていった実践。

2、小麦粉を使つて

合志中 吉田泰江

小麦粉からグルテン、でん粉をとり出すことにより、多成分系としての食物を認識させるとともに、だご汁の調理によって、昔から伝えられてきた食文化を体験させた実践。

3、大豆を使つて

荒尾四中 中山京子

豆腐、味噌を作らせることにより、たん白質の科学的性質や、加工貯蔵の原理をわからせる。同時に、昔の主婦労働の重さ、短期間でのかびの発生に気づかせると共に、防かびに対する先人の知恵を

学ばせる。これらの体験を通して、労働の軽減、貯蔵・加工の改善を夢みて作り出された保存料・防腐剤などの添加物が、利潤追求の手段と変じた今、逆に、私たちの生活を脅かす原因となっている社会の状況を認識させることをねらってなされた実践。

4、菜種子やぬかを使って

白水中 後藤己枝

菜種子を絞り、ぬかをいぶして、油を抽出させ、昔の人の油料理への思いをくみとらせた上で、現在の脂肪過多の食生活を再点検させた実践。

5、食品添加物について

山鹿中 吉岡孝子、米野岳中 多田隈和子

タール系色素検出実験、加工食品中の添加物を調べ、自分たちの食生活中に、添加物が氾濫していること。添加物の多くは、有害であるとされていることを理解はしても、色あざやかな着色料、甘味料入りの無果汁飲料を飲むという認識の子どもたちがほとんど。そんな子どもたちが、着色料含有のエサを与えた鶏の卵が、赤、黒、緑色になっているビデオを見て、ためらいの表情を示すようになった実践。

6、被服整理——合成洗剤と石けん——

甲佐中 佐川加寿子

合成洗剤の有害性、石けんの安全性について授業を受けた男の子が、「昨日の日曜日、嫌がるお母さんをひっぱって、有機農業センター（熊本市にあり、子どもの家から車で約四〇分かかる。有機農業の野菜、食品添加物を含まない加工食品、調味料、石けんなどを販売する店）まで、石けんを買いに行きました……」と感想文を書

いた実践を二回連続で。

7、貫頭衣を縫う

荒尾三中 長尾淑子

実践集で、被服史によって、「労働こそが人間にとって本当に必要な衣服を存続させてきた」ことを学びとらせた彼女が、「原型（基礎）は永久に残っていく。外側はさまざまに変化しても……」という視点で、貫頭衣を型紙から作らせ、製作させた実践。

8、人間の自立の視点での保育学習

木山中 川野カズエ、嘉島中 徳岡桂子、

浜町中 稲用加代子

教科書を手離し、性、生いたち、母性保護、児童福祉の視点を加味した授業のあとで、子どもに「こんな勉強は始めてのことでした。本当に、自分のこれからの生き方を考えさせられました。お父さんやお母さんの偉さを感じました」と感想を書かれ、自信をつけていく教師の姿を記した実践。

なお、『熊本の実践集、家庭科教育』は一冊一二〇〇円です。ご希望の方は、一五〇〇円（送料込）を郵便振替（熊本一〇七〇、熊本県サークル）でお申し込みください。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆
新しい家庭科を創るために
☆☆☆☆☆☆☆☆

高等学校では
寺島 紘子

私の保育・家族領域

教材編成の視点

私は昨年、創設十年の普通高校に八年間在任した後、旧制中学校を前身とする受験体制の厳しい「進学校」に赴任してきた。

教師になってまる十四年、四つめの学校である。公立学校の教師はわびしい。せつかく結び得た生徒との信頼関係も、辞令一枚で断ち切られ、別の学校の教師とならねばならぬ。

ここでは家庭一般四単位は、一年生二単位、三年生二単位となっている。二年生にないのは共通一次シフトの結果である。

ここ数年の生徒定員増で、施設を拡充することなくクラス増となり、特別教室が次々と普通教室に変わった。被服室にも長机と長椅子が持ち込まれ大講義室となっている。選択教科の授業のために被服室がフル回転である。

一セクションは二クラス半で合併し、四八名という多人数なので、実験実習の時間は大変である。

全国的な問題として、全国高等学校長協会家庭部会編「実験実習ノート」を副教材とすることを、さる筋によって強要されている。

ある学校では、校長が教師に無断で生徒の冊数を注文してしまつたと聞く。校長命令だという。このような権力を背景にした独断専行は実に許しがたい。

○最初の授業で

赴任後の最初の授業で、三年生のあるクラス（一クラスのみ）で一橋出版「図説資料家庭科」を示しながら、問いかけた。そのあとで、好きなことを書いてもらったのだが、次のような趣旨の文章が多く目につき、私は大きな衝撃を受けた。

- ・「障害者も先生もいじけ気味ですね」
- ・「どんなに社会がよくなり障害者にとって住みやすくなっても、やっぱり障害者と普通の人では違う。私がもし障害者だったら、決して普通の人々とは同じに扱ってほしいとは思わないだろう」
- ・「障害者がラクにバスに乗れるようにして欲しい？」それは無理ですよ。だって車イスではバスに乗れないし、満員の時も困ります」
- ・「今の私は、自分（大学受験）の事で、頭がいっぱいで、社会福祉まで頭がまわりません。受験が一段落ついたら、自分なりに考えます」

私はこれらの文章を読み絶望的になった。礼儀正しく、おりこうさんの彼らが、他人の痛みや悲しみの問題になると、それらは彼らの視野に入ってこないのか。

初め私は、ホンネとタテマエを見事に使い分ける彼らを、どうしても受け入れることができなかつた。厳しい受験体制をくぐりぬけ

ていくことは、一方では、排他的な思想を身につけていくことなのだろうか。

○学ぶとは

ところで普通高校といえは、どこの学校でも「受験」に振り回されているのだが、受験勉強とは一体何か。

前任校から巣立って一年の家庭クラブOB・OGたちはこう言った。「記憶したことはほとんど残っていない。マークシートのぬりつぶし方ぐらいかなー」。もはや「受験」に必要でなくなった知識は忘却のかなたである。

高校一年当時、私の担任ホームの女生徒Aは「高校へは大学に入るためだけに来た」と言い切り、はじめ勉強以外のものは邪魔だからと、ホーム行事や班に馴染まず、部活動にも参加しなかった。しかし夏休みに、ホーム独自でやった合宿や、二カ月余りをかけて、ロングホームで取り組んだ「愛と性」などで、持ち前のリーダー性を発揮し、二年生になって男女混合の家庭クラブの基礎作りをし、三年生になって生徒会活動にも乗り出したのだが、その彼女が当時のことを述懐して、「途中で、私は何のために勉強しているのか考えるとむなしくなった。考えれば考えるほど、『受験』より大切なたった一度切りの高校生活があるような気がして」と言った。

彼女は受験勉強と諸活動を両立させ、どちらにも甘えはみせなかった。悩み、葛藤し、友情を育てた。その姿は私の目には実に「高校生らしかった。しかし、受験の結果は「不合格」であった。

彼女は就職を余儀なくされた。タテマエを優先する管理社会の末端における職場の人間関係、とうてい生きがいを持ってそうもないと

感じる仕事、彼女は強い挫折感と疎外感に襲われた。しかし大人や社会に流されまいと、必死に抵抗しながら、「どう生きるか」という問いは続けた。今、彼女は社会のしくみや経済や歴史の勉強を独自に始めた。働く仲間もできた。働きながら学び、学びながら働く、生きた学習が始まった。教師になるという大学進学希望当初の夢は捨てずに、通信教育も始めた。

一方B(男)は、無事受験戦線を突破し目的の大学へ進んだ。しかし彼は、大学生活に失望しつつも、大学で何を学べばよいかまだ模索している。「大学では、みな適当に遊んでいる。政治なんて、そういう固い話は話題にならない。まして高校時代、あれほどみんなで考え、話し合った『生きがい』の問題なんてとても通用する雰囲気ではない。講義以外はとて暇だ。日曜日なんて二四時間『自由』なのだ。人間はやはり、ある程度の拘束や管理がないとダメだ。まるっきり自由っていうのは」と現在の彼は言う。

今の大学生たちには、高校で管理されることに従順すぎたため、苦しい受験勉強の中から、やっとな勝利を得た自由時間と思うように使えないものが多いのかも知れない。

世の中の矛盾に傷つきながらも自分自身で、それに打ち勝とうと努力しているAのような学び方にこそ、むしろ光がみえる。

○おしきせの論理ではなく

私はある時、私の属するグループ(多種多様な女たちの集まり)で、進学校の生徒たちの冷たさを嘆いていた時、メンバーの若手の一人がこう言った、「私は、彼らのエゴイステックな面がわかる。彼らはお涙ちょうだいではなく、クールに受けとめているのだ。障

害者の問題は彼らにとって遠い問題だ。彼らの認識をひっくり返すには、もうひとつ何かいる。そしてそこを落としてくれる教師を彼らは求めているのだ。

なるほど、彼らは自分にひきよせて考えるということがなかなかできにくいのだ。

一学期当初、一週間分の新聞記事を用いて「私たちの身边に起こっている問題」を探らせたのであるが、「非行」について話し合った班は、「非行を起こすのは弱い子だ。勉強しないから落ちこぼれ、その結果、非行に走る。私たちはやったことがないから、とうていその子たちの気持はわからない」と報告した。

また、敦賀原発の放射能漏れ事故についてある班は、放射能の恐ろしさと、業務上の過失についてきちんと分析して報告した。私は、その後で、「石川県にも原発誘致が問題になっているが、みんなはどう思うか」とクラス全体に問うた。何と、全員が誘致賛成に回ったのである。日本のエネルギーの枯渇を考えると致し方ないのだと。

「食品汚染の記事については、「私は一七年間いたって『健康』でした。ノストラダムスの大予言では一九九九年には人類は滅亡するんです。だから今のうちに食べたいものを食べるんです」となる。だから新聞記事で現状を認識させてから、次の学習に入ろうと思っても、そこで生徒の学習拒否に出会ってこちらがたじろいでしまう。彼らの論理と根幹のところでかみ合わないのだ。

しかし、だからこそ彼らの知識と、一方では排他的で保守的な思想との飛躍をうる教材を準備しなければならない。

「民主主義」ということばは知っていても、自分にはある人権が、他人にもあるという感覚が育っていないくは、真に民主主義を理解

したとはいえない。

彼らの思想は相当硬直化している。深く自分の内部をくぐった思考や、型破りの発想が不得手である。結論を急ぎ、自分の判断のよりどころを世間や常識におく、彼らの思想はマスコミや大人を通じて形成される。それらはいわば、おしきせの文化であったり、イデオロギーであったりする。

「障害者のことなんて」という思想は大人や社会の障害者観の裏返しなのだ。彼らからそういう答が返ってくる背景が問題なのだ。未来社会に展望を持たなくさせられている彼らにとって当然な答なのだらう。

しかし、こういったおしきせの論理は、彼らの自由な生き方を苦しめてもいる。

真に自由な生き方を考えることは、自分を肯定しながらも、昨日までの自分を否定し、新しい自分を求めて、自己変革し、観念に縛られている自分から解放されることではないのか。

○ひまわりの世界をつなげたい

金沢の十一屋町に私が生徒たちとよく通う、「ひまわり教室」がある。ここは通園制の障害児保育教室である。ここでの保育内容、地域での運動の取り組みはすばらしい。

ここへ来るたびに、私も生徒たちも大きくゆさぶりをかけられる。父母たちは、「ひまわり」に出会い、障害児を持ったことを不幸だとは考えないようになる。今までの物の見方が、根底から覆えされたからである。今まで信じてきた世間なみのしあわせの何と薄っぺらなことか。学歴や金物などが支配する社会の価値観から、「人

間は存在するだけでしあわせだ」ということを、障害を持ったわが子から教えられる、そして子どもらの個性的で豊かな世界が見えてくる。この子らが、社会の片隅に追いやられるのでなく、地域の保育所や学校に受け入れられるようにと、みんなは運動に立ち上がる。地域や学校を変えることが、すべての人が生きやすい社会を作ることだと。

生徒は能力主義が支配している学校の中で、その囚となつている自分、世間や親の利己的な価値観に順応しようと思つていた、浅はかさに気づくのである。

私がうらやましいのは、「ひまわり」の職員集団がみな対等であり、上意下達式の管理がないことだ。教師があればほどこいキキできるのは、人間関係がいいからだろう。子どもの内面に深くくい入る接し方だ。誰も、この子のためにというおごつた考えはない。ためにの発想がある以上、子どもたちの内面のすばらしさに深く感応することができない。

弱い立場の人間を知らない人間が社会を作っていくことはこわいことだ。偏見・差別は知らないところから来る。

私はこの「ひまわり」の世界と高校生の世界をどうしてもつなぎたいと思う。

○生き方を考えさせるために

私は自分のからだを通して感じとつたものを教材としたい。

そのために、色んなところへ出かけ、色んな人と交わり、自分なりに吸収する。身をもって体験してこそ、生徒に鮮明に伝わるだろう。そして高校生の視野をうんと広げてやりたいと思う。

この金沢という封建色の濃い町にも、世の中を切り開くためにがんばっている人たちがたくさんいる。その人たちの活動の一つ一つの積み重ねが、社会を変えていくのだ。

その中のひとつが「ひまわり」である。その他、保育所作り、文化的活動、無公害・反原発・婦人問題・平和を守る戦い等々、生きた教材がたくさんある。「本」との出会いもある。

「生き方」を考えさせるには、生きた人や書物に出会わせるのがよい。受験に直面してない一年生には、課外に直接、調査研究させたい。

真の連帯は個の自立が確立されて初めて可能となる。人間は人間関係の中で生きていく。そのためにも、矛盾だらけの世の中にいて、矛盾から目をそらさないで、人間らしく生きていくための思想が必要だ。

私が次号から報告するのは、「保育・家族」という限られた領域である。「衣食住」がいわば人と物と生活とのかかりであると考えれば、「保育・家族」は人と人とのかかりということになる。

私はそこではあえて、教科の枠を越えたい。人間を基底に据えて考える授業があつてもいいではないかと思う。

今、高校で行われている学習は、ほとんど生徒たちの日常生活と無関係のところ成り立っている。青年期の発達や生活や苦悩、そういうものとの接点がきわめて少ない。まして「受験」教育は、生き方や思想ぬぎの教育である。

定型化された概念や法則を教える前に、彼らの内面への働きかけ、ゆさぶりがどうしても必要なのである。

○あるべき姿ではなく

保育・家族領域の授業は、一定の筈があるわけでもなく、また精神的なもの絡んでくるのでたいへんやりにくい、現代の人間のありよう、人間関係は歴史的・社会的・経済的諸条件が大きく反映している。固定してとらえることはできない。しかしたとえば、現行の教科書には、「結婚」についてどう記述されているか。

『私たちはやがて結婚し、子どもをうみ、新しい家族関係を築いていく。……初潮を経験することによって成熟した女性としての意識が生まれ、生む性としての女性の特質を自覚するようになる。もちろんこういった女性としての意識や自覚は、異性との触れあいを通じて少しずつ具体化され、恋愛のイメージとともに、母性のイメージを広げていく』

こんなふうに決めつけて書かれると「いやだな」と思う。私は決してこのように成熟したのではなかった。

それに個人が結婚を選びとろうとするまいと、子どもを産もうと産むまいと、自分が選択する生き方だ。

結婚時に『健康診断書の交換』を明記した教科書も多い、『親はよい子が欲しいと願うのは当然』と遺伝についても強調されている。これは障害者や病气持ちは結婚不適格者といっているのと同じである。

私は家庭科は、「結婚」を種の保存としての観点でとらえるのではなく、いかなる男女の結びつきであれ、人間関係をどう結んでいくか、他者と自分がどうかかわっていくかということを考えさせるべきであると思う。

またどのように多様な生き方も可能であるのに、女子高校生に、生き方を一つの方向だけから示すのは、人間としての自己実現をする前に、性役割の自覚を迫ることもあって、彼らの可能性を閉ざしてしまふことになる。教科書は「正しい生き方」として彼女らを苦しめる。彼女らは男女差別の根強い社会を察知し、未来に希望を見出せないままに、結婚志向へ走る。

こうして結婚や家庭が商業ベースにのつたブライダルブームとセットになって、国家や資本に支配管理されるのだ。

個性を埋没させたり、型にはめたり、それが教育というものだろうか。

体制順応のための規範を教える前に、人間としての自立への援助が必要である。自由に自分の生き方を選びとり、男と女の対等な関係をつくる主体こそを、育てたいものだ。

あわせて「保育」というと、将来親になった時に、わが子に対して行う営みを教えると考えられているが、親になった時の心構えを説いても「自分」のことでない限り、やはり彼らの関心事とはならない。

わが子意識をはるかに越えた「子どもの世界を見ずえること」によって、子どもに対する感性が磨かれていくのではないか。

○授業の成立にむけて

家庭科の授業は、受験体制の中では息抜きになる。内職・雑談の時間となる。

二期期早々の授業で、一学期はまだ輝いていたかに見えた三年生の目もうつろになってきた。日々、刻々と受験が近づく緊迫感が漂

いはじめる。私は受験だけで手いっぱいであろう彼らに心が痛んだ。彼らのそういう表情を見て、私自身も落ちこんでいった。授業がからまわりし、しらける。

しかし、彼らの目をこちらに向けさせるには、やはり、おしゃべりや内職をするひまもないように、彼らをどんだん追い込むしかない。真に彼らをゆさぶる教材を与えれば、思考は深まっていくだろう。そう思つて彼らに話した。

「内職・雑談はしないこと。授業をさぼらないこと。私の授業では、定まった答を見つけるのではなく、答を色々に考えてほしい。これから学ぶ『保育の学習』は、大学へ行つてもやらないだろう。社会へ出て学ぶ機会がないかも知れない。それに受験で忙しくて、家庭科のことなど考える余裕はないと思つているかも知れないが、人間の思考力は、多忙な時ほどよく働くのだ。従つて、今、しっかりと考えてほしい」

ひと
We
のデザインをした
加藤由美子さん

30歳、二女の母、私が高校で最後に担任した人。当時から個性サン然と輝いていました。彼女の言葉を聞いて下さい。(半田)

「ネエ責任なんだぞ。題字を書いたヒトの生き方！」後で友人にいわれました。……ああ！ やっぱりとんでもない事をしてしまっ

その後、生徒の内職・雑談は、ほとんどやんだ。さぼりもない。しかし、こちらの教材準備が不十分であるとやはり、生徒との緊張関係は崩れるのだった。左に挙げる事項について、次号以下で授業の報告をさせていただきます。

- 1、性と女性解放
 - 2、子どもの人権・子どもたちへのメッセージ
 - 3、障害者の人権
 - 4、子どもの発達と可能性・子育て考
 - 5、文化活動としての家庭クラブ
 - 6、生活矛盾から出発する家庭科学習
 - 7、家族問題
 - 8、女性の自立・職業
 - 9、課題研究学習
- (石川県立金沢桜岡高等学校)

た……(シヨボン)。「よしっ！ 明朝からはひとつ頑張つて配偶者より早く起きてみようか。そうだ。もっと新聞の政治欄も丹念に読んでみなくっちゃ！」などと決心したところです。ところが、今まで毎日決心し直しているという事は……!? ごめんなさい。Weをデザインさせていただいたのは、こんなおろかな人間なのです。

私なんかの出る幕じゃないのに——と、ウロウロ、オタオタ。片っ端から知人、友人に

どうしよう、助けて！ と電話をかけた時、ある方が言いました。「半田先生は知らない方だけれど、あなたに話を持ってこられたという事で、どんなお人柄かわかるような気がする」。そおだ！ 先生の優しさ、その中に秘めた行動力、そしてキビしさ、そして、そして——！ こんなスゴイお手伝いのチャンスを下さった先生とWeに感謝しております。でも、今日も思っているのです。——とんでもない事をさせてもらってしまったぞ——

☆☆☆☆☆
新しい家庭科を創るために ☆☆☆☆☆

—— 大学では —— 牧野 カツコ ——

私の「初等家庭科教育法」

「家庭科というところ……」

「……」に、あなただったらどのようなことば、文章をとっさに思いつかれるだろうか。

「私が学んだ家庭科は……」

「女の子にとって家庭科は……」

「男の子にとって家庭科は……」

それぞれの場合、どんなことばが続くだろうか。

教育学部での初等家庭科教育法という講義の第一回目を、私はいつもこの文章完成法(S. C. T. Sentence Completion Test)から始める。一クラス七〇〜一二〇名ぐらいの学生をかかえて、同じ講義を、四クラス持っている。年間約三〇〇名ぐらいの学生が、私の初等家庭科教育法を履習する。

小学校の教員免許をとるためには、一級の場合必修、二級でも選

択必修で、小学校での家庭科教育法を学ばねばならない。私が前に勤務していた宇都宮大学では、この授業を「教材研究(家庭)」と称していた。「小学校家庭科教育法」と呼んでいる大学もある。小学校の免許状取得のために必要なので、どの大学でも学生数が非常に多く、家庭科には全く関心のない学生が多いことも共通している。私が現在の大学で担当しているのは、音楽、美術、体育、社会学、理科、数学などを専攻している三年生たちである。男女は約半々。はじめから熱心な学生も中にはいるけれども、「大学の初等家庭科教育法は……」という文章完成法には、「卒業するのに必要です」「全学生に単位を与えるべきだ」「楽しい授業にしてほしい」「実習もやってもらいたい」「ほんねをいって単位がほしい！」などと書く学生たちである。

単位のために半ば仕方なく受講する人も含めて、何百人もの学生たちに、わずか十数回の講義で、家庭科の意義や、家庭科のあるべき内容、指導法などを伝えねばならない。毎年、毎回、試行錯誤をくり返しながらもう一〇年が経ってしまった。

第一講、学生たちとの最初の出会いを、家庭科のイメージとその問題点から始めるといふパターンだけは、変わらないものとなった。先にあげたもののはか、

「小学生は家庭科を……」

「親たちは家庭科について……」

「一般の教師は家庭科について……」

など、およそ一〇個の刺激文を用いている。文章を完成させる作業は、これから「家庭科教育法」を学ぶ学生にとって、大切なウォーミングアップであるし、私にとっては、彼らの家庭科に対する意

識を知るための、予備調査でもある。

文章がおよそ書き上がったところで、学生どうし、交換して見せ合ったり、読み合ったりすることを勧める。初めは恥ずかしそうにしているが、やがて教室内は、笑い声や雑談でにぎわってくる。そこで、四〜六名ぐらいの小グループを作り、機械的に座長を決め、今書いたものをもとに、短時間の話し合いをしてみよう（バズ方式）。小学生用の家庭科の教科書なども見ながら、できるだけ、ワイワイ、ガヤガヤしゃべってもらおう。話がはずんでいる途中でストップをかけ、各グループの座長に、順に話の内容を教室全体に報告してもらおう。

大勢の学生の教室でも、しらけていた学生も、このバズ方式までくると、たいていすっかり乗ってくるからおもしろい。「女の子にとって家庭科は」「男の子にとって家庭科は」という二つの文章をもとにバズを続けると、にぎやかな討論会が展開する。

教師になることをめざして大学で学んでいる学生たちが、いま、家庭科についてどんなイメージをもっているかを御紹介しよう。

「家庭科という……」

「ずっと昔にあったなあ」(男)

「調理実習を思い出す」(男)

「コロッケ・サラダ、そしてミシン」(男)

「めんどくさい、やな授業」(男)

「女の時間」(男)

「女の子だけの授業風景を思い出す」(女)

「提出物の期限に追われたことを思い出す」(女)

「息抜きの授業であった(まじめにやらなかった)」(女)

「女の先生、調理実習、ミシン、スカートなどが連想されます」(女)

「花嫁修行の基礎という感じを受けます」(女)

「品行方正な子女を育てるため、やさしい先生によって行われる、女子のための授業」(女)

十年も前の学生の話ではない。昨年度の学生の記録から抜いたものである。特別にマイナスのイメージを書いたものを悪意をもって抜き出したわけでもない。大体がこんなところで、プラスのイメージ、優等生的なものも多少ある。こちらの方が探すのに苦労するくらいだがあえて探してみると、

「家庭科という……」

「家庭生活に必要な知識や技能を身につける学科である」(女)

「衣食住に関する科目」(女)

「自分の生活に必要なことを学ぶことだと思います」(男)

「苦手、興味なし、でも見方によってはおもしろいかな」(女)

などがある。それにしても、家庭科という……料理、裁縫、女子の教科、花嫁修業……といったことばが、いまだに、山のように出てくるのである。やっぱり、とは思いつつ、毎年、毎回、何ともやりきれない複雑な思いにかられてしまう。十年前から、地方でも、横浜でも、ずいっとこうなのだ。

しかし、大学生の家庭科に対するイメージや考えを、非難したり嘆いたりできるだろうか。彼らが学んできた家庭科の記憶を読めば、まさにさもありなん、といわなければならぬ。

「私が学んだ家庭科は……」

「料理・裁縫・洗たく」(男)

「簡単な針仕事と料理の作り方についての実習が中心だった」(男)

「調理実習や洋裁が多かった」(女)

「料理を作ったりして遊んでいた」(男)

「わりと楽しかった」(女)

「今、あまり私の身にのこっていない」(女)

「実際に生活で役立っていることもありませう」(女)

「形式的な話と実習だけの教科だった」(男)

「おばあさん先生が自分の思う良さな家庭、よき母のあり方をおしつけただけのつまらないものでしかなかった」(女)

彼らや彼女たちが学んできた家庭科や、彼らの家庭科に対するイメージを知るとき、非難や嘆きは、彼らに対してではなく、まさに、家庭科の教師や、教師を養成しているわれわれ自身に向けられなければならないことがわかる。

「女の子にとって家庭科は……お嫁さんになろうという人にとつては必修です」「男の子にとつて家庭科は……奥さんになる人のお手伝いをするために必要です」と書いている男子学生がある。

女子学生の中にも、「女の子にとつて家庭科は……少しはたしなんでおいた方がよい教科です」「男の子にとつて家庭科は……あつてもなくてもよい教科ではないでしょうか、今のところは」と書く人がある。

こうした学生も教師となつて、二年後には子どもたちの前に立つのだから、こちらも、いいかげんな講義で終わらすわけにはいかない。そして家庭科に対して偏見があるような学生こそ、欠席をしないで講義に出てくれないければ困るのである。

学生たちの家庭科に対する卒直なイメージから出発し、最初はず、徹底的に問いかけを行う。

なぜ家庭科があるのか？ 家庭科はなくても良いか？ 小・中・高と男女で履修の形態が異なるのはなぜか？ なぜ女子のみが学ばなければならない教科があるのか？ そして「教科」とは一体何か？ 学校教育とは何か？ という方向へ展開させる。

新聞のスクラップから、投書欄や、和田典子氏が戸山高校時代に書かれた「月曜寸評」の「家庭科、なぜ女だけ」などは、問題意識を啓発するのに効果的なので、よく用いる。こうして、家庭科という教科に対する「疑問」と「関心」を十分に引き出した上で、講義の予定、参考文献などを書いたプリントを配る。講義は、大きな骨組みとして、Ⅰ、教科論、Ⅱ、内容論、Ⅲ、方法論、を用意するが、章立てでは、毎年(毎期)ごとに少しずつ違っている。テキストも用いてみたり、用いなかっただけで一定していない。

昨年度の場合は、木村温美、工藤澄子、平田昌先生らと共著で作つた『現代家庭科教育法』(家政教育社)をベースに、つぎのように組み変えて予定を組んだ。なにぶん、半期二単位、十数回しか講義回数がなく、テキストの章にそつて進めるとかなり忙がしく無理があることがわかつたので、今年は部分抽出方式をとつてみたのである。

序章「家庭科」教育について

——教科のイメージと問題点——

第一章 家庭科の存在意義(Ⅰ—Ⅰ)

1、生活者としての自立

2、家庭科の成立

第二章 家庭科の歴史的背景と現状（I—2）

1、女子教育としての家庭科

2、家庭科の現状

第三章 家庭科プログラムの編成（II—4）

1、家庭科の目標

2、家庭科の内容

第四章 指導計画と指導方法（III—5）

1、指導計画の作成

2、授業案例と指導法

3、家庭科の指導と教育機器、教具

終章 家庭科教育の課題

——新しい家庭科のために——

（一九八一年度、後期、（ ）はテキスト章）

お恥ずかしい内容であるが、この期の講義予定表を掲げてみた。御批判をいただきたい。

家庭科という教科の性格上、教科論（I）にあたる第一章、第二章には、かなりの時間をかけざるを得ない。小学校の家庭科の問題にとどまらず、中学校「技術・家庭」、高等学校「家庭一般」の問題も取り上げる。中学・高校の家庭科の問題をとりあげると「家庭科とは何か？」「どうあるべきか？」が、鮮明に浮かび上がりやすい。

第一章、教科の存在意義の展開の仕方は、今だに得心のいく状態にない。生活者としての自立の必要性から家庭科の必要性を展開していくことは、わかりやすく、導入としては良いが、教科存立の基礎理論にはどうもつながりにくい。

最近の子どもたちのからだのおかしさ、食生活のおかしさ、着せられ、食べさせられている主体性のない現代生活、経済的な自立を失っている妻と身辺生活の自立を失っている夫の生活上のもろさ、等々、家庭科の必要性を強調するための素材は最近は事欠かない。しかし、「生活者としての自立」の視点は、家庭科という教科の成立の必要条件ではあっても、そのまま教科の目的や教科の構造が決定されるような十分条件にはならないように思われる。このあたりは、私自身の勉強不足でもあるし、家庭科の教科論自体の弱さでもあるところだ。

いろいろな教科論があることを並列的・客観的に紹介するのは、学生にはあまり歓迎されない向きがある。短かい時間にいろいろ紹介できると、わかりにくく混乱するらしい。ポイントとなる立場がきちんとあつて、関連して他の理論を紹介する方が、わかりやすいという。第一章は、当分試行錯誤が続くそうである。

第二章の家庭科の歴史的背景の中では、江戸時代からの女子教育の歴史をふり返る。「女子」だけを対象とした教育の必要性が、なぜ意識されたか、どのような時代の中で、誰がそれを必要としたのかと考えさせる。家庭科の歴史は戦後の新発足から始まる、という考えも方あるけれども、学生の中に、家庭科という、料理・裁縫、女子の教科というイメージが現に存在し、高校家庭科の女子のみ必修の形態がある限り、やはり、封建社会の中で裁縫教育と「女は内・男は外」の儒教思想にふれないわけにはいかない。

女大学の中の一節「女は常に心遣して、其身を堅く謹み護るべし。朝は早く起、夜は遅く寝、昼はいねずして、いゝ内の事に心を用ひ、織、縫、績、紡、怠たるべからず。亦茶・酒など多く吞むべか

らず……」などを読むと、彼らは笑いだす。笑う中で「女子のための教科」のおかしさに気づいてほしいと思う。

歴史の中で、強調するのがもう一つ、戦時下の家事・裁縫教育である。家庭科の時間数が倍増し、重視されていた時代もあったのだということを知ってもらおう。何のために、なぜ家庭科が重視されたか。女子教育と良妻賢母主義の教育の行きついたところが何であったかを資料で示す。いまた、東西の緊張が高まり、戦争の危機が再び高まる時代の中で、教育の役割と教師のあり方を、たえず問いつ返さねばならないと思う。

第三章、家庭科の目標と内容について、では、教科の本来の目標、あるべき目標と、現在の家庭科の内容の問題点を中心的にとりあげる。特に、「被服」「食物」「住居と家族」といった「もの」中心の現行の内容について、批判的に検討をする。家庭と家族の本質からしても、家庭科の教育内容の核心に、「家族」「保育」など人間の問題がおかれるべきであると私自身は考えているので、この点も卒直に提案し、一緒に考えてもらおう。教育内容の編成は、本来教師の最も重要な仕事であるべきだから、いろいろな内容編成案や考え方も提示する。アメリカの家庭科の内容例や、男女共修の家庭科のプログラムは、小学校の例ではないけれども紹介する。自分たちが学んできた家庭科と全く異なる視点から編成された内容は、彼らに新鮮な驚きを与えるようだ。抽象的な内容編成論だけでは、わかりにくいから、授業例をとりあげながら、内容論を扱うことも多い。

第四章、指導計画と指導方法では、もっぱら具体的な授業例を紹介しながら進める。小学校の家庭科では、すばらしい授業の実践例や記録が多くあるので、楽しい部分だ。たいてい、最初に二百枚ぐ

らしいのスライドをみせる。教育実習での学生の授業風景や、公開研究会の授業を集めた自作のもので、不出来な画面も多いけれど、短時間に、数多くの授業例を知らせるには、やはり効果的だ。学生のまずい授業例もみせた上で、ベテランの先生の研究授業を紹介する。

前に勤務していた宇都宮大学では、「教員養成実地指導」という名目で、数回分の非常勤講師手当があったので、家庭科の教育経験も研究も大ベテランの小学校の先生に来ていただいて、二回ずつ講義をしていただいた。同じ指導方法の講義でも、やっぱり現場の先生のお話は、子どもの視点がぐんと出てきて、具体的に大変興味深い。現場の先生の講義を学生と一緒に聞けたのは、私にとっても良い勉強になった。国立大学というところは、大学の教官以外の人に授業で講義をってもらうことに対して、きわめて閉鎖的で、一回講義をしてもらうのにも、非常勤講師としての扱いをしなければならぬ。履歴書、業績書はもとより現場の校長の承諾書、所管の教育委員会の承諾が必要で、その上で大学の教授会の承認、辞令の交付、出勤簿の捺印、謝金の受領など、うんざりするような手続きをとらねばならない。もう少し現場と大学の交流が簡単にできないものかとしみじみ思う。

現場の先生をお願いしない時は、もっぱらいろいろな実践記録を用いている。半田たつ子氏が編集していた「家庭科教育」誌の教材研究の欄は、大変良い素材であった。

学生自身に指導計画や時案を立てさせるころまでは授業が進まないことも多いが、題材の一部をとりあげて、指導例を計画させる。学生自身が実際に指導計画を立てるといふことになると、どうして

もこの講義のための専用講義室（小学校教科専門家庭科室など）がないことが大きなハンディである。掛図もパネルも、実物も百人分の小学校の教科書なども、研究室から教官がはるばる、違う建物にある講義室までそのつど教材を運ばねばならない。雨でも降る日は全くなさげなくなる。

大学の施設・設備の問題も含めて、「指導方法」の指導のあり方は、今後の大きな課題である。

半年間の授業のあと、学生たちの書いたものの中から。

「今まで家庭科というのは、ただ料理を作ったり、エプロンを作ったりして、一応人並みにできればそれで良いものであると考えていました。……しかし半年間の講義を通して改めて、家庭科を学ぶ意義、また教育する意義というのを知らされ、頭を思いっきりぶんぶんぐられた感じです。……」（男、二年、養護）

「……家庭科に対する考え方を根本的にくつがえさせられました。家庭科は、調理やものの製作があるから好きでした。でも、家庭科は、もっと本質的な人間の生、そのものにかかわることを学ぶという大切な教科だったのですね。今の日本を考えてみるに、生命軽視の風潮は、家庭科が技術・技能の習得のみに偏っていたせいではなからうかとさえ思えたりしました。最後の講義で先生の言われた『生きる』ことそのものに触れる家庭科をないがしろにして、他の国語や算数を学んでも意味がないのではないか』という言葉が、ズンと心に響きました」（女、三年、養護）

「家庭科のもつ領域の大きさに驚いたというのが半年間の大きな印

象である。家庭科は人間のあらゆる領域に関与してくる。人間生活の営みそのものが家庭科で学ばれることであることを知った。……生活者としての生きる力を身につけていく家庭科、——だれしもが学ばなければならない教科であると思う」（女、二年、社会）

「家庭科という教科に対して新しいことを発見したような気持ちがあります。授業例なども豊富に紹介され（その例もかなり漸新的でよかった）、とても参考になり、自分の教育実習のことを思っって何となくわくわくしました」（女、三年、理科）

「数ある教材研究の授業のうちで、この教科を教えてみたいなど初めて思った。うまくできるかどうかは別として、他教科にはない独自性があるこの教科は、教師の創意工夫が大いに発揮できると思っただからである。……」（男、二年、社会）

家庭科を教えてみたい、とわくわくするような学生ができてくれるのは、本当にうれしい。大勢の学生を相手の授業の苦勞もふぎとんでいくのはこの時である。

どこの大学でも、小学校免許状のためのこの授業は学生数が多く、家政以外の学生が大部分だから、苦勞をしておられる先生が多いと思う。大学の教育法の研究交流をもっとすべきであらう。

追記、初等家庭科教育法（教材研究）のほか、横浜国大では中等家庭科教育法や家庭科概説（小教専）、大学院の授業なども開講されているが、今回は全く触れる余裕がなかった。

（横浜国立大学）

はじめに

児玉 すみ子

ある高校の、学期末の職員室。

あちらこちらで、成績不振だった生徒への個人面接が行われている。

「何だ、君、この成績は。」

勉強しなかったんだな。これじゃ、単位はやれないぞ。

日ごろの授業態度も良くないな。怠け癖がついてしまっている。

君がまじめにやりさえすれば、先生だって何とか面倒みてやる気になるけどな。

どうだ。がんばるか。

よし、それじゃ、この休みに、これだけ課題をやって来い。

君んとこは、お父さんが亡くなって、お母さんは、君だけを頼りにしていらっしやるっていうじゃないか。君がこんなでどうする。

強くなれ。いいか。わかったな。わかったらしっかりやれ」

機関銃の弾のようにボンボン飛び出す教師の言葉に、ウンウンとうなずいていた生徒は、元気なく、職員室を出て行く。訓戒、説諭、叱責、助言、激励のすべてを、言い尽くした教師の方は、これで「丁あがり」といった気分できっぱりする。しかし、生徒の方はどうであるのか。あのうなずきは、ほんとうに納得した上でのものであったのだろうか。何とかこの場を切り抜けようとする、その場限りの

ものではなかったらうか。

もちろん、こうした喝^かの入れ方で、効果の現れる時もある。しかし、最初から最後まで、力強い先生の言葉を聞くだけで、とうとう一言も発しなかったこの生徒の気持が、次のようなものであったとしたら、どうであらうか。

「僕は、勉強しなきゃと思う気持はあるのです。でも、机に向かうと、つい、他のことを考えたり、行なったりしてしまふんです。僕の中に、何かわからないもやもやしたものがあつて、それがはつきりしないと、勉強にとりかかれななんです。こんな状態にいる僕が勉強したつて、何の役に立つものか」

こんなふうに、率直に、自分の現在の気持を教師に向かって表明することそのものが、まず稀^{まれ}なことではあるが、仮に、生徒がこう語ったとしたら、教師は、どう反応するであらうか。試みに、次の五つの反応に分けてみよう。

- (1) 「君、甘^{あま}つたれてるよ。そんなくだらないことを考えてる暇あつたら、とにかくやれ。勉強が役に立たないなんて、間違^{まちが}っている」。

(評価的態度)

(2) 「君、言い逃れだ。やりたくないから、わざと、他のことを考えた、したり、何のために勉強するかなんて疑ったりするんだ」。

(解釈的態度)

(3) 「他のこと考えるって、君、何か、学校や家庭で気になってることあるんだろ。友達とうまくいかないとか、家で一人で寂しいとか。気になってることあるから、勉強が手につかないんだ」。

(診断的態度)

(4) 「君は母子家庭だから、きっと責任の重さに耐えられないんだろ。大変だね。先生が少し勉強みてやるから、その気になりなさい」。

(支持的態度)

(5) 「君の心の中に、すっかりと勉強にとりかかれないうかがあるということだね。しなきゃと思う気持がありながら、それでもやれない自分に、やきもきしている感じなのかな」。

(理解的態度)

この五つの反応に、便宜上、(○○的態度)と名付けてみた。教師の日常の態度としては(1)(2)(3)(4)の型が多いと言えないだろうか。良心的で熱意のある教師なら、生徒に対して、「こうあれかし」と願う確固たる価値観が基盤にあって、それに見合う生徒を高く評価し、それからはずれる生徒を、何とか、教師の要求水準にまで引き上げねばと、叱咤、激励せざるを得ないだろう。生徒の状態を診

断したり、解釈したりして、原因を考え出し、こうすればよいと解決方法を教えたくなるだろう。お前がこうすれば、愛そう(又は、ごほうびをあげよう)、こうしなければ、愛さないぞ(又は、罰するぞ)というアメとムチで、生徒の意欲をかきたてようとするだろう。

愛情深い教師であれば、「心配するな、先生が力を貸してやろう」と激励し、サポート(支持)もしよう。そして、このいずれもが、教師の抱く信念を、生徒に言い、きかせ、最終的には言うことをきかせようとするものである点で共通している。

一言で言ってしまうえば、教師主導型の教育方法であり、これは、過去から現在に至るまで長い伝統を誇る方法であった。確かに、この方法や態度で、生徒たちの問題解決に、人間的成長に、役立つのであれば、今でも立派に通用する方法であろう。しかし、どんなに教師が説教し、説得しても、空振りに終わってしまう場合、それどころか、反発や抵抗に出会い、かえって本人が悪化してしまう場合、従来の方法では対処できない思いを抱くことが少なからずあるのではないかな。

そんな時、教師は、自分が生徒とかみ合っていない、すれ違っていると感じる。自分の熱意や善意は、徒勞に帰したという思いがする。こんな苦い経験をした方に、日ごろ生徒に接していて、空しさ、苛立たしさ、歯がゆさ、腹立たしさを感じている方に、私は同じ気持ち味わい、同じ経験をしたことのある者として、(5)の態度に注目してどうかと提言してみたいのである。

さて、この(5)の反応の仕方は、何とも教師らしくない発言で、不甲斐なさを感じられる方もいよう。評価も解釈も、診断も支持もし

てやらない、何という無色透明な、煮え切らない発言であろう。叱られるか、励まされるか、のつもりでやって来た生徒にとっても、拍子抜けのことであろう。

しかし、この発言は、今、ここで、生徒の立っている、ありのままの状態に焦点をあてて、それを尊重し、理解しようとする態度を表明しているのである。あれこれ注文をつけるのではなく、今、ここに、困惑した状態にある生徒と、同じ次元に立って、共に、同じ出発点から始めようとする姿勢なのである。生徒を眺めるのではなく、あるがままの生徒とかかわって、いく姿勢なのである。これが、カウンセリングの入口である。

この入口から入って、この生徒が、自分の胸に巣喰っている何かわからないものの正体を突きとめて、それから解き放たれ、自分の生きる方向を見出せるようになるかどうかは、この生徒とカウンセラー（この場合は教師）がどのような相互関係を結んでいけるにかにかかっている。そして、それには、カウンセラーの人間性（人間を観る眼といえよう）や、態度（ロジャーズのいう、共感的理解、無条件の積極的尊重、自己一致といったもの）が大きく影響してくるのである。

さて、具体的に、この入口から、どう歩を進めていくか、ということに関しては、次号から、項目に分けて、考えていきたいと思う。評価こそが、教師の金科玉条であったのに、それをさて置き、今、目の前にいる生徒を、たとえ、どんなに自分の価値観から大きくはみ出る人間であっても、そのまま丸ごと理解し、尊重するというカウンセリングの真髄は、これまで教師として立ってきた基盤をひっくり返してしまふほど、革新的なものである。受け容れがたい

脅威と、当然、感じられるであろう。

私自身、長い間、この点で、つまづいて、前進できなかったのである。しかし、もし、読者の方で、今までの、教師はこうあるべきものという固定観念から、少しでも自由になって、違った見方、考え方、対処の仕方を、垣間みてみようと思う方がおられるならば、私の理解している限りの、私の実践できている範囲の、カウンセリングなるものを披露していこうと思うのである。

こうは言っても、先ほどの生徒の例のように「君、強くなれ」と言われて、「ハイ、かしこまりました。今から強くなります」と即座に自分を変えることは不可能であると同様に、これまで築き上げてきた教師の価値観なり、信念なりを、ちょっと碎いてみて下さいと言っても、無理強いした言い方になるのかもしれない。

むしろ、私が、次号から明らかにしていくことの中で、疑問に思われること、とても承服できかねること、実状に合わないことなどを、率直に表明していただくようお願いする方が、理にかなっているかもしれない。それらに即して、共に悩み、惑い、考え合っていくことが、実りの多いものになるであろうと思われる。どうぞ遠慮なく、何でも、ウイ書房を通して、筆者あてに、今、ここに在る、ありのままの気持を、お寄せ下さるよう、お願いして、第一回の稿を終わりたいと思う。
(東京都立小金井北高等学校)

参考文献

- 1 伊東博『新訂・カウンセリング』誠信書房
- 2 ロジャーズ『全集第2巻 カウンセリング』岩崎学術出版社



〈学ぶ〉とは

長谷川 孝

近ごろ、教育とははたして可能なのか、ということを考える。そして、たぶん本質的には不可能なのではないか、という思いが強くなってきている。教育が可能だと思ひこんでいるところに、深いおとしあながあるのにちがいない、という気がする。

教師の「熱心さ」がしばしば、そのねらいとは裏腹の結果に至って、いわば熱心さがあだとなったりすることがある。教育への熱心さと、教育の可能性への信念が、その教師に、あるだいなことを忘れさせてしまうからなのではあるまいか。

そのだいなこととは、子どもたち（もちろん、おとなも同じだが）の学ぶという態度——つまり〈学び〉の自立性（自律協働性ヨビキテカウイと手前勝手さと、または自由と相依相関性）である。教育ということと、この〈学び〉とは、相対的に独立した関係にある。しかも、私は以前から言っているのだが、学習にとって教育は十分条件にすぎないのだけれど、教育にとって学習は必要かつ十分条件だ、と思う。ここに私が、教育の不可能性などということを考えざるをえなくなつたゆえんがある。

「荒れる子どもたち」という表現もあるように、いのちをそまつにする子どもたちの事件が少なくなない。自死や殺人からさまざまな暴力や、いじめ、差別、暴走、シンナーなどなど、事例にはこと欠か

ない。新聞紙面にはしばしば、「生命いのちの尊さを教えたい」という教師の談話が登場する。だが、いのちの尊さなどを教えられるわけがない、と私は思ってきた。

いのちの尊さとは、生きて在るということが続いているなかで、ふと〈気づく〉よりほかないことにちがいない。いったい、生きて在るといふ事実のつながりのなかで、意図して行なわれる教育とは、いかほどの比重をもちえておらうか。

教育のとどく範囲とはおそらく、人間が概念として外化したことを越えることができないのではあるまいか。思想においても生活技術においても、こういえるように思う。概念として外化されるとき（概念化の過程で）、人間にまつわりついている〈まじりもの〉——若い哲学者、内山節さんが「人なるもの」というときの「なるもの」にあたる——が捨象されてしまうのだが、じつは、いのちの尊さとは、この〈まじりもの〉と深いつながりがあり、それゆえに制度として仕組まれた教育の指のあいだから、こぼれおちてしまいがちなのだ。いいかえれば、〈気づき〉は意図して教育的に仕組むことができないう、と思うのだ。教育によって気づかせる、というのは傲慢であり、気づきを願うことしかできないのではなからうか。

一月二十二日に、全国の小・中・高校で、統一献立による給食と



(1)

「四年生のきみたちに
教えてあげる。
家庭科って
こんなこと
するんだよ」

ニークだよ。でも、び
じんとするのはジョー
ク
「ありがとう。じゃー
ね」
「うん、バイバイ、あ
つ、ちよつとまって。
ぼくの名前はねー。近
藤真彦、じゃーね」
「バイバイ」 (男)

〈五年生〉

四年生の子「家庭科ってどういうことする
の」

「それはですねえ。まーなんですわね」

「どういうことするの……」

「じゃー おしえてあげるよ。泣いちやうか
ら。うんとねえー。料理したりねえー、ぬい
ものしたり、せんたくしたりするんだよ」
「それから」

「うーん……そうだ。そんなことより、先生
のごとおしえてあげるよ」

「うん、おしえて、おしえて」

「うんとねえ、先生は八島先生っていうんだ
よ。それでねえ、歌がすきで、びじんで、ニ

家庭科は大人になってやくだつことをなら
う授業です。料理、せんたく、小物作り(ぬ
いもの)をします。私たち五年生は、白玉だ
んご・野菜サラダ・合ふき・ふくろろなどを作
り、せんたくもの・ガス・ミシンなどのつか
いかたやりかたをならいました。家庭科は男
・女くべつありません。男子もガンバレば、
女子よりうまくなるぞ。私のとなりの人も、
女子と同じくらいじょうずですよ！ 今度五
年生になるみなさん、ガンバッテネ！ (女)

といえはめんどうです。
だけど、つくってみればやっぱりおもしろ
かった。
◇
・かていかしつでやしませんせい(かていか
のせんせい)におりよりや、さいほうおせ
んたくをおしえてもらうじかん！
・やしませんせいがきぶんのいいときにはじ
ゆぎよう中に歌をうたいまーす！
・やしませんせいは、声をコロコロかえて、
おこつたりまーす！
・せんせいの声はいいとうまいかな？！
・かていかは、班を8班つくつて、おりよう
りやせんたくやさいほうをするのでーす！
・せんせいは、こわいときもあるけどたのし
いときもありまーす！ とつてもたのしいじ
かんのでーす！ 女の子でーす！
◇
かていかは、どくしんでいきっていくにもや
くだつし、たべものつくりかたもおぼえら
れる。かていかのじかんは、じぶんでこうど
うすることもだいじです。かていかは、よう
いをし、つくり、たべて、かたづける。かて
いかは、みんなと、たのしくたべものをつく
ることがだいじである。
(男)

家庭科というのは、いろいろな物をやりま
す。自分の家から家庭科できめた物をもって
きたりして作ります。食べ物を作るのなら、
材料をもってきたりして作ります。また、ぬ
いぐるみや手さげを作るときは、自分の家か
らきれをかつたりしてもつてきます。家庭科
はあぶない物やガスなどを使つたりします。
一つでも、まちがえるとたいへんなことがお
きたりします。

あべれたりしたら、そうゆうふうになるか
もしれません。だから、あべれないほうがい
いと思います。

(女)

◇
衣服の着方と整え方。ボタンつけと小物作
り。野サラダ。食物と栄養。持ち物の整理・
整とん。そうじのごみや不要なものの上理。
下着の着方と選び方。下着のせんたく。手さ
げぶくろの口をひもでしめるふくろ。調理と
燃料。かたゆでたまご。六つの食品群。ミシ
ンのあつかい方、ぬい方。おやつおやつの整え方。
おやつおやつと因らん。緑黄色野菜と調理。調理の
栄養素。家庭の仕事。仕事に役だつものの製
作。

(男)

〈六年生〉
家庭科というものは、クッション、エプロ

ンなどの実用的なものを作つたり、サラダや
白玉だんご、フルーツパフェなどをつくり、
いただく。その後、やってみてどうだったと
か、こういう感想をもつたとかの考え、気分
ちをまとめる。

◇
大きくなって、くつしたのつくろい方や、
ごほんのたき方を教わつたことは、とても役
にたつと思う。みんなでいろいろなものを作
つたりして本当に楽しい授業だと思う。(女)

◇
家庭科というのは、男がやるものではない。
ぬい物は女のやるものだ。たまあに料理をや
るんだ。男は、見てる方がよい。女が作つた
料理をがつつく。だけど、ちつともやらない
で食うと、すごくいやしく思われるので、少
しは、やつた方がよい。たとえば、用具を出
す。料理の材料。用具を出すだけというのは、
しまうのがめんどうだから、そういうのは、
女にやらせた方がよい。(男)

◇
家庭科というのは、もう五年生になると大
人になるので、自分の家庭をよく考える授業
です。自分でかんたんな料理を作つたり、食
べ物のえいようを考えたり、ミシンでかわい
くしてさげぶくろを考えたり、ししゅうを

つかつてエプロンを作つたり、時によってク
ッションなんかもつくりまます。せんたくのし
かたなんかもおそわります。とつてもおもし
ろいよ！ がんばつて。(女)

◇
家庭科は、家でおかあさんがたがやつてい
る事を学校でやるだけです。でも一番やなの
がせんたくです。これは、てが水でつめたくな
つて、手がこるからです。でも一番楽し
いのはりょおりです。それは、どうしてかと
いうと、すぎなものがつくれるからです。だ
から家庭科はおもしろいです。(男)

◇
家庭科という授業はそんなにむずかしい物
じゃないですよ。女の子だつたら、ふだん
お母さんの手つだいをしていれば、それとほ
んどかわつたことはいないんだから。男の子
でもけっこう楽しんでやれるんですよ。最初
はぞうきんぬいからだし、だんだんうまくな
れば、自分の作りたい物も自由につくれるよ
うになるから、すごく家庭科の授業はおもし
ろおかしいですよ！ ただ調理実習の場合は、
女の子はうまいかもしれないけど、男の子は
なんでもかんでもにたりやいたりするから、
モノスゴイのができちゃつたりするから、気

をつけよーネ！ ガンバレ！ (女)

◇ 家庭科は、料理やぬいものをして、お金がかからないようにして、大きくおもしろいものを作る。ぬいものは、針や糸を使います。ふきん、フェルトを使って入れ物を作ります。

料理は玉子、ジャガイモを使って料理を作り、みそしるはダンを作るのがむずかしい。又ほ

いそぐちはー

馬場 洋子

東京都小金井市の公立小学校に通い、今春五年生になる私の甥、タケン。同じ学年のヨシヒデ、ケンタロウ、サトシも集まったところで、家庭科について聞いてみた。

「こんにちは！ 五年生になると家庭科があるネ。家庭科って……」

「お料理作って食べること」「食べるだけ」

「家庭科室ってどういうところかな」

「今まで入ったことないの？」

「見たことあるけど、入ったことない」

「入れてくれないの？」

「あたり前！」「隣の理科室にいる時、た

う丁やさらの洗い方も勉強します。あと、こんだてやカルシウム、ビタミンのよいとりかたもやります。ごはんのたき方などいたためもの、たまには、ジュースも作ります。衣服の手入れも勉強します。 (男)

◇ 家庭科というのはおりょうりを作ったりエプロンやせんたくや、そのほかいろいろなもの

まに戸があいていたりする」

「一年生に入った時、上級生が家庭科やっているのわかった？」

「三年になってわかった。皆で船つくって展示会に出した時、五年で家庭科でつくったっていうのがあって、ホーと思った。でも四年になってはつきりわかった。家庭科ってどんなことやるのか。三年の時は料理つくるの知らなかった。ただ縫うだけだと思っていた」

「一年の時からわかった。ぼくが一年に入った時、お兄ちゃんが中一になったもん」

「お兄ちゃんどんなことやっていた？」

「裁縫箱にかぶとのシールみたいなのをはってたよ」「近所のヒロシは、よく家庭科の道具を忘れてた。今度六年だけど」

「お兄ちゃんが家庭科やっていた時、やりた

やったりします。家庭科は、お母さんたちがやっていることを、先生がやりかたや作りかたを教えてくださいます。わたしたちは、とってもしりょうりを作るのが好きでした。だからとってわたしのいいと思います。八島先生もとても楽しいです。 (女)

(草加市立谷塚小学校の子供たち)

いと思った？

「思った」

「家庭科の先生だれ？」

「松沢先生！」「三年の時、習字を教えてくださいました先生！ 一人二役だ」「ふつうの先生は一人何役もだよ」

「家庭科は五年からでしょ、期待してる？」

「国語や算数と同じ」「でも、国語や算数より知りたいよ」

We の出発は、あなたたちが家庭科にかかわり始めるのと同じ時。あなたたちが小学校を卒業し、中学、高校に進んだ時、どんな家庭科とふれあうのでしょうか。

見つけつつ We は歩みます。

私の高校は、五〇人のうち女生徒は一〇人たらず、非常に男性色の強い学校であった。女子校のような細々した規律はなく自由な空気にあふれ、私たちにとってかなり住みよい高校といえた。

家庭科の授業は、二クラス一組で一五、六人という小人数であった。その間、男性は格技をしていた。もともとは男子校であり、進学校でもあるせい、この学校には家庭科専任の先生がいらず、進学校でも非常勤の先生一人と、他高校からの出張の先生が授業をしてくださるという。変則的な状態であった。そういうわけで、女生徒も家庭科を教科の一つとはだれも考えずに、男生徒が格技をしてい

私が受けた家庭科

私がしたい家庭科

る間、暇つぶしにするものという程度の意識であった。体育で、女生徒はみそっかすで、男生徒がグラウンドを使っている間、そばのテニスコートで、テニス遊びに興じているという感じであった。

中学の時、男性に負けじと勉強をして、数多くの男生徒をいわばりおとして入った高校なのである。男女の別なく同じ試験を受けて入学した生徒たち。一女生徒ではなく一生徒なのである。私を待っているのは男女平等の厳しくも爽快な生活のほずであった。ところが、そこは、公認された男女差別とレディファースト的な女性軽視の世界であったのだ。男女の境なく競ったつもりが、男女差別の中に飛び込んでしまったとはあまりにも無残なできごとではないか。

この悲劇には、家庭科女子のみ必修の問題がとても大きい。もしここに、家庭科女子必修の問題がなければ、男性と肩を並べることを望んだ多くの女生徒をこれほど落胆させなくてもすむはずである。

こういう中で行われた家庭科教育にどんな意義があるのだろうか。高校時代を、毎日、試験、試験と追いたてられて過ごした私たちにとって、家庭科はある意味で息ぬきの時間であった。その日の時間割に家庭科の文字があるとほっとしたものである。「時には息ぬきが必要である」というなら、高校における家庭科教育とは、受験生にとって大きな意義があるのかもしれない。しかし、息ぬぎのための教科では、家庭科が余りにもかわいそうではないか。息ぬぎのために、指導要領を作り、教科書を作っていたのであろうか。

一方、家庭科は女生徒にとって負担でもあった。期末テストは一教科多く、男生徒が帰ったあと、女生徒だけ残されて試験を受ける。この一教科に費される時間というのは、短いテスト期間においてはとても大きい。女生徒が家庭科の勉強をしている間、男生徒は他教科の勉強ができる。なんとも不公平な試験ではないか。ここでは、家庭科は女生徒の受験勉強の足を引っ張りかねないのだ。

しかし、高校での家庭科教育が全く無駄であったかというところ、決してそうは思わない。高校時代の教科の中で、一番自分のために役立つと思っただけ、この家庭科なのだ。数学の微分・積分は忘れても、家庭科で学んだ栄養や育児は忘れてはいけないと思っていた。今でも家庭一般の教科書だけは、いつでも取り出せるよう手近においてある。数学が解けなくても、英語が訳せなくても生きていく上に不自由はないが、正確な栄養知識や妊娠・育児の知識がなかったら生命の危機にさらされることだってあり得る。人間が健康に幸福

にくらすために、家庭科教育はなくてはならないものだと思う。

それなのになぜ、家庭科が生徒たちから軽視されるのであろうか、家庭科きらいな生徒をどうしてこんなにつくってしまったのだらうか。この問題は、高校に限らず、小・中の家庭科教育も大きく関係してくるので、全体を通しての家庭科教育について考えてみよう。

まず、被服について——スカート、パジャマ、ワンピースの製作、編物、手芸など、今までやってきたなかで、知っておいて無駄なものはない。それまで人に任せていたものを自分の手で作るといふ経験は、生徒たちに非常な喜びを与えるはずである。それに、ほとんどの友達は編物や手芸が大好きであった。勉強もせずに編物に夢中になって夜ふかしをすることもあった。それでも、いざ家庭科の授業でそれをするとなると、どうもうれしくないのである。「あーめんどうくさい。どうしてこんなもの作んなきゃならないんだらう」と創造の喜びなどこれっぽっちも感じない。思うにこれは、家庭科という教科が、こういうものをいつ、いつまでに、こうやってあややってこんなふうに作りなさいとおしつけ一方であり、創造の余地を残すどころか同一型紙で同一方法でやらなければ減点するところからくるのであろう。生徒は、他教科との板ばさみの中で期限内に向かつて追いたてられ、夢のない製作をするのである。もし、そこに教育ママがいたなら、母親任せの作品が生まれるかもしれない。

食物——これは人間の基本的生活の中でも最も重要なところである。食べることに興味をもたない人間などいないであらう。それなのになぜ、あんなに活気のない授業だったのだらうかと不思議にさえ思う。一番楽しいはずの調理実習も、あの現実ばなれした計量のし方やばか正直な材料のはかり方は、どうも疑問である。とうふう

丁用意して、10g多からと一きれ残しておく調理実習が何の役に立つのであろう。実習計画の煩雑さにもぞっとする。

家政経済については、あの魔の家計簿づけを思い出す。まだまだピンとこない家庭収支をうそ会計のもとに書き込んでいくのである。支出を知って家庭運営をしていくことはもちろん重要であるが、家計簿なんて絶対つけないぞと決心したのもそのときである。

こうしてみても、どうも家庭科教育というのは、全体的にめんどうくさいものである。実習のときでさえも、教科書からはずれたことは何一つ許されないのだ。自分の生活にかかわる問題であるはずなのに、教科書の中の世界にしかいることができない。これこそ、家庭科をつまらなくする大きな原因ではないだらうか。そしてこれは、現実にも目を向けずに、一昔前の古い形に固執して、カビくさい授業をしていた家庭科教師にも大きな責任があると思う。家庭科教師イコールキーキーとなるヒステリックなおばあさんのイメージを払拭しない限り、家庭科は飛躍できないと思う。

そして家庭科の持つ根本的な問題は、女子のみ必修ということである。この点については、唯一の男女共修であった小学校家庭科にさかのぼって考えてみよう。

一番心に残っているのはある調理実習の時間である。メニューは目玉焼きとほうれん草のソテーであった。めちゃくちゃになった目玉焼きを前に、それでもほんとうに楽しく試食ができた。ふだんおとなしい男の子も女の子も、この時だけはやけにはしゃいでいた。

今まで何となく距離のあった男の子とも気楽に話せるようになったのはこの時からである。そして、目玉焼きとほうれん草のソテーは、私の大好きなおかずの一つになった。

今思うに、これこそ家庭科教育の原型ではないだろうか。「私、これする」「ぼく何やればいいの?」と、いつの間にかしている役割分担。そして、目玉焼きにはほうれん草と、しらずに身につく栄養観。ひいては友達のを広げ、人間関係を円滑にするのに役立つ。目玉焼きの作り方がどうこうよりも、こんなにすばらしい多くのものが、たった一時間で、子どもたちの中に入り込んでいったのである。中・高の家庭科においては、こんな感激はどうやって生まれなかった。もし、ずっとそのまま高校まで、男女一緒の家庭科教育が行われていたら、今、私たちは就職を目の前に、家事と仕事の両立について悩まないですんだのではないだろうか。男女差別の雇用問題に悩まなくてもすんだのではないだろうか。小学校のとき、家庭科がきらいだと言った男の子はほとんどいない。いや、みんなその時間を楽しみにしていた。世の中には男と女が半分ずついる。それが自然の状態なら、その状態で授業をするのが当然であるろう。家庭を築くのが男と女なら、それを守っていくのも男と女なのだから。

私の受けてきた家庭科教育の中での問題点をいろいろとあげてみた。ここから私の望む家庭科教育についてまとめよう。

一、現実をみつめること

教育実習で他教科の教生にも言われたことだが、家庭科の教科書は、家庭科の教師同様、どうしてこうカビくさいのであろうか。スカート・ブラウスのデザイン画やさし絵、口絵写真、ことば使いや内容にいたるまで、すべてに一昔前を感じるのである。これはどうみても、中・高生の感覚にはマッチしない。感覚に合わなければ、生徒たちは自分から立ち上がってはくれないだろう。カビくさい教

科書だけの授業では、何も残らないのである。教科書を離れて現実の生活の中から生徒たちの感覚に合うものをとらえ、現実を見つめる目を生徒たちに養わせるような授業が望ましいと思う。

二、全体的にとらえる

「家庭科だからここまで教えればよい」という視野の狭い授業ではなく、できるだけいろんな方向に発展させる。教育実習の時、私はハンバーグステーキとビーマンのソテーの作り方を講義したのであるが、肉の性質や栄養価とともに、ハンバーグステーキやビーマンの語源について簡単につけ加えた。それは、私が生徒だったら、一番知りたいおもしろいことだからである。あとで生徒たちの反応をみると、へたくそな授業であったにもかかわらず、「ことばの意味がわかっておもしろかった」という意見がほとんどだった。多分生徒たちはハンバーグステーキの作り方は忘れても、その語源は覚えているのではないだろうか。そしてレストランに行ったとき、家族にハンバーグステーキの意味を得意げに話すかもしれない。家庭科は決して教科書だけでは語り切れないのだから、いろんな方向から生徒に刺激を与えるべきだろう。そうした努力があれば、生徒は少しずつ家庭科という教科を見直してくれるのではないだろうか。

生徒を引き込んでいく授業、現実をふまえた授業は、たとえそれが型破りであっても、真の教育というものであろう。スカートの型紙を分けて、その通りに作らせる授業なら、手芸やさんに任せればいい。これからの家庭科教師にかかる重大な責任を痛感せずにはいられないのである。そしてもちろん、私がする授業には、男子と女子の顔が半分ずつみえてなければならないのである。

(日本女子大学生)



橋本 チエ子

「男の子にも身の回りのことや、いい家庭を創る術を教えよう」ということが「いいことだ」ということはもうわかりきっている。高校の家庭科女子のみ必修が憲法の理念に反し、国連の「女性に対するあらゆる形態の差別撤廃条約」に矛盾することも明々白々である。だから家庭科の男女必修には誰でも「二もなく」「そりゃあいい考えだ」と賛成するかと思ったら、文部省のお役人はいつまでたっても、「女子のみ必修」の線を死守している。そのいい分は、「女性」は家庭経営の中心的役割を果たすべきもの、という社会通念がある

身分制度の弊 家庭科女子必修から

以上、これを踏まえた教育的配慮は当然だ」と、つまり「今まで家事育児は女がするものと思われてきたから」というのだが、お役人自身、少なくとも現代人であるならば、まさかこのような、現状にとらわれた後向き論法が正論だなどとは思ってはいまい。

お役人たちは自分たちの論陣がいかに貧弱な上に、女たちは迫るし、外務省は国際的にかっこうがつかないとせっつくし、さぞや苦しかりうと思うのに、それにもめげずなお女子のみ必修にしがみついている。その執着ぶるとききたら全く異常である。「差別撤廃条

約」に矛盾する国籍法はとつづくに解決の見通しがつき、労働基準法も、問題があるにしても、ともかく政府は同法での男女平等化に取り組んでだけはいるのに、ちよつと見には一番簡単そうに見える家庭科だけは真向から反対しているのである。

「どうして家庭科だけをそれほどまでに……」と考えた時、私ははたと思いあたった。これはまぎれもなく身分制のためであると。昔から人々の間に階級をつけること、すなわち、身分制は、権力者が人の心を操るために有効な手の一つだったそうだが、表だった身分制のまかり通らない現在、そこはかとなく残っていて、しかもまことしやかにその正当性を主張してもあやしまれないただ一つのもの、それが男女身分制であつたわけだ。

そして世の中のほとんどの男性は、この身分制に支えられて生きているのだ。政治家やお役人は男性であると同時に権力者でもある。世にもゆるぎなきものとしてとりすがつてきた男女身分制、人心を管理するための魔法の鍵でもあるただ一つの身分制、このような貴重なものを簡単に手離さないとしても不思議はない。何よりも、多くの男性や為政者にとって、男女身分制のない社会など想像するだに恐ろしいのであろう。

その身分制のために、伝統的性別役割分担はあまりにもよく役立っている。なにしろ女性問題でその源をたどって性別役割分担に至らないものは何一つないほど、よく女を抑さえつけているのだ。

さらに性別役割分担の維持のためには、高校の家庭科はまことに重宝な学科ということになる。つまり、進学率の九十数パーセントにもなる高校で女子のみ必修を実施すれば、日本中のほとんどすべての若者に大っぴらに役割分担意識を植えつけることができるので

ある。結婚を間近に控えながらまだすっかり自我に目覚めていない年ごろの女子高校生に女の分担すべき役割を、いいかえれば女の「分」を合点させるもの——それが女子のみ必修の家庭科なのだ。

小学校から大学までの教育課程で男女共通でないのは、もう高校の家庭科において他にはない（中学校の技術・家庭もまだ相互乗入れ段階ではあるが）。女が物を考える力が強まった今、この貴重な「男女身分制のための誓」は、いったん手離したら最後、二度とは取り返せまい。ということでも多くの高校生たちが五教科とやらに目の色を変えている時、政府にとっては家庭科こそ最重要科目であったわけだ。

政府にとって家庭科がそういう意味を持っているなら、女たちはもう素朴に「男の子も生活者として自立させてやりたい」などただ

○ 原稿募集

「We」は、みんなで作る雑誌です。とくにこの「発言」欄は、読者の皆さんからの投稿によって充実させていきたいと願っています。

▽学習の主人公たち

小・中・高の生徒の率直なありのままの声を

▽明日の家庭科教師たち（二千八百字まで）

家庭科教師を志す大学生の希望、疑問、提言など

▽市民として（二千八百字まで）

一人の市民として、生活者として、腹ふくくる思いを

▽親も言いたい（千三百字まで、または二千八百字まで）

父親・母親の喜び、苦しみ、楽しみ、悩み、憤りなど

けいってはいられない。なにしろ家庭科には女の身分がかかっているのだ。それなら今展開されている家庭科攻防戦は、明治この方今日に至るまで、みんなで闘い抜いてきた女性解放戦の天王山ではないか。

この一戦絶対に勝たなければならぬ、いや負けはしない。大義はこちらにあるのだ。この世に少しでも理性があれば、そして女たちが力を集めれば負けることなどはあり得ない。だが……、このような当然のことに、永い永い闘いをしなければならぬ日本という国の未開ぶりには全くうんざりである。

気になるのは、昔から権力者が身分制に熱を入れる時は何かしら恐ろしいことがあったものだが、今度のそれは一体何だろうということだ。
（福井県 理容師 —投稿—）

▽教師のつぶやき（千三百字まで）

いま、学校現場であえぎつつもらすつぶやき

▽研究論文・実践報告（図表を含めて五千字まで）

生活や教育にかかわり、新鮮でシャープな視点を持つ論文、現実に立脚し、体験を深く掘り下げた実践報告を期待します。

▽わたくしから、あなたへ

読者・執筆者・編集者の交換室です。はがきでどうぞ

▽十字路は、モニターの方にお願ひしていますが、立候補歓迎

▼紙上匿名可。ただし原稿には住所・氏名を明記すること

▼原稿はお返ししませんのでコピーをおとり下さい

▼紙面の都合上、原稿を削らせていただくことがあります

▼掲載の分には薄謝をお送りします

親も

言いたい

竹見 智恵子

我が子の通う東京・三鷹市のM学園で、ここ数年來、高校生の退学があいついでいる。今どき高校生の退学なんて別に珍しくもないと思われるかもしれないが、「点数のない教育」「子どもに序列をつけない教育」をうたっている学校で、どうして子どもたちが次々やめていくのか親としては気になるころであった。

そんな思いでいる特、A君が学校から退学を申し渡され、それに反対する母親たちが抗議のハンストに入るという事態が持ち上がった。たまたまその時、小学部の父母のひとりとしてPTAの広報にかかわっていた私は、一体どうなっているのだろうと早速現場にかけつけ、そこではじめて退学には自主退学と強制退学があること、

自主退学という名の切り捨て

—教育的配慮はだれのため？—

やめていく子どもたちは一応自主退学の形をとっているけれど、内実強制退学と変わりがないこと、などを知った。

A君やA君の友人たちの話によると、自主退学していった生徒の多くは、本人の意志というよりは、学校側の示唆でやむなくやめていくケースが多いという。まず、成績の振るわない子、遅刻や欠席の多い子、授業中の態度が悪い子などがチェックされる。たびたび注意を受け、それでも改まらなないと、父母が呼び出される。この時点で、平身低頭、親子ともども悔い改める姿勢を見せれば留年という措置もあり得るが、いっこうに態度を改める気配がなければ、学

期末も近いある日呼び出しを受けて、「キミはこの学校の水に合わないようだ。どこか他の学校に変わった方がいいのではないか」と切り出される。場合によっては、具体的な名前をあげて転校・転身をすすめる場合もあるという。

ここまでくると、たいいていの生徒はうんざりして「こんな学校、自分の方からやめてやる！」といった気分になってくる。親はオロオロとして、いっしょけんめい子どもをなだめるか、学校のやり方に腹を立てて「そんな学校、サッサとやめてしまえ！」ということになる。たとえ親がその場はなだめて留年ということになっても、やめる時期を多少先にのぼしたにすぎない場合が多いとも聞く。

こんな経過をへて退学に至った場合も、はたして自主退学と呼べるのだろうか。A君の場合、最初は、成績不良、出席日数不足、反抗的な態度などを理由に学校側は方向転換を迫ってきた（高等学校では退学という言葉を使わない。教育的配慮による方向転換という）。しかし、A君とA君の母親が学校側の申し出を拒否し、「たとえ留年でもいいから学校に残りたい。ボクには高等学校で学ぶ権利がある！」とはっきり主張したために話し合いがこじれ、権利主張のためのハンストという事態に至った。

結果は、驚いた学校が、理事会をも巻きこんで、強引な退学処分決定という形で結着を見た。こうして、学園はじまって以来の強制退学が決まり、A君は学園を去った。今、A君は昼間ガソリンスタンドで働き、夜、都立高校の夜間部に通う。

経過報告の席上、高等学校長は「A君は水を得てイキイキと働いている」と父母たち告げた。それはあたかも、自分たちの教育的配慮が効を奏したといっているようであった。



柴田 栄子

生徒のA子。高校二年。「自分の手への信頼感を回復させたいと願った被服実習（立体裁断のショートパンツ）で落ちこぼした二人のうちの一人である。三学期早々、双方の時間をやりくりして、一対一の指導をする。「完成させようね」という私にしぶしぶうなずくものの、「どうせはかないんだから」とやる気サラサラなし。しかし出来上がるにつれて「ちょっといいじゃない。はけるかも、バイト先でこんな結構いい値段で売っているよ……」。

彼女は中学時代から家庭科の作品を完成させたことがないという。「途中までのものゴロゴロしている。成績？ 1だったかな2だっ

自縛の縄を解きたい

たかな「家庭科なんて必要だとは思わない。とにかく私は嫌いです」と入学早々の作文に書いていた。

私の娘。中学二年。ついこの間スカートを縫うんだと喜んでいたので型紙を切った！ しるしをつけた！ 裁った！ と報告していたのに、ある日「わたし、家庭科嫌いになりそう……」と涙ぐんだ。

娘の言うのはこうである。時間がたらないから先生は一度に三ヶ所の説明をする。聞いている時はわかるけど、自分でやろうとするとできない。ミシンは九合しかなくて順番を待っていたら遊んでいると叱られた。「みっちゃん（親友）は家庭科が一番好きで得意な

んだよ。そのみっちゃんでもわからないって……」
こうして、家庭科が嫌われていくのかと、家庭科教師である私は切ない。

手を動かし、道具を使い、物を作り出すことによって、猿から人間に進化したという話を引くまでもない。主体的にものを創造する活動は、人間の発達に大切であるばかりでなく、人間はものを創ることが好きだ。家庭科のもつ教育的価値は大きい。しかし、現実はその教育的機能を発揮する前に、子供たちはソッポを向く。

教師が悪い。親や生徒が悪い。施設・設備・条件が悪いというだけではすまされない。製作実習における不成就感は、周囲の知識偏重の価値観や教育にあおられて、容易に家庭科軽視へと発展する。それはますます子どもを歪ませる側に加担する役割を果たす。

教育とは多様な価値観の中で主体的に選んだ人生を、一人の生活者として自立して生きていけるように人間を育てることである。しかし、現実はそのようになっていない。学校教育そのものが落ちこんだ穴の中で、最も深い痛手を負ったのが家庭科である。

しかし、傷が深ければこそ、その回復を期する営みが生まれ、その中にこそ希望があることを語りたい。「人間が幸せを求めてどう生きるか」に直接かかわりのある家庭科こそ、「人間教育」の教科として、教育再生の可能性をもっているはずである。そんな内実を求めていきたい。

それはまず、家庭科教師（私を含めて）が知識偏重の価値観を転換し、教科書、指導要領、性別分業思想などの自縛の縄を解くことから、はじまるのであろう。

（埼玉県立福岡高等学校）

徑（こみち）書房という出版社をご存じだろうか。倒産によって筑摩書房を退き、もう出版の仕事からは、何が何でも逃げ出したいと思っていた一人の編集者に、山代巴は、その全著作集刊行の仕事をも、托した。その人をたった一人の専従社員として出発した徑書房は、山代巴文庫刊行に踏み切る。いま私は、「囚われの女たち」全十巻の第三部『出船の笛』までを手にかけている。

五〇〇〇枚に及ぶこのシリーズは、白い霧氷の流れる広島の子囚刑務所につながれた女たちの物語で始まり、第二次大戦開始後間もなく、治安維持法違反でとらえられた若い吉野光子（山代巴）を中心とする様々な人間模様を時代背景とともに描く。

凍てつくある朝、独房で体が硬直し、劇痛にみまわられて「犬神つき」になった光子は、拘置監から担ぎ出され、手当を受けた。ようやく意識をとりもどしかけた光子は、耳の中からの音のような、鉄瓶の口から湯気が吹き出る音のような、故郷の父の姿を偲ばせる音を聞く。

磐城炭鉱争議の中心人物、吉野常夫との人生同行の決意をうちあける娘に、父は言った。「光子や！今はのう、日本人の心が戦争へ戦争へと傾いて、大河になって流れておるんぞ……。そういう時流へさからう心を持つことは、大河の岸へ笹舟を浮かべるようなもんぞ」。だが父は、光子たちの結婚の錢かねに、「時流に乗れん世渡りには、瞑想がいる。日々この鉄瓶の口が吹く音色に耳を澄ます

ときをもつて、瞑想の友にせい」と、愛用の鉄瓶をくれた。

朦朧とした光子の意識にのぼるのはまた、激流の中へ常夫とともに船出し、京浜工場街に一労働者として住みついた日々に出会った人びとであり、ことばであり、暮らしてであった。——「沢庵は山吹色に、浅漬の菜は真緑に、茄子は紫紺色に」漬けて飯場を守り、もりたてたが、夫の裏切りに「青天井と三度の飯ぐらいどこにでもあらあ！」と「家」をとり出した常夫の生母タミ。無学無一物の子連れ女の苦勞を味わいぬいたタミの口から出た「学士様闘士」批判。鋳物場の女人夫として働いた日に、光子に、自分の本心を守ること考えさせてくれた「千すらり万三つ」の嘘つきイソノ。人の仲を裂く「マツチ・ポンプ」オシカ。

光子を、常夫をはぐくみ、鍛えた家族・友人・近隣・職場——の人びと。私たちのまわりの誰かれに通じうる多彩な彼らは、なんとよく動き回り、語り、悲しみ、よろこびつつ日々を生きていることか。彼らは、日本のいまを生きる私たちに、暮らしの日々を見つめさせ、女を男を、家族を友人を、地域を考えさせてくれる。

日本の人びとに変わってもらわなくては、私は生きられない——という作者と編集者によるこのシリーズを、私は今後とも待ち続けたい。

『出船の笛』山代巴著・徑書房・一、五〇〇円
（山代巴文庫・「囚われの女たち」第三部）

「二十五、六になっても結婚しないと、まるでどこかに欠陥があるようにいわれ、結婚に夢を描くと高望みだといわれ、男より一段低い人種みたいに思われ、男の人生に合わせればいい女で、自分を主張すると鼻持ちならないといわれ、大学で成績がいい人も就職口は少なく、あつても長くいると嫌われ、出世の道はすごく狭く、女は結婚すればいいんだからノンキだといわれ、結婚以外の道は殆んど閉ざされて、その上、いい男が少ないときては暴動が起きないのが不思議な位ではないでしょうか」

義理で見合した相手に気に入られ、結婚を迫られる佐伯のぶ代は、チューインガム工場で働く。「一年歳とることに脂肪はついて商品価値は下がるんだぞ」という両親に、「カーッと燃え上がれる人と結婚したい」と抵抗する池谷香織は食品会社のOL。お茶くみとコピーと職場の男たちのワイ談の対象でしかない。自分の居場所を家庭にも職場にも見出せない二人とロマンスカーのウェイトレス吉川久美子が知り合うのはインチキ旅行会社の説明会だ。若い独身女性の関心は旅行とBFとファッションだといわれるが、彼女たちも又、面白くない日々の生活を脱出して、「青春の日の思い出」を刻むために、海外旅行を試みようとして、見事にだまされる。この事件をきっかけに、「適齢期」の娘三人はお互いの小さな城に食物や酒を持ち込んで、おしゃべりを楽しみ、笑いさざめき、そして助け合う。屈託のない彼女たちの表情を曇らせるのは「結婚」だ。

「二四歳で結婚、二八歳までに子供を産み終える」などという数字が彼女たちを脅やかす。

相手の熱意にほだされて結婚を決意したものの、式前日に婚約者に、「オレ好みの女になれ。こりくつを言う女は大嫌いだ」といわれ、「靴下をぬがせろ」と命じられたのぶ代が結婚の意思を翻したことを知った香織と久美子が、結婚披露宴をぶちこわす場面が、このドラマの一つの山場となる。化粧室に籠城した三人の娘がひきずり出された時、彼女たちの胸に去来した思いが、冒頭引用のモノローグである。

このドラマがOLたちに圧倒的な人気を博した理由は、今日の若い女性をとりまく家庭状況、労働現場、あるいは社会通念という魔物を実にリアルに描いていたことだろう。それだけに私が残念でならないのは、「暴動」を起こしながらも、三人とも「結婚」をゴールと定め、最後まで信じて疑わなかったことである。彼女たちはなんの葛藤もなく自分の仕事を放棄している。彼女たちの心の渇きが、単純・単調・受身な労働に対する不満に発しており、彼女たちは「結婚」を唯一の風穴として捉え、それに賭けるわけだが、彼女たちにとって「働く」ことは、「想い出」にさえもならなかったようだ。そのこと自体が、男性優位型社会における女子労働者の実態を浮彫りにしているともいえるわけだが、彼女たち自身にもう少し「働くことの意味」を考えて欲しかった。

(山田太一脚本・TBSテレビ)

テレビ残像

ドラマ『想い出づくり』「結婚願望」の実像

野村康子

障害者は、いつも誰からも親切にされるもの、守られるものと、私は最近までそう思い込んでいた。いや、そう思い込まされていたのかもしれない。ある日私は、身の回りの世話をしてもらう人から「食事をいつも食べさせなければならぬので、自分はせわしなく食べたような気がしない……」と言われた。私はその人とは、一年半以上のつきあいだ。身体の具合が悪かったり、疲れたりしているときに、その人がすごい我がままをいうのは私も慣れていてよくわかっているのだが、時々ムカッとくるのだ。

その人には、私が障害者であるということもよくわかっていないようだ。脳性マヒにもいろいろ症状があるが、私の場合はアテ

トーゼ（不随意運動）型といって、自分の意思と反対に身体が動いてしまうのだ。着替えをしたりしているときに、私は誤って介助をしてくれている人の顔や身体を、手で打ったり、足をぶつけたりすることがある。たいいていの人は、「病気だからこうなるので、決して故意にやっているのではない」と話すと、本当に理解してくれたかどうかはわからないが、一応納得してくれる。しかし、前述の人は私が産まれたことだから事細かに話しても、気嫌の悪いときは、「私は障害者ではないからわからない」などと突っ張ねられてしまうのだ。でもその人と、時々こんな言い合いをしながらも長く続いているということでは、案外いい関係なのかもしれない。

今まで私の身の回りの世話をしてくれた人たちは、障害のことであからさまに何も聞かなかった。だから、私が障害を持っていることで、全てを理解してくれていると思ってしまう。

ところが最近、八年近くも付き合っている友達から、トイレ介助が初めのうちはイヤだったと聞かされたり、三年位の交際で何でも言い合えると思っていたボーイフレンドが、急に口をきかなくなったりして、自分が他人

に対してどうふるまったらよいのか全くわからなくなってしまった。どんなに身近にいる人でも、長い付き合いの人でも、真のコミュニケーションが不足していると、いつかはだめになっていくのだと、つくづく思い知らされた。それでも、障害をもたない人が障害者を本当に理解することは、やはり困難ではないかと私は思う。理解しようがないことをいつたり、何かにつけ協力を惜しまない人たちも、初めは抵抗があっただろう。

私が自分を取りまいている人たちのことを、全部良き理解者だと決めつけてしまうのは、思い上がりなのかもしれない。本質的なことは何も理解しないまま、うわべだけのつき合いをしているに過ぎないのだ。何でもわかってくれる。やさしい人たちがかりに囲まれていたら、私は何の進歩も苦労もない、フニャフニャした甘い人間で終わるのだ。自分の障害を見つめられないようでは、どんな人にも真の理解を求めることはできない。

私が三十歳を過ぎて初めて気がついた「他人のこわさ」に、今とまどいなながらも真正面から受け止めていきたいと思う。





子さんチの ね子たち

花になったシロ

さとう けいこ

このシリーズを始めるきっかけは、私が障害のある猫シロを「家庭科の男女共修をすめる会」の合宿に連れて行ったことからなのである。歩行が困難で寝たきりのシロは、箱根の宿でおとなしく私のひざに抱かれて打ち合わせを傍聴(?)し、メンバーを感じさせてしまった。以後我が家への手紙には、シロちゃんは元気ですか、とたずねて下さる方が多くなった。

シロは、昭和五十五年五月の最後の金曜日の朝、私のフトンの中で生まれた白っぽい三毛猫である。その前年から我が家に来てきたチー子が始めて生んだ四つの子猫の三女であった。生まれた時には何の異常もなく、白

く長い毛におおわれておっとりかまえたところは、フランス人形の風情(猫がフランス人形とはおかしいと笑う心ない人がいるが)であった。階下の奥さんは長い毛のシロを、「フワフワちゃん」とよんでくれた。

この年は初夏なのに真夏のように暑く、初めての育児はノミにくわれながらの大奮闘だった。仔猫がチー子に連れられて近くの草原へ遠出し、草の実を体中につけて尻尾を立てながら帰ってきた時の感激はほんとうに昨日のようである。ネコは二か月で乳離れするが、このころ四女のチビちゃんが死んだ。未熟児の上にお乳を姉さんたちにとられてしまったためである。その時もシロの体の異常は気づかれなかった。

シロの動作がのろいのはどうも性格だけではなさそうだと思いだしたのは、その年の秋も深まったころからである。猫用トイレに近づいてもその上に行かなくてバタンと倒れオシッコをもらしてしまふ。ゴハンのお皿の傍まで来ながら、ヒックリ返ってゴハンを一人で食べられない。コタツに足を入れてやると終日スヤスヤ寝てしまふ。それでも私はシロが障害児だと思わなかった。

しかし、ある日シロが後ろ足のヒザを床に

つけて、前足だけで苦しうに前進していのを見て、シマツた、もつと早く手を打つべきだったと悟った。シロの手足はあまりに細く、重くなった体重を支えることができなくなっていた。それからは、毎日抱いて箸ごはんを食べさせ、赤ちゃんの紙オムツにのせ、泣けばヒザの上のせて原稿を書いた。一日の大半をエーウ、エーウと泣いてシロは私をよんでいた。そうして一年が過ぎた。

昭和五十六年、十一月の秋晴れの朝、私はシロのなき声がしないのを不思議に思った。前夜くたびれ果ててコタツに足を入れたまま寝てしまい、シロが寒がるものだから、コタツの方へ足を引っ張ってやったことを思い出していた。はつとしてコタツぶとんをめくると、私からわずか数センチ離れたところで、シロはこと切れていた。健康な猫なら、すぐ首を出せるところなのに……。

「ねんねんころり ねんころり ニャンニャンシロ子の見る夢は 青いお空を馳ける夢 お花ばたけにねむる夢」

悪いことを何ひとつもすることのできなかつたシロは、迷わず天国へ昇ることができたらう。まだ、あたたかいシロの身体を抱いて、私は底ぬけに青い秋空に折った。



いでたちぬ、いま

半田 たつ子

「いでたたん、いざ」

創刊号のテーマとして、最初に浮かんだのは、この言葉だった。十三年半ひたむきに積み重ねた仕事を、ときの津波がさらっていった。憤り、歎き、怒り、迷い、苦しみ、悩み、その暗い長いトンネルの中で、雑誌を創る決意をした時、私の前に、暖かい明るい色彩にみちた世界が開けた。広々とした海原、はるかな彼方より寄せる波のさざめきに、春の光が跳ねる。岸边には小舟が一艘。二人で乗り込めば、それでOK。私はいま、とも綱を解こうとしている。

「いでたたん、いざ」

重畳たる大波に抗いつつ、小舟だって、航跡にそれなりのうねりを起こし得る——これが、「いでたたん、いざ」だった。

だが、ちっぽけな**We**号出航のために、かけずり回られたたくさんの方々。**We**号の寄港を待ちわびる、さらにたくさんの方々。その方たちに創刊号がまみえる日、**We**は「いでたちぬ、いま」なのだ。作り手でなく、読み手の側に立って、私は「いでたたん、いざ」を「いでたちぬ、いま」と変えた。

島崎藤村のひそみに倣うなら……

〈遂に、新しき**We**の時は来りぬ。

そはうつくしき曙のごとくなりぬ〉

「もう、そろそろ、ライフ・ワークを決めてもいいと思うのよ」

こんなことをしゃべった時があった。下の娘が幼児のころ。幼なごの美しさ・楽しさ、そのうつろうのを恐れて童話を書き、子どものための創作をしようかと、本気で考えたこともあった。ああ、恥ずかしい。

ライフ・ワークとは、自分で作るものではない。人の心の息づくところに、自ずと生まれるものだった。私は、いま初めて、これらの生涯を賭けて何をなすべきかを、はつきりとつかんだ。

Iの拠点として**We**を創る。**We**の中の**I**として生きる。そのために私のささやかな歴史は、細かい變々まで生かされているのを実感できるのだ。生まれた家庭、両親の育て方、時代と社会環境、自ら選んだ結婚、北陸でのくらし、働く母として家庭科を教え……こうして数えきれない問題を持って教育雑誌の編集者となり、そこに生まれた執筆者・読者諸氏との深い心の交流。このすべてを**We**に注ぎこむことができるのは、何という幸せだろう。

父を、一昨年暮に喪った。気難しい人で、独自の考えを貫いて九十三年生き抜いた。私の考える姿勢は、この父によって鍛えられたと思う。父がもし生きていたら、今度のことをどう言うだろう、と、母に尋ねた。母は即座に「そりゃあ、喜ぶでしょうよ」と答え、私を驚かせた。

「たくさんの方が応援して下さるの」と話せば、「それではまずまずがんじがらめだね」と吐息をつき、私を見送った後で、「後姿を見て、しみじみ可哀想になった。どうして今さら、こんな大変なことをしなければならぬのかと思って」と洩らす母だったから。

「どんなに苦勞なことだろうね」と言う母を「だから楽しいのよ。苦勞を伴わない楽しみなんてないものね。大変だからこそ、楽しいのよね」と慰めた。でも、パートナーの若い馬場さんには話した。「赤ん坊を育てながら働き通す時期は、子どもの愛らしさ、成長の楽しさで救われるのだけど、どんなに、どんなに大変だったことかも、あの苦勞は、二度とイヤって思うのね。今は、ちょうどその時期と似ているわ」。

「目標の購読者数に達するかどうかもわからないのに、事務所を借りるところではないだろう。わが家を事務所とするところから出発すべきだ」と夫は言い、「ウイ書房」の看板を書いてくれた。その夫に「仕事場と家庭が同じってことは、頭の切り替えができなくて、ホトホト疲れる」とグチった時は、まだわかっていなかった。

ほどなく、土・日なし、毎日十六時間労働の生活が始まった。でも、通勤時間ゼロ、机に向かえば居間に変わるといふ生活だったから仕事か何とか進捗した。深夜、今日届いた振替を整理していると、びっしり書き込まれた励ましの文字が耳もとで音声となった。「早く創刊号を読みたくて、読みたくてたまりません」との無条件の信頼。私は何度かまいを感じたことだろう。

私の退職を知るや否や、さあーっと広がった連帯と支援の輪。そ

こで初めて出会い、あるいは絆を強めた方たちのこと、それは、到底書き尽くせない。千一夜物語よろしく語り明かし、語り継いで、語り尽くせないだろう。人間って、こんなに美しかったのか。人間と人間の関係って、こんなに楽しかったのか。この感動は、もう少し落ち着いてから、一大ヒューマンドキュメントにでも著わさなければ……。

感動に打ち震えながら、これほどの歓喜を味わい尽くしたからには、いつ死んでも悔いはないと思った。すてきな男とすてきな女たち。私自身はすき透っていつて、**We**をこれらの方たちの出会いの場として提供すればそれでいいのではないかとすら思った。

私たちが直面する一大問題状況をよそに、私は、余りにも個人的なことを書き過ぎたのだろうか。だが、すべて問題は個人から始まり、個人で終わる。ただ、これだけは書かねばならない。

私は家庭科とは「人間らしい生活とは、どんな内実を持つものなのかを知らせ、それを創り出す力を培う教科」と考える。人間の生活を対象とする家庭科が、これまで扱ってきたのは、衣・食・住など生活を維持する働きが中心であった。生活を創造する営みである。学ぶ・遊ぶ・知る・働く・人につき合うなどを考えることは、家庭科ばかりでなく、長い間日本人の発想に基本的に欠けていた。

生活を創造する営みを追求課題とした時、家庭科は新しい命題のもとでよみがえる。いや、それは日本人の生活観を目覚めさせることにもなるのではなからうか。これが**We**の中心課題である。

〈遂に、新しき家庭科創造の時はいよいよ来りぬ。そはうつくしき曙のごとくなりぬ〉

♥新しい旅立ちを、いざ！多くの熱い思いが結集して創刊を迎えた力に目を見はる。斑鳩の空の下で手をこまねき、ただハラハラと推移を見守った私メは、大きな力のうねりに感動するのみ。人間らしい暮らしを希求する人々の情熱がたぎる「WE」、まさに「WE」！ここにいでたつ。ここに船出す。

♥「I」のつぶやきは、はかなくか細い。時代の様変わりにも翻弄され、不安と焦燥にかられつつ、闇の行く手に灯りをまさぐる。子育てとは、家族とは、生活とは、人間とは、愛とは、生きるとは——つぶやきを叫びに変えても、吹きすさぶ荒野の風にかき消される。

♥大きな情報は家庭の隅々まで届き、大きな声はきらびやかな言葉を並べる。そのうさくさはわかっても、さて、待ったなしの現実をどうするか。ごまかし、ごまかし、やり過ごしているだけではないのか。使う言葉の内実を埋めるものがあるのか。いや、私ははたして生きていると言えるのだろうか。

♥渾沌とした己れの内奥をのぞくのが怖い。子供とかかわり合う陽気さ、楽しさの底を見

つめるのが怖い。私の毒気を吸い取って育ったわが子。子育てはやり直しのきかぬ一回生の大事業。私はいのちを育くんだのだろうか。いのちを愛し、ともに生きたのだろうか。

♥「子別れ」を間近にして、独り立たねばならぬ脚が震える。自立したつもり、男女平等

丙十舞雅星 バラード

を生きたつもり、人間らしさを希求したつもり——なんと言葉優先の浅はかな己れの実体だろう。やさしさも思いやりも愛という名のエゴイズムだった。みすばらしい愚母の正体。

♥不安という現代病が蔓延している。不安を内包して分断された個はヨロヨロと歩む。のしかかる大小の問題におののきつつ、立ち向

かいつつ、だからこそ人とのふれ合いを、魂のぬくもりを求めるように誰もが渴望しているのに、暖かい情報は少なく、届きにくい。

♥不安に揺れ動く母親たちに「WE」を紹介できることがうれしい。そして、「WE」の出發を独り立つ私のそれにしよう。ごまかさずに、諦めずに、ひたむきに真実を追う「WE」に学んで、うねうねと伸びるわが道を耕やさねばならぬ。笑いや涙を肥料に創るヘソマガリ道は、ひん曲がっても味を出さねば。

♥「I」のつぶやきが「WE」の歴史を紡ぎ、そのうねりが山をも動かす日がくることを信じ、私の「I」もまた、いのちあるかぎりヨタヨタと進んで行こう。ブザマな生きざまは「WE」の横系の一本にしては、「作品」を乱す恐れは多々あれど、見ようによつては個性豊かなそれになるかもよ。

♥情報化社会と言われて久しいが、血の通った活字は少ない。ヒトとしての生を高らかにうたい上げる「WE」は、孤立した個をつなぐ暖かい潤滑油としても活躍することだろう。大いなる船出に、ボンポヤージ！(桐野晴子)

☆今後10年の障害者対策—中央対策協

国際障害者年を契機に、今後十年間の障害者対策の基本方針を審議してきた中央中央身障害者対策協議会(総理府の付属機関・山田雄三会長)は二月二日、鈴木首相に提出する意見書「国内長期行動計画の在り方」を全会一致でまとめ、田辺総務長官に手渡した。

意見書は「総論」「保健・医療」「教育・育成」「雇用・就業」「福祉・生活環境」からなり、行政が取り組むべき障害者問題解決のための方向を提言。これを受け政府は三月末までに82年度を初年度とした十九年計画を策定する。

審議は協議会部内に設置の国際障害者年特別委員会(葛西嘉資委員長)で五部会に分かれて行ってきたが、最大の焦点は教育・育成部会での「統合教育」導入の問題。意見書原案は、「統合教育」については一切触れず、文部省が現在推進している「交流教育」の「一層の推進」だけ。これに対し、「障害者の生活と権利を守る全国連絡協議会」「障害児を普通学校へ・全国連絡会」などが強く反発。最終的に、意見書の中では、論議の結論は「先に延ばした」かたちで決着した。

(毎日、1・23)

☆日本女性の職場進出伸びず

国際労働機構(ILO)が発表した国際労働年鑑81年版によると、71~80年までの間に、日本を除く世界の先進工業国、発展途上国ではいずれも女性の職場進出が進み、女性の雇用比率が大幅に増加、日本で女性の雇用差別が改善されていない実情が確認された。

十年間の男女雇用数の増加は、米国女四三%対男一三・七%(全雇用数二四・五%)、カナダ五九・一対二一・三(三三・九)、英国一一・三対マイナス四・一(一一・五)、モリシヤス九三・六対三一・三(四三・四)、フィリピン三六・七対二五・〇(二八・八)など。女性雇用の増加率が男性を上回っていないのは日本だけで、男女とも八・一%増。

全雇用数に占める女性の比率は米国で71年の三七%↓80年の四二・四%に増加、カナダ三三・四↓三九・七、英国三六・五↓四〇・一、モリシヤス一九・五↓二六・三、フィリピン三二・一↓三四・一といずれも女性雇用比率が大幅に増加。日本は71年、80年とも三八・七%で横ばい。

(毎日、2・1)



☆核廃絶・軍縮、女性も結集

婦人の立場から核廃絶と軍縮実現をめざす「第二回国連軍縮特別総会に向けて」婦人の行動を「を広げる会」が紀平梯子日本婦人有権者同盟会長らの呼びかけで、二四婦人団体(主婦連、日本婦人会議など)が参加し、二月三日発足。三千万人署名運動に取り組む。

同会は署名運動の母体「国民運動推進連絡会議」(呼びかけ人・中野好夫氏ら)と共同歩調を取って六月の軍縮特別総会を目標に草の根運動を広げていく。(毎日、2・4)

☆高校生憲法意識調査—日高教

日高教は一月二日、「高校生の憲法意識調査」の結果を発表。平和感覚は前回調査(77年)に比べて全体に前進しているが、権利意識は後退しているのが特徴。調査は昨年十月下旬、一一道県の普通、職業、家庭、夜間計四六校九七二五人を対象に実施。

「憲法を何回も読んだ」「一通り読んだ」のは、一六・一%(前回比三%増)。「自衛隊は」「憲法違反」三二・七(同三増)、「合憲」一八・二。「徴兵制」「賛成」四・一、「反対」七〇・六。女子は三三・九が「わからない」。「憲法九条の廃止」「反対」五二・八、「賛成」二五「わからない」三二・二。(毎日、1・22)

川 十字路

北海道○アイヌ文化の殿堂を北海道に○

札幌の婦人学習サークル「グループリラ」(細川真理子代表、四〇人)が「アイヌ文化の殿堂を北海道につくろう」と提唱している。昨年訪問した大阪の国立民族博物館でアイヌ文化の素晴らしさに触れ、肝心の北海道で、文化保存がとかく忘れられつつある現実を聞き直そうというもの。(朝日、1・11、山口里子)

新潟○定年で依然女性差別○

昨年、三条職安所が管内(三条、加茂、見附など県央七市町村)の従業員二〇人以上の企業六一八社を対象に行った定年実施調査によると、定年実施企業は七〇%の四三〇社。このうち女性だけ低く抑えているところが二一・四%の九二社。男女別の定年年齢は男六〇歳、女五五歳が三四社でトップ。差別企業は卸・小売り、金属製品製造がほとんどで、「女子は単純作業が多く格差は当然」とし、同職安所の差別撤廃の行政指導に抵抗している。

(新潟日報、1・11、山口久子)

石川○金沢に女性教育研○

「一方的に与えられた学習方法だけでなく、

女性自ら能力を高める学習方法を開発している」と、金沢、福井、富山など北陸の働く女性たちを中心とした「女性教育研究所」が金沢市に設立された。発起人は社会教育インストラクター山本和子氏と大学職員上木恵子氏。今後、「女性学習会講座」や企業向けの「女性リーダー講座」などを各地で開設する。

(朝日、2・9、加藤由美子)

埼玉○「県行政情報公開懇話会」発足○

県は来年六月をメドに行政情報の公開制度をスタートさせる。一月二五日、各種団体代表、民間有識者が構成する「県行政情報公開懇話会」(二〇委員)を発足させ、同二六日、第一回委員会を開催した。昨年七月、持田県民部長を中心とまとめた公開基準を再検討し、同制度に反映させていこうというねらい。

(読売、1・26、村上悦子)

千葉○着実に歩むメデュピア○

お年寄りが互いに面倒を見合い、あるいは子供の教育や農作業などに当たり、病気になるれば確実に医療が受けられる「医療(メデュピア)」と教育(エデュケーション)を結合した理想郷(ユートピア)づくりをめざして昨年四月に流山市でスタートしたメデュピア(谷川徹三会長、推進者・庭瀬康二医師)。昨

年九月には老人とその家族が学び、楽しむ「老稚園」も発足、今年には、老人や若者、主婦らが一緒に働ける農園づくりを計画中。

(朝日、1・14、奥田暁子)

栃木○投票で犯人捜し—小学校○

宇都宮市内の小学校で教師の電子卓上計算機が紛失したことから、担任の教諭が児童に疑わしい児童の名前を投票させ、名前の挙がった児童を他の児童たちが問い詰めるという犯人捜しが行われていたことが明るみになった。担任の教諭は、盗んだとうわさになった児童の疑いを晴らすためやったと弁解している。(下野新聞、2・4、坂本昌子)

東京○中野区で婦人行動計画発表○

昨年十二月一日、中野区は、「中野の婦人行動計画」を発表。「男女平等教育の推進」では「伝統的な性別役割分業観に基づく女子への教育やしつけの存在」「中学校、高等学校における家庭科教育など」を問題点とし、「学校教育や社会教育、家庭教育を通じて性別に基づく差別的解消に努める」ことなどをあげている。(行動計画より、仲田香代子)

神奈川○東ドイッ婦人と話し合う—横浜○

「一九八二・DDR(在日東ドイッ)」とよこはま女性の集い」が一月十二日、横浜の県国

際交流センターで開かれ、女性の役割、教育、平和・軍縮問題など幅広いテーマに沿って話し合った。同会合は、国際婦人年が始まった七年前から、両国の婦人が体制の違いを越えて毎年一回開いている国際交流の集い。

(神奈川新聞、1・13、皆川鎮枝)

静岡○沼津市教委が小、中学生意識調査○

沼津市教委が一月二一日発表の「小、中学生意識調査」によると、十人に七人は学習塾や家庭教師につき、学校以外での勉強をし、将来は「平凡でよいから幸せな家庭を望んでいる」(女七九・四%、男五二・八%)。

調査は、市内の小学四年生以上の児童と中学生一九九二人を対象に、昨年九月実施。回収率小学九七・二%、中学九七・五%。

(毎日、1・22、石井矩子)

愛知○体罰禁止条項の削除を陳情○

愛知県高校PTA・OB会(森本正一会長、会員五百人)は、少年非行や校内暴力に教師らが積極的の手を打てないのは、学校教育法一条の体罰禁止規定が大きな原因だとし、同条項の削除を文部省に陳情、全国的な請願運動に広げて行く方針。同県教委幹部も賛成の意向という。同県高校教職員組合や関係者の間では「教育の右傾化につながる恐れがあ

る」と強い警戒。(朝日、1・12、山田和枝) 京都○婦人問題解決の基礎講座開設○

京都市の婦人行動計画原案が今春策定されるのに先立ち、京都市教委は婦人問題の基本分野をじっくり学習してもらおうと「婦人問題解決のための基礎講座」を一月〜三月に開設する。

(朝日、1・15)

一〇女性専科の書店―松香堂、京都市にオープン

(朝日、1・16、塚崎美和子)

兵庫○高校教育の多様化で専門学科併設○ 兵庫県教委は、県立高校の普通科に音楽科、美術科、情報科学科の三学科を新たに併設することを決め、開設準備作業を始めた。今春からの新学習指導要領の実施に伴い、選択科目の増加や進路別コースの導入など、個性や進路に応じた教育課程や指導法が行われるが、音楽や美術などの分野では、それでも不十分のため、別個に独立した学科を設けるもの。普通科高校への専門学科の併設は、東京、愛知に次ぐ試み。スタートは83年度。

(神戸新聞、1・3、由良サダコ)

長崎○高校生がお年寄り慰問○

私立島原中央高校の生徒たちは、昨年八月島原市社会福祉協議会から社会福祉協力校に指定されたのを機に、市内に住む寝たきり老

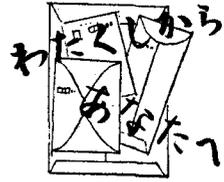
人などの家庭を訪問。話し相手になったり、ちよつとした身の回りの世話をして慰めようと「小さな親切」運動を同十一月から実施。

一〇三年各一人計三人が一組となり一人の老人を継続的に訪問。現在毎月一回行っており訪問を希望する老人は二八人。老人福祉対策に社会がもつと目を向けるべきだ」などの感想が出てきた。(長崎新聞、1・23、中村美佐子)

熊本○『近代熊本の女たち』出る○

家族史研究会は昨年の十月と一二月に『近代熊本』の女たち』上・下(熊本日日新聞社刊)を出版した。会は、男女共学の家庭科をすすめるために、真に民主的な家庭づくりをめざす教育内容をと始めた学習会で、主婦も加わり、雑誌「女性史研究」(年二回)もすでに一三集を出している。

同書は、79年一〇月から三三回にわたる新聞掲載分をさらに調べて書き改めたもの。とりあげた女性は、かつて大宅壮一によって「熊本の猛婦」とよばれ、中央で活躍し知られている女が多いが、無名の教育家や内助の功で一生涯を終えた女もいる。封建的な色の濃い土地柄のなかで、女たちが、「女も住みよい熊本にするために」の願いをこめて書いたこの本に大きな反響が寄せられている。(中山そみ)



一月二十九日、広島

教研第一日目の夜、半田たつ子を囲む会に参加された方の感想文から――

▽女性の自立は、単に

女性だけのものではなく男と女が本当に自立した時に初めて家庭の自立もあり、子供の自立もあるのではないだろうか。新しい家庭科は、人間の最も基本的な、重要な内容を持った教科であると思います。「We」に期待します。いつまでも、雪が初めて地上に降りる時のような、新鮮な雑誌でありますように――。

(東京 山崎 粂)

▽戦争はわたしの時間、くつろぎ、わたしの労働を奪う。わたしがわたしでなくなる。わたしとは一番遠いところから、全く見えないだれかの作った仮想敵国とかのために、わたし自身が奪われる。

それはまるで、女らしくしろ、女のくせにと締めつけ、わたしの手足や感性を根こそぎ奪っている「女性差別」と同じだ。

「We」の未来は、この二つを撤廃し、新しい世界を創り上げるためにある。ガンバッテ!

(東京 三井 マリ子)

▽「We」の創刊おめでとうございます。

現在の学校地獄とも言うべき状況、絶望的無力感の淵に立たされている生徒の側から出発したいと思っています。「家庭科教育」に拠りつつも、そこから解き放たれて「ギャルズライフ」を読んでいる子や「バイク雑誌」でひと息ついている子にも届くようなものにして下さい。そのためには、絶大なる精神的応援と協力をしますよ。

(内申書裁判・青生舎 保坂 展人)

▽「We」発刊記念のおまつりができたらいい! Weが出るよ、ということ、家庭科問題に興味のない人にも、中学生も遊べるような、おまつりができたらいいなあ〜!(保坂宣子)

▽新しい出発への決意、それは、本人しかわからないでしよう。しかし、多くの仲間が基本的な所で共鳴し、共にそれぞれの場で生かされることで、この決意の地平に立って歩んでいけるのだと思います。「We」、本当に「We」になることを心より願っています。学校という場すら与えられない、又、目に見えない形で、教師の手、親の手によって、子供たちを抑圧してる大人達が多いこのごろです。

人間教育の原点、解放をめざす教育の原点

は、障害児教育だと思っています。一人一人を大切にすることによって、障害児・障害者は、対等に人として生きていけるのです。設備が整ってから、準備を整えて、という言葉は、すべての子供を殺すことと思います。ぜひ多くの人々と手をつなぎ、手さぐりの、そして試行錯誤の教育への情熱をささげていきたいと思っています。(金井康治の母 金井律子)▽名取さんや保坂さんといった人の集まる会合に出席できて、光栄に思っています。

英語の教員ですが、日ごろから教科のワク

を打ち破って、まさに「We」が目指していると思われる生活の科学を探究していくことが必要と思っています。男女共修の闘いも、分会でやってきたところですが、軍備拡張の危機の高まる中で、各地でそれぞれの位置で闘っている人たちに思いをはせながら、私も自分の位置でセクトに陥ることなく精いっぱいがんばります。共に闘いましょう。

(広島 上野原 昇)

▽毎日の中で、現在の家庭科教育は、いったいどうなるんだらうと、不安は募るばかりでした。何かがんばっている人たちの中へ入って、自分をふるい起こしていかないといけないと思って、今日来ました。いろんな形で闘

っていらっしやる人々に負けないうように、がんばろうと思います。重たい問題を心に重く残すのではない自分にしたと思います。

(広島 上野原 百合)

▽卒業を間近に控え、少しでもお金のいる時に、と親の白い眼をよそに、一日がかりでやって来たかきがありました。私は春から小学校の教師になりますが、大学で家庭科の持つ問題に触れたことを、最大限に生かすようがんばりたいと思っております。日々の教材研究に追われ、家庭科の研究に専念できなくなると思いますが、常に心を新たに作り組めるよう「We」に期待しています。私もできるだけ意見を送り、共に「We」を創りたいと思っています。(金沢大学学生 長田 郁代)

▽教員になって三年が過ぎました。その間、結婚・出産を経験し、母として、主婦として、教師として、家庭科の中身をどう作りあげていったらよいか、毎日の生活をくり返す中で考えています。うちの学校は、いわゆる低学力ということで、意欲も自信もなくこつちを向いてくれません。そんな中で、どうしたらこつちを向いてくれるかなあーなんて、魅力のある中身を何とかして作りたいと毎日毎日、プリントを作っては配り、プリン

ト作業の授業をしています。何をどう組み立てて、何の力をつけなくてはいけないのか、手探りで授業している私にとって、「We」はとても待ち遠しいものです。

今日、東京の小学校の先生が、非行に走る子供は食生活が乱れている。あたたかいものを食べていけないというレポート報告をされました。自分の子供を保育所に預け、毎日時間的な余裕がなくて、あたふた生活している現状ですが、時々簡単な夕食しか食べさせてやれない時があり、これでいいんだらうか、私は何をしているんだらうかと悩むこともあります。仕事は続けたい。勉強し続けたい。できるだけ小さな子供に対して、ホントに今のようでもいいのかな、と不安になることもあります。

そんなふらふらした頼りない教員ですが、今日の集会を糧に、がんばりたいと強く、強く感じています。(広島 小河 京子)

▽村田泰彦先生に引っぱられて……という出発だったのに、気がつくと渦中に在りました。何の力もない私が、今北海道上川の婦人教師や「母女」のお母さんに、どうしても「We」の仲間になってもらおうと、自分で動き出していました。それは、村田先生や半田先生に頼まれたからではない。私だって「We」の主人

公になれるのだ、と感じたからです。

自立とは、文化を創り出す力になることだと、半田さんを見てそう思います。文化性の高さは民主性とかかわります。半田さんのお仕事は、そんな民主的文化をつくり出すこと、ほんとうの女の自立を示していただきました。

(北海道母と女教師の会 霜下 美恵子)

▽小学校の教員です。勤めてまだ年数が浅く家庭科を受け持ったことはありません。ふとしたことから「女子教育問題」(私たちは「女性解放教育」とよんでいます)にかかわったのが三年前。ここで、女性解放教育をやっていく上で「家庭科」という教科が、本当に大きなウェイトを占めていることを感じました。

私自身、高校生の時「なんで女だけこんなせなあかんの？」と非常に不満だったことを思い出します。けれども今、私たちが習ったときの家庭科とは違う家庭科があることをこの三年間で知ることができ、これから少しずつ形づくられる教科として、すごく楽しみです。来年度はぜひ高学年担任を持ち。この間学んだことを生かすべく、家庭科を創っていきたいと思います。そのためにも「We」、ぜひがんばっていただきたいと思っています。

(大阪 嶋 和子)

◇胸にそっと手をあてると、ドキッ、ドキッ和高鳴っているのを感じます。今日そして明日、事務所に何が舞い込み、何が起こるのか見当がつかない毎日。『Weの店頭販売OK!』というステキな知らせではじまる1日があれば、予約購読申し込みの郵便振替が来ないで気落ちする日もあります。でも、翌日、2日分の郵便振替が来て、ホッ! というのがほとんどです。

すばらしい原稿、皆さんの声そして購読申し込みを運んでくれる郵便屋さんお待ち遠しくてたまりません。バイクの音がすると、のぞき込みます。今のところ我が待ち人は『郵便屋さん』。

◇十字路の原稿たくさんいただきました。ありがとう。2頁というスペースにはあまりにも盛りだくさんの原稿。結局、数県省かせていただきました。すみません。これからも各地の情報、よろしく願ひ致します。

◇2月11日、市川房枝氏の追悼会に行ってきました。遺品展示の中で見つけたなつかしい字。映画「子供の頃戦争があった」の推せん文『しみじみ、戦争がいやになるうつくしい映画です……』。一字一字読んでいくうちに目頭が熱くなりました。

(馬場)

▽Weが生まれました。いかがでしょうか。ご期待に応えられたでしょうか? 執筆諸氏は、創刊号ということで緊張した、と交々語られました。第一の読者である私は原稿を読みながら、勇気リンリンと湧き出るのを覚えました。よかった! これで胸が張れる……と。

▽1月29日、広島教研の第1日目の夜、私を囲む会を開いていただきました。北海道から沖縄まで、80人の方が集まり「家庭科の枠を越え」「母親や生徒と共に読めるものを」などの意見をいただきました。家庭科の持つ根深い問題は、もはや家庭科のみでは解決不可能です。家庭科教師たちよ、Open heart! よろいを脱ぎ捨てよう!

▽本誌は、大学からの参加も得て「新しい家庭科を創るために」を中軸に据え、幅広い特集テーマを打ち出していきます。更に発言欄を充実させます。65頁をごろんの上ぜひあなたも発言をお寄せ下さい。

▽以前の雑誌でなつかしい方に新鮮な2氏が加わり、連載に健筆を振るわれます。ご期待下さい。新刊紹介もしたい。情報も載せたい。80頁という薄さが恨めしい。手作りの雑誌、私もカットを沢山描きました。

▽次号は「父よ、母よ、教師よ」です。

(半田)

▽『家庭科、男子にも!』ドメス出版より発刊、共修をすすめる会編、千五百円。家庭科をめぐる今の問題を網羅。差別撤廃条約・日弁連の意見書も。▽共修をすすめる会誌会四月三日、一時半より婦選会館で、依朋子氏「私の見た教育委員会」も。▽『男も女も育児時間を!』人間らしさの原点にもどるために、働く女にも男にも育児時間が欲しい。「男も女も育児時間を!」連絡会一刊。三百円。送料は何冊でもまとめて二百円。切手可。申込先は東京都中野区江古田4・17・14、増野潔氣付。

▽Weの会、執筆者を囲む会、各地に作ろう。アイデアを寄せて。(ミニですが告知板をご利用下さい。編集部)

▽Weの会知板

Vol. 1 No. 1 1982年3月15日発行

新しい家庭科— ¥500

(年間予約購読料 ¥5,000)

編集兼 半田たつ子

発行人

発行所 / (有)ウイ書房

〒181 東京都三鷹市中原4-4-22

☎0422(46)3608 振替東京6—59867

印刷所 / (有)岩佐印刷所

We の仲間になって下さい

We の仲間をふやして下さい

雑誌の購入には、①直接予約購読②書店予約購読③書店での販売の三方法がありますが、本誌は、当初①の方を募り、核になっていただきます。②③については、現在下記書店で、便宜を計って下さいます。誰でもいつでも書店でWeを購入できるようにするには、何よりもWeの仲間をふやし、実績を作ることが肝要です。あなたのお力添えをお願いします。

予約購読料一年間 5,000円（送料を含む、1部 500円）
ご送金は、郵便振替が最も好都合です（東京 6-59867）。
又は、平和相互銀行つつじが丘支店、普通預金0698412
（有）ウイ書房

——Weの取り扱い店一覧—— お近くの書店に、ぜひ
お声をかけて下さい

（2月17日現在）

福 島	岩瀬書店	0245(23)0366
福 島	福島大学生協	0245(48)5141
浦 和	須原屋	0488(22)5321
東 京	ビッビ	03(295)2580
名古屋	ウニタ書房	052(731)1380
刈 谷	愛知教育大学生協	0566(36)2404
大 阪	旭屋書店	06(313)1191
京 都	松香堂書店	075(441)6905
山 口	白藤書店	0839(25)1212

Vol 1 No. 1 1982年3月15日 発行 編集人 半田たつ子
1982年5月28日 第2刷 発行人

新しい家庭科— 

発行所／（有）ウイ書房 〒181 東京都三鷹市中原4-4-22

☎ 0422 (46) 3608 振替 東京 6-59867

印刷所／（有）岩佐印刷所

（年間予約購読料 ¥5,000）